

天理市埋蔵文化財調査概報

平成4・5年度（1992・1993年）

1996

天理市教育委員会



1. 2・3区調査地



2. 1区木製品出土状況

序 文

天理市教育委員会では毎年10件以上の発掘調査を実施しております。これらはいわゆる緊急調査ですが、平成5年度より「大和・柳本古墳群の保存と活用のための基礎調査」事業がスタートし、学術調査の第一弾として西殿塚古墳についてその周辺の調査を開始しました。この成果については目下整理中でありますが、このほかにも同古墳群では中山大塚古墳、下池山古墳などが奈良県立橿原考古学研究所との合同調査が進行しており、戦後50年にしてようやく、古墳時代の初期における古墳発生と王権の問題について、考古学の立場から発言ができるようになってきたのであります。

しかし、これはようやく始まったばかりの事業であり、忌憚のない御意見を教示していただきたいものであります。

本概報集は、緊急調査で発掘された遺跡の成果の一端を集成いたしました。報告としては不十分なものもありますが、考古学あるいは歴史学会共通の資料として提示いたします。また、この成果は市民共通の歴史遺産として活用されれば幸いに存じます。

最後にこれらの調査にあたり、奈良県教育委員会文化財保存課、奈良県立橿原考古学研究所、天理大学付属天理参考館などの諸機関の方々より御指導と御助言を賜りました。御芳名は省略させていただきますが深く感謝の意を表し厚くお礼申し上げます。

平成8年3月

天理市教育委員会
教育長 金澤 運

例　　言

1. 本概報は、天理市教育委員会が平成4年度および平成5年度に実施した埋蔵文化財の概要報告である。本概報には目次に示した遺跡について調査の概要を収録している。このほかの国庫補助事業による調査は別に報告書を作成している。また西殿塚古墳の調査についても本概報では報告していない。別途学術報告として準備中である。
2. 本概報で取り扱っている御墓山古墳は平成4、5年にまたがって調査を実施した。そして本概報で正報告としたい。平等坊・岩室遺跡は両年度に3回調査を実施したが、ひとつにまとめて報告する。
3. 調査については、社会教育課文化財係の泉 武、松本洋明、青木勘時が分担し、各遺跡の執筆は、それぞれの調査担当者が分担した。なお本概報の編集は泉が行なった。

目　　次

平成4年度（1992）

1. 柳本大塚古墳	(青木) ... 1
2. 平等坊・岩室遺跡（第8次東調査区、第11次、第12次）	(青木) ... 2
3. 東大寺山古墳群・シギ山古墳群の調査	(松本) ... 14
4. 向山遺跡竪々久保地点	(青木) ... 18

平成5年度（1993）

1. 東殿塚古墳（第2次）	(松本) ... 23
2. 西山古墳外堤	(青木) ... 25
3. 長寺遺跡（第12次）	(松本) ... 28
4. 御墓山古墳	(泉) ... 30

御墓山古墳における自然科学分析 天理大学附属天理参考館 金原正明 69
古環境研究所 金原正子

図版目次

巻頭図版 御墓山古墳

- 図版 1. 平等坊・岩室遺跡(1)第8次調査
図版 2. 平等坊・岩室遺跡(2)第11次調査
図版 3. 平等坊・岩室遺跡(3)第12次調査
図版 4. 東大寺山古墳群・シギ山支群(1)
図版 5. 東大寺山古墳群・シギ山支群(2)
図版 6. 東大寺山古墳群・シギ山支群(3)
図版 7. 東大寺山古墳群・シギ山支群(4)
図版 8. 東大寺山古墳群・シギ山支群(5)
図版 9. 東大寺山古墳群・シギ山支群(6)
図版10. 東大寺山古墳群・シギ山支群(7)
図版11. 東大寺山古墳群・シギ山支群(8)
図版12. 東大寺山古墳群・シギ山支群(9)
図版13. 東殿塚古墳2次
図版14. 西山古墳 外堀
図版15. 長寺遺跡12次
図版16. 長寺遺跡12次
図版17. 御墓山古墳空撮(1)
図版18. 御墓山古墳空撮(2)
図版19. 御墓山古墳外観(1)
図版20. 御墓山古墳外観(2)
図版21. 御墓山古墳外観(3)
図版22. 御墓山古墳1区調査状況(1)
図版23. 御墓山古墳1区調査状況(2)
図版24. 御墓山古墳1区遺物出土状況(3)
図版25. 御墓山古墳1区遺物出土状況(4)
図版26. 御墓山古墳1区遺物出土状況(5)
図版27. 御墓山古墳1区遺物出土状況(6)
図版28. 御墓山古墳2区調査状況(1)
図版29. 御墓山古墳2区調査状況(2)
図版30. 御墓山古墳1区遺物出土状況(1)
図版31. 御墓山古墳1区遺物出土状況(2)
図版32. 御墓山古墳1区遺物出土状況(3)
図版33. 御墓山古墳3区調査状況
図版34. 御墓山古墳3区遺物出土状況(1)
図版35. 御墓山古墳3区遺物出土状況(2)
図版36. 御墓山古墳遺物 須恵器1~3 墓輪4, 6, 7
図版37. 御墓山古墳遺物 墓輪1~3
図版38. 御墓山古墳遺物 木製品大刀形8~10 烏形1, 2
図版39. 御墓山古墳遺物 木製品烏形3~6, 16, 72
図版40. 御墓山古墳遺物
木製品石見形盾形12, 13 さしば形7 その他
図版41. 御墓山古墳遺物 木製品笠形13 その他
図版42. 御墓山古墳木製品細部
図版43. 御墓山古墳出土木材の顕微鏡写真 I
図版44. 御墓山古墳出土木材の顕微鏡写真 II
図版45. 御墓山古墳の花粉・寄生虫卵・胞子遺体 I
図版46. 御墓山古墳の花粉・寄生虫卵・胞子遺体 II

挿図目次

図1. 平成4, 5年度遺跡調査地点

- 図2. 調査地位置図 1
図3. これまでの調査地点 2
図4. 第8次および第12次調査の環濠 3
図5. 第11次検出遺構平面図及び出土土器実測図 5
図6. 第11次SD-02遺物出土状況 6
図7. 第11次SD-02出土土器実測図1 7
図8. 第11次SD-02出土土器実測図2 8
図9. 第12次SD-02遺物出土状況および出土土器実測図1 10
図10. 第12次SD-02出土土器実測図 11
図11. 第12次NR-01・SD-00遺物出土状況および出土土器実測図2 12
図12. 東大寺山古墳群とシギ山支群の位置図 14
図13. シギ山支群測量図 16
図14. 調査地位置図 18
図15. 調査区平面・土層図 19
図16. 出土土器実測図 20

図17. 東殿塚古墳の埴丘測量図と調査地点	23
図18. 調査区の平・断面図	24
図19. 調査地位置図	25
図20. 平面および土層図	26
図21. 長寺遺跡の調査地点図	28
図22. 御墓山古墳位置図	30
図23. 「崩陵図」に描かれた御墓山古墳	32
図24. 御墓山古墳埴丘測量図、検出遺構図	34
図25. 遺構断面土層図	36
図26. 1区遺構・遺物出土状況、D・E地点東西断面図	39
図27. 3区遺構・遺物出土状況、及び東西断面図	41
図28. 2区遺構・遺物出土状況、及び東西断面図	43
図29. 須恵器、埴輪実測図	48
図30. 墓輪実測図	49
図31. 烏形木製品A面	53
図32. 大刀形木製品A面	58
図33. 石見型盾形木製品	61
図34. 御墓山古墳復元平面図	64
図35. 御墓山古墳東壁における花粉組成図	76
図36. 御墓山古墳北壁における花粉組成図	77
別図1. 御墓山古墳烏形木製品実測図	
別図2. 御墓山古墳大刀形木製品、石見型盾形木製品実測図	
別図3. 御墓山古墳笠形木製品、さしば形木製品ほか実測図	

表 目 次

表1. シギ山支群古墳表	15
表2. 烏形木製品計測表	54
表3. 大刀形木製品計測表	59
表4. 御墓山古墳出土木材の樹種一覧	66～68
表5. 御墓山古墳における花粉分析結果(1)	78
表6. 御墓山古墳における花粉分析結果(2)	79

写 真 目 次

写真1. 落ち込みSX-01完掘状況	21
写真2. 3区礫石と小土壤	46
写真3. 小土壤の瓦出土状況	46

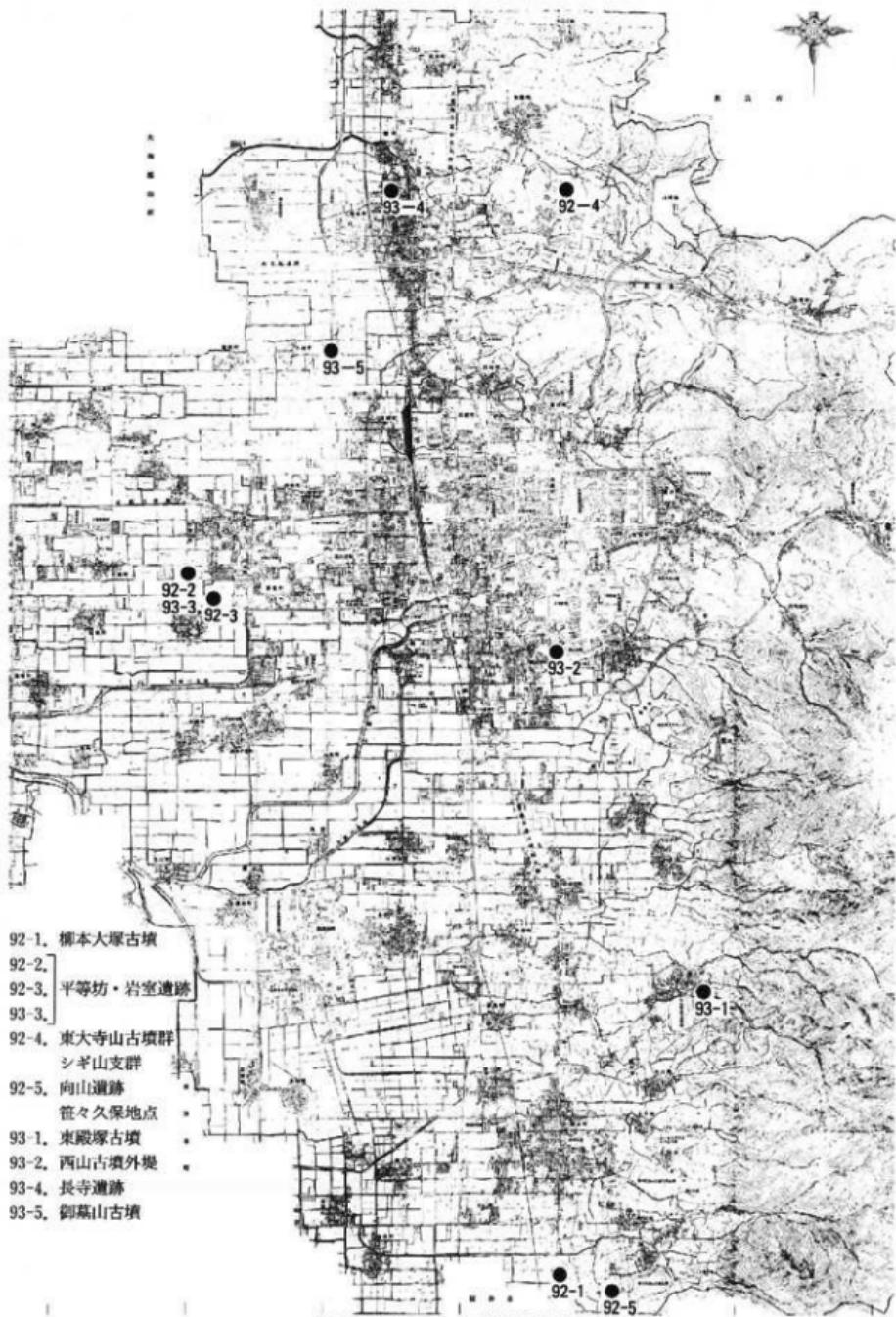


図1. 平成4、5年度遺跡調査地点

平成4年度
(1992年)

1. 柳本大塚古墳——柳本町

I はじめに

柳本大塚古墳は、天理市南部の柳本町大字大塚に所在する全長約92mの南面する前方後円墳である。内部主体は竪穴式石室で銅鏡、鉄片、木棺片、朱の付着した板石等の出土が伝えられる。また、後円部墳頂の小石室より「長宜子孫」銘の径約40cmの大型内行花文鏡が出土している。周辺施設では葺石のみが認められ、周濠や埴輪の樹立は確認されていない。

今回の調査は、資材置場の造成に伴い後円部西側の墳丘裾等の範囲確認を目的として実施したものである。調査は平成4年4月16日より開始し、同月21日に終了した。総調査面積は約65m²であった。

II 調査の結果

3ヶ所の調査区を設定し調査を進めたが、北側の2ヶ所のグリッドではいずれも弥生末～庄内期の土器を含む砂層の堆積が厚く、東西方向の谷地形を確認したに過ぎない。南側のトレーニングでは地山が西方へ緩く傾斜するが周濠等の施設は確認されなかった。また、埴輪等の遺物の出土も見られず従来の見解通りの調査結果であり新たな知見を得るには至らなかった。(青木)



図2. 調査地位置図 (1/2500)

2. 平等坊・岩室遺跡（第8・11・12次）——平等坊町・岩室町

I はじめに

平等坊・岩室遺跡は、天理市中央部の平等坊町および岩室町一帯に所在する弥生前・中・後期の全期間を通じて営まれた拠点的な集落遺跡である。これまでの調査により各時期の集落を囲むする環濠を確認し集落の拡大、縮小等の変遷が追求可能なほどの内容の成果が得られている。それらの調査成果は平成3年度より開始したマンション建設に伴う第8次調柉によるものが資料的に最も多く、その後の周辺における第9・10・11・12次調柉の結果と併せて集落構造の実態把握の材料を提供するものとなっている。ここでは前年度からの継続である第8次調柉、平成4年度の第11次調柉および平成5年度の第12次調柉の各次の概略についてまとめておく。

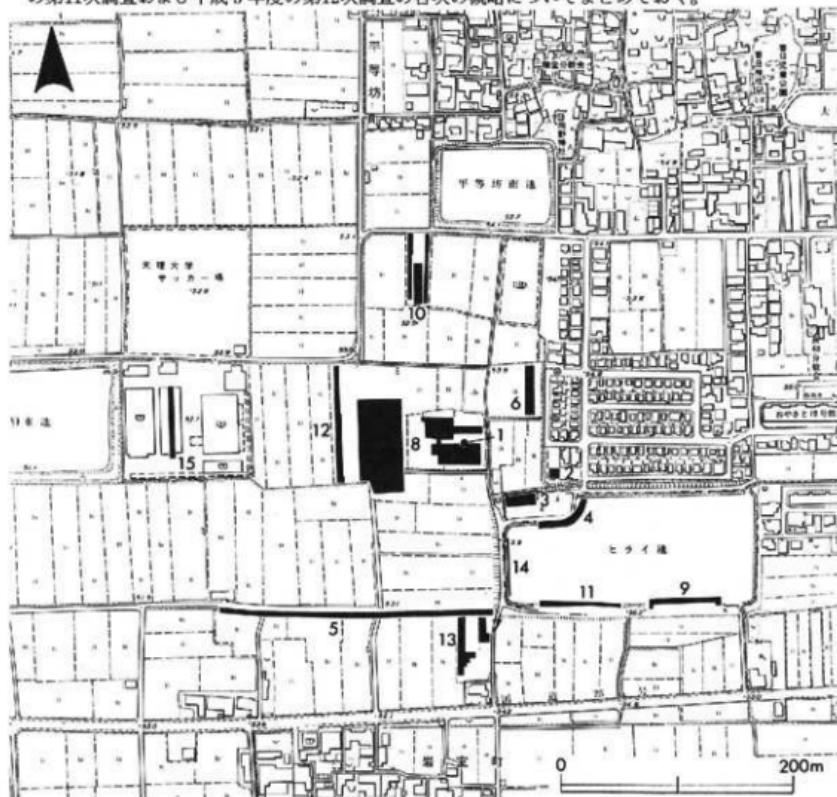


図3. これまでの調査地点 ($S=1/5000$) ※数字は次数を示す

II 第8次調査（西調査区南半地区・東調査区）

調査地：平等坊町176番地他

調査原因：大規模マンション建設

調査期間：平成4年1月8日～平成4年8月31日 調査面積：約2300m²

平成4年の年明けから調査の終了までの期間については、前年度調査区（西調査区北半地区＝8W-II～IV区）の南側において西調査区南半地区（＝8W-I区）の調査を実施した。また、併行して東調査区土壤状高より確認調査区（＝8ET区）、東調査区北トレンチ（＝8EN区）、東調査区南トレンチ（＝8ES区）の調査も実施した。以下、各調査区の主要な成果について記す。

(1) 8W-I区

前年度調査区よりも標高値が高く、北半調査区に比べても遺物包含層の堆積が希薄な状況を呈し一面で弥生前期～古墳時代の各時期の土坑、小穴等を多く検出している。主要な遺構としては、北半調査区南端で検出した大溝SD-09、SD-10、SD-11の弥生前期後半期の環濠の延長部分を確認している。これらの大溝は一部重複関係で不明瞭な点が見られ今後の出土遺物の検討により前後関係を明らかにしたい。他に弥生後期の大溝SD-05の延長も確認している。

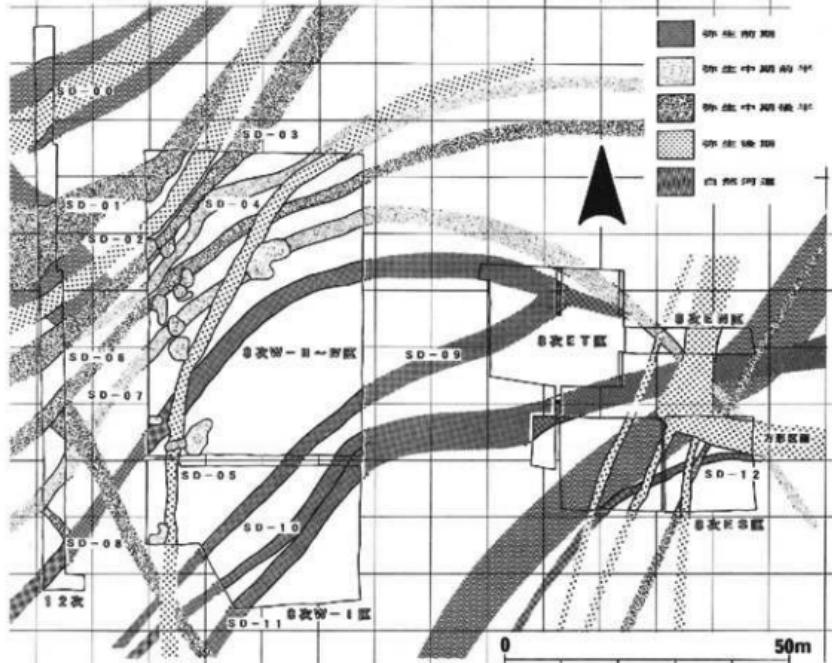


図4. 第8次および第12次調査の環濠 (S = 1 / 1000)

(2) 8 E T 区

東調査区の北側に調査以前より畠として存在した土壌状高まりの確認のための調査区である。前年度の調査で奈良時代の掘立柱建物や瓦類等の寺院関連遺物の出土が多く、当該地が基壇等の施設であることも考えられたため調査を実施した。結果として、微高地状の地形を方形に整形、盛土を施して築かれた土壌であることが判明した。上下2面の遺構面において柱穴群を検出しており、上面では概ね室町時代頃、下面で奈良・平安期の建物群をそれぞれ確認している。

(3) 8 E N 区

8 E T 区の裾部から東側へ延長した調査区である。中世以前では当調査区の中央で浅い谷地形となっていたようである。弥生中期以降はこの地形を利用して数時期にわたり大溝の掘削がなされている。主要な遺構としては前年度調査時の弥生中期前半期の大溝 S D-07 の延長を検出したほかに調査区の中央で環濠内部の特定区画の可能性が高い弥生後期後半期の大溝を検出している。この大溝は後述する 8 E S 区北東部検出の大溝と連結して方形区画を形成するものと考えられる。

(4) 8 E S 区

調査区の北西部で弥生前期後半期の大溝 S D-10・11 を検出している。また、さらに集落内部に近く前期前半期頃の環濠となる大溝 S D-12 を確認している。他に弥生中期末～後期後半までの平行した位置関係を呈した溝群があり、すべてが北東部の大溝に集約されるように掘削されている。これらの遺構は弥生～中世の遺物包含層の直下で検出しており遺構検出面の標高値も高く最初の前期集落の立地が微高地上にあったことを示している。

(5) 出土遺物

2年次にわたる調査の結果出土した資料の数は膨大なものであり、弥生全期間はもちろん古墳前期～中・近世まで併せてコンテナに約5000箱にもおよぶ量であった。調査終了後より隨時遺物整理を進めているが未だその全容について明らかにできる状況には及ばず、本稿でその一端を記すのも困難な次第である。ここでは大幅に割愛せざるを得ないが、いずれ本報告のかたちでまとめあげたい。

III 第11次調査

調査地：岩室町42番地

調査原因：溜め池改修

調査期間：平成4年11月11日～平成5年1月31日 調査面積：約60m²

第11次調査は、当遺跡推定範囲の東端に該当し、ヒライ池を挟んで対岸の第4次調査地の真南に当たる地点で実施した。そのため、対岸における調査時に検出されている環濠の延長を確認することを目的として調査を進めた。調査は、ヒライ池の南岸西側に幅1～3mで延長距離約40mのトレンチを設定しておこなった。前年度の第9次調査時と同様に現状の池の堤下方における調査であったため遺構面が大幅に削平されていたが、前回とは異なり、より集落内部に近かつたた

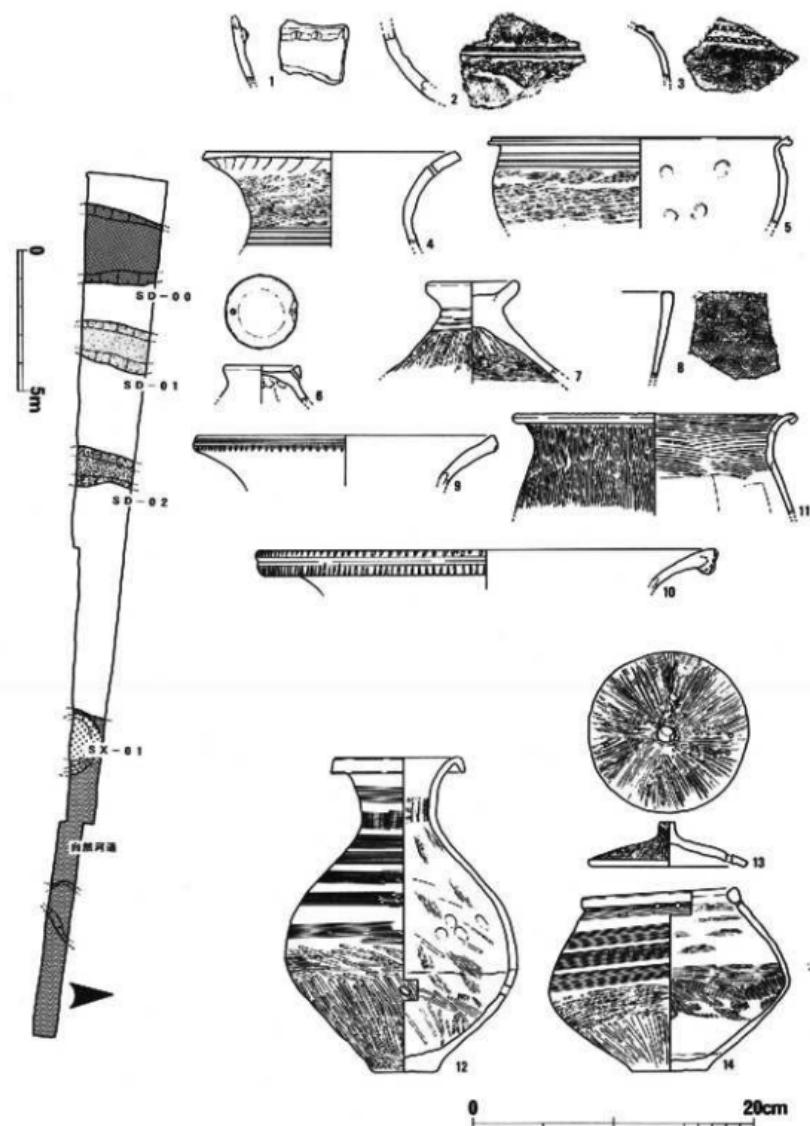


図5. 第11次検出遺構平面図 ($S=1/200$) および出土土器実測図 ($S=1/200$)
1~11: SD-00 12~14: SD-01

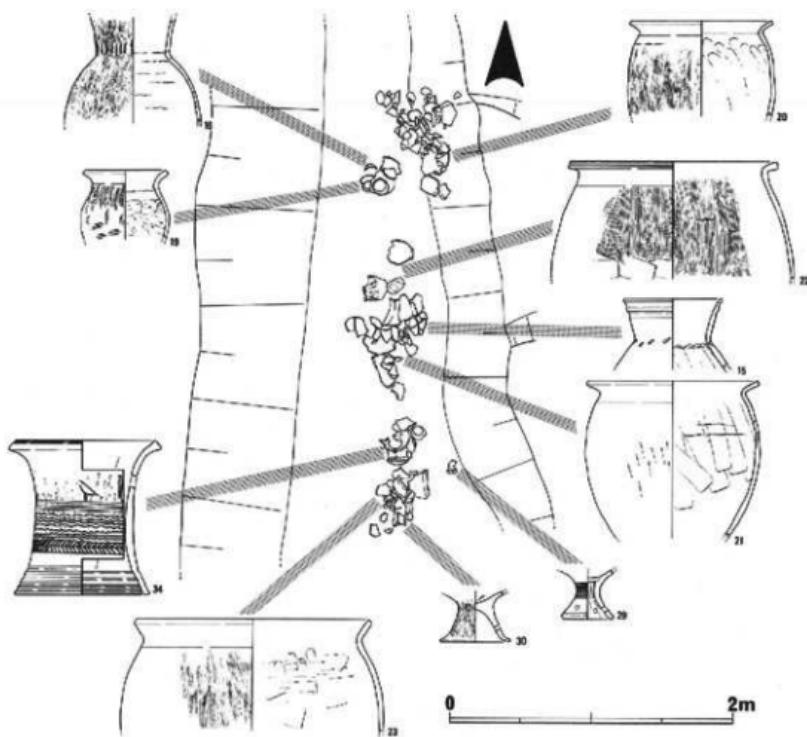


図6. 第11次S D-02遺物出土状況 (S=1/40) ※土器図S=1/8

めか多くの遺構を検出することができた。以下、簡単に調査の概略をまとめておく。

主要な検出遺構 集落東端縁辺を囲郭する環濠となる大溝を3条検出している。西端の大溝SD-00は弥生前期の遺物を多く出土し、縄文晩期の突帯文土器も少量含まれていた。中期前半までの土器片が出土しており、土層断面の観察より数回の再掘削が考えられる状況であった。次に、大溝SD-01では弥生中期前半～中葉の土器が主体となって出土している。大溝SD-02では溝底面直上より多くの土器が集中して出土し、弥生中期後半～後期初頭までの時期幅で埋没していたことが判る。以上の大溝群のほかに弥生前期の土坑、中期の住居跡、後期の土坑(S X-01)等の遺構も検出している。これらの遺構はほとんど調査区西半の安定した基盤層上に分布しており、東に向かい不安定な基盤で標高値が下がって浅い谷状地形を呈している。この谷地形は古墳後期頃までには完全に埋没していたようである。

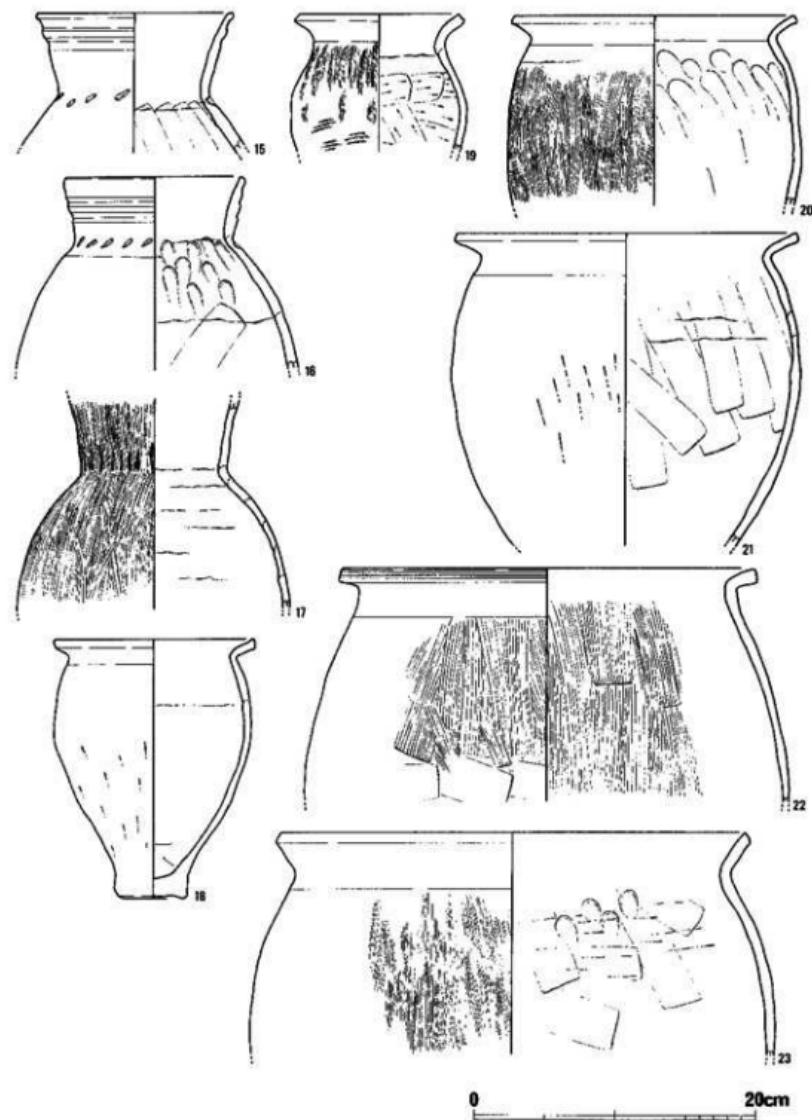


図7. 第11次SD-02出土土器実測図1 (S=1/4)

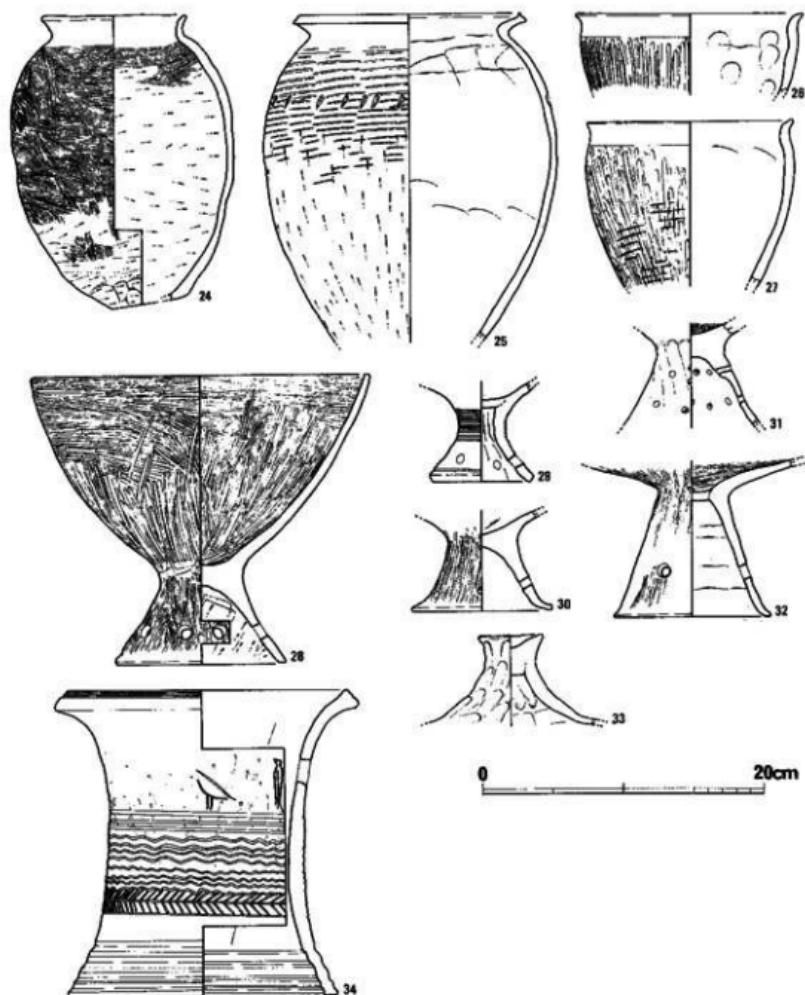


図8. 第11次SD-02出土土器実測図2 (S=1/4)

出土遺物 弥生前期～後期の土器類やサヌカイト製石器類、古墳後期の円筒埴輪や形象埴輪の破片が多く出土している。特筆すべき遺物としては大溝SD-02出土の記号文あるいは絵画の見られる器台がある。この器台には外面に小さく水鳥の姿をした人物の正面と側面の様子が示されている。当時の呪術者の姿であるのかもしれない。その他の土器については実測図を参照されたい。

IV 第12次調査

調査地：平等坊町175-1・2番地

調査原因：駐車場整備

調査期間：平成5年5月24日～平成5年7月20日

調査面積：約400m²

第12次調査は第8次調査地に建設される大規模マンションに付随した駐車場の造成に伴い実施したものである。そのため前年度調査西調査区の大溝群の延長部分の確認をおこなうことができさらに西側における環濠の在り方を検証する成果が得られた。調査は幅4mを基調とした南北100mのトレンチを設定しておこない、計7条の大溝を検出した。その結果一部の環濠が調査地付近で途切れることを確認し、環濠の用途の変遷を窺い知ることができた。以下、その概略を記す。

主要な検出遺構 隣接する第8次調査西調査区の大溝群のうち大溝SD-01、02、03・04、06および07の延長部分を検出したほか、さらに北側で新たにSD-00を確認している。当調査地で検出されたこれらの環濠群は弥生中期前半より後期末～古墳初頭の時期のものであるが、大溝SD-01が集落北西部の最も外側に近い最縁辺部分であることと、ここで弥生中期後半期の環濠帯が途切れて北側の自然河道に連結するかたちとなり必ずしも環濠が集落周縁を全周するものではないことを縁辺部環境の変遷を追うことで裏付けながら再確認することができた。また同じく中期後半の大溝SD-07では集落内部へ通じる枝溝状の溝が連結しており、取水あるいは排水溝を兼ねた区画のための溝が集落北西方向より内側へ延びるように思われた。

調査区北側の大溝SD-00とSD-02では、ともに堰のような水利施設が溝内に設けられ、前代に引き続き集落北西の縁辺に近い自然河道と密接な関わりを示しているのが判る。大溝SD-00の掘削以前に流れていた自然河道は概ね弥生前期～中期初頭頃の間に埋没しており、その埋没過程の堆積土中からは流入あるいは廃棄されたと考えられる土器片等の遺物が見られた。その上部の二次堆積土中より結晶片岩製の石包丁の未製品や松菊里型の朝鮮系無文土器が出土している。

前記の大溝群のほかに検出された遺構には、土坑、小穴、柱穴や竪穴住居の痕跡などがある。いずれも大溝SD-06以南に漸次多くなり、時期も弥生中期以降に限られる傾向がある。柱穴には大型の掘り方をもつものがあり、調査範囲が限られたため規模は不明であるが大型建物の一角を成すものであると考えられる。また、後期以降古墳前期までの遺構、遺物も多くなり、引き続き集落が存続してこの辺りに拡張していた様子を示している。

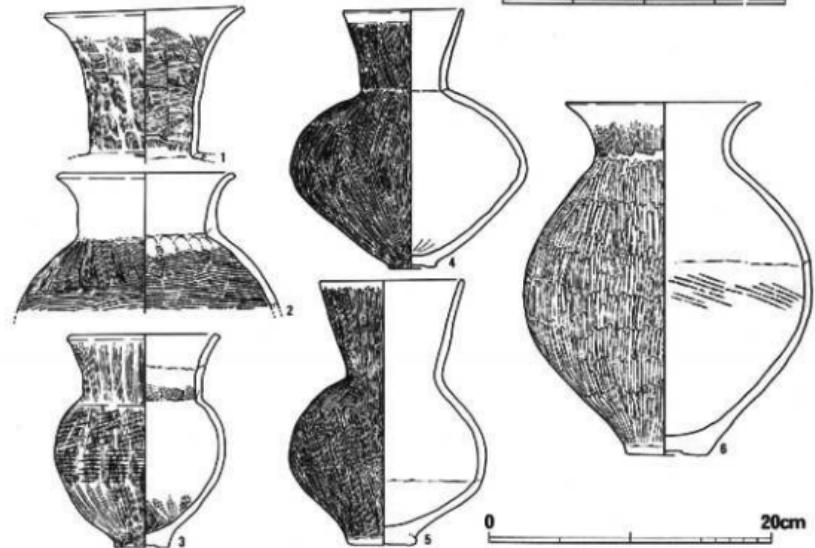
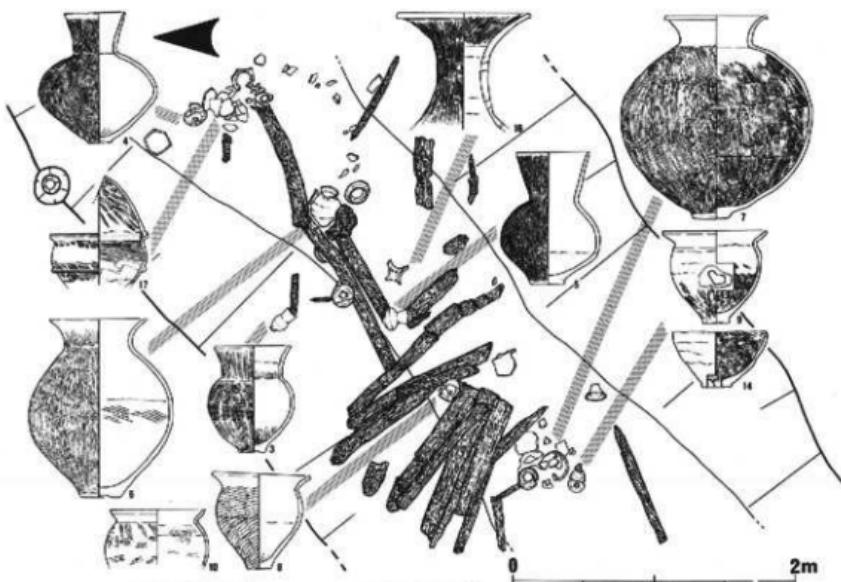


図9. 第12次SD-02遺物出土状況(S=1/40 土器S=1/8)および出土土器実測図1(S=1/4)

出土遺物 第12次調査では弥生前期～古墳前期の土器類を中心にしてコンテナ約100箱程度の量の遺物が出土している。その大半は弥生中期のもので占められており、次いで完形土器類を多く含む弥生後期のものとなっている。弥生前期にまで遡る土器類は極めて少なくなつておらず、ほとんどが調査区北部の自然河道や中期以降の大溝埋土中に混在していたものである。特筆すべき遺物としては北部の自然河道より出土した朝鮮系無文土器が注目される。この土器はほぼ完形の状態で出土しているが、共伴遺物に乏しく具体的な帰属時期が特定し難い資料である。形態的な

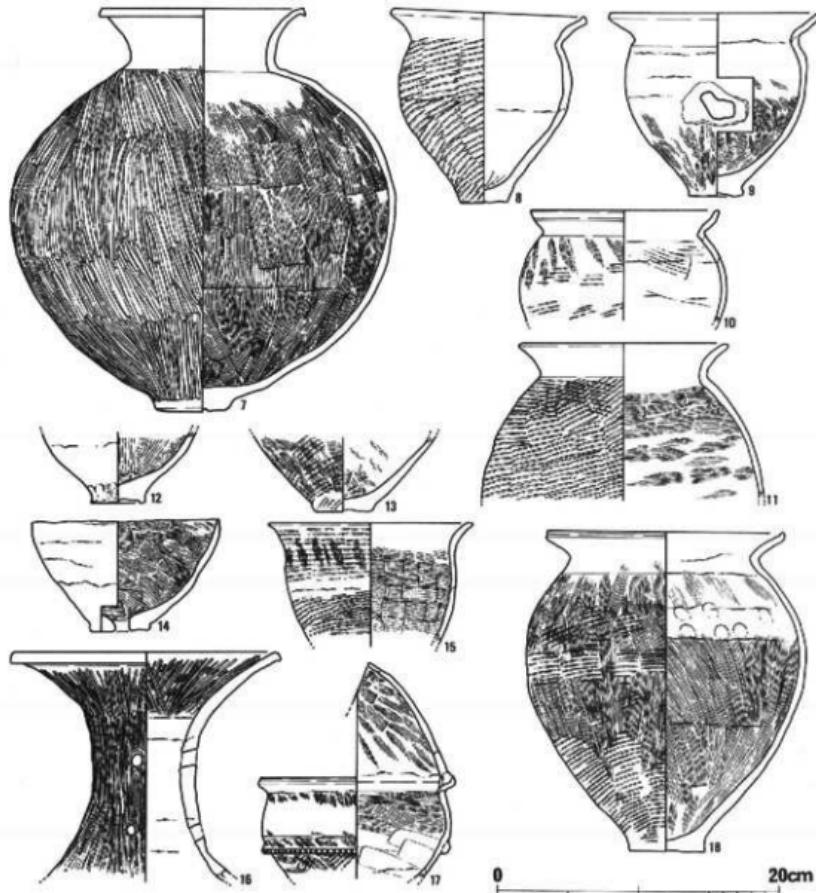


図10. 第12次SD-02出土土器実測図2 (S=1/4)

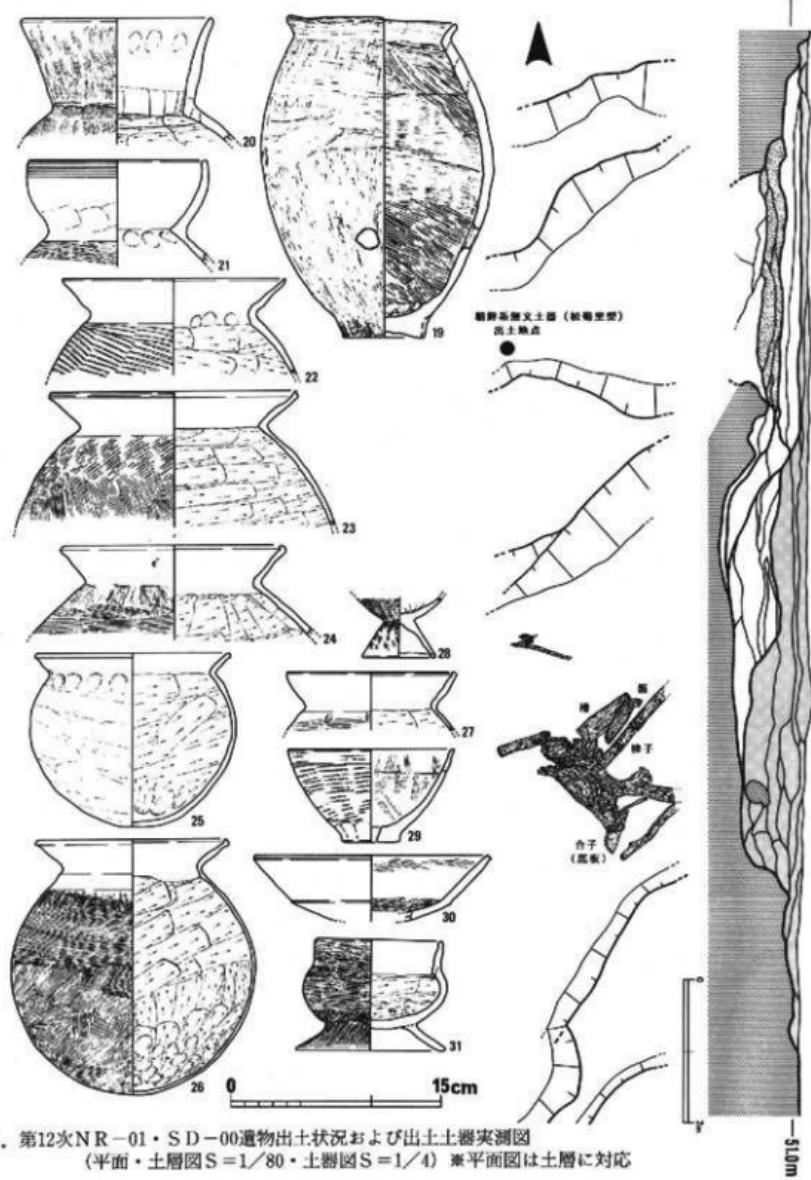


図11. 第12次N R-01・S D-00遺物出土状況および出土土器実測図
(平面・土層図S=1/80・土器図S=1/4) ※平面図は土層に対応

特徴や底部の製作技法、内外面の調整手法等から松菊里型と呼ばれるタイプのものであることが判る。北部九州を中心に中・四国にも数点の資料が出土しており当遺跡のものが現在のところ最も東に伝播した例であると言える。焼成状態や細部の特徴が極めて類似するものの、直接的に朝鮮半島より搬入されたものではなく在地で製作されたものであろう。

その他の土器類で特徴的なのは弥生後期以降に東海系、近江系などの外来系土器が目立ち、在地産のものが多く認められることが挙げられよう。また、弥生後期末～布留式直前の土器を主体とする大溝S D-00出土土器には東海系のほかに山陰系の土器が見られた。

石器類では、結晶片岩製の石包丁未成品や原石、各種のサヌカイト製石器類が多く見られる。木製品では各大溝より大小の木器が出土しており、鋸、鉤等の農工具類、梯子や柱材等の建築部材や槽あるいは盤になる容器類が見られた。

以上、いずれも現在のところ遺物整理途中にあり、全容については正式報告で明らかにしたい。

V ま と め

平成4・5年度に実施した平等坊・岩室遺跡の調査はこれまでの当遺跡についての知見を一新してしまうほどの内容であった。その結果、当遺跡が改めて弥生拠点集落としてその変遷過程とともに再評価されるのは言うまでもなく、奈良盆地最大の拠点集落とされる田原本町唐古・鍵遺跡との比較検討の好材料となったことは喜ばしく思われる。しかしながら、膨大な未整理遺物の蓄積があり、今後の整理作業を経て知り得る事柄が確かに多いのも事実である。

現在のところ、表面的に見える知見では集落の東西の最大幅が約250m前後であり、集落の北西方向の自然地形との関係で多重環濠が巡らされること、その用途の変化が様々な要素により考えられること、それに弥生後期初頭頃に集落の囲郭形態が一変して内部に特定区画らしき閉郭施設が出現することなどが言える。

以上の事象のさらに具体的な様相、時期的な推移過程や集落内の個々の要素等についても検討すべき点が多く早急な資料整理の進展が期待されるが、これらの諸問題に関しては今後の周辺の調査動向とも併せて順次検討結果の公表に努めたい。(青木)

3. 東大寺山古墳群・シギ山支群の調査——櫟本町

I はじめに

天理市の北部、櫟本町に所在する通称東大寺山丘陵は、奈良盆地の東山麓に迫り出した標高132m、比高70mほどの小高い山で、鶴川と高瀬川に挟まれた所にある。東大寺山古墳群は、大和を代表する前期古墳群の一つとして知られているが、昭和45年度にかけておこなわれたシャープ総合技術開発センターの建設にあたって、多数の横穴式石室がともなう後～終末期の古墳群や環濠とともに弥生時代の高地性集落が発見されている。

シギ山支群の調査は、昭和62年度においてシャープ総合技術開発センターの拡張事業によって計画が始まり、尾根筋に沿って試掘調査を実施した。その内、4～7号墳まで、石室調査を継続した。その後、造成にともなう計画変更がなされ宅地造成として文化財調査を継続することとなり、平成3・4年度調査として残りの1・2号墳と柱穴遺構ならびに3号墓の調査をおこなったものである。



図12. 東大寺山古墳群とシギ山支群の位置図 ($S = 1/5000$)

II 調査の概要

シギ山支群は、東大寺山丘陵の北辺に位置し、榎川に面した東西方向に延びる尾根筋に立地している。そのため榎川に面した谷筋には視界があるが、奈良盆地の視界は極めて限られる。

a) 1~7号墳

標高90~116mの尾根筋に沿って6基の墳丘(1・2・4~7号墳)が尾根筋の先端から頂上峰まで整然と並んでいる。シギ山支群の尾根筋は頂上峰が標高119mの南北に延びた峰筋で、榎川に沿って東西方向に向きを変えながら丘陵の主脈を形成している。シギ山支群を構成する墳丘は、いずれも南向き開口の横穴式石室で、石室の開口方向に従って墳丘の立地条件も頂上峰から東西に延びた尾根筋に求められたものとも推測される。また支群を形成した墳丘は、尾根筋先端で並ぶ1・2号墳、尾根筋頂上側で並ぶ6・7号墳、尾根筋の中程に1基づつ個別に立地した4号墳、5号墳に区別できる。埋葬施設は横穴式石室だが、石材盗掘が激しく天井部や壁面の上半部を残すものはない。また2・6号墳は、床面と墓壙だけであった。墳丘の大きさや石室の規模、石材の用い方など古墳ごとに異なり変化に富む。しかし時期は出土した須恵器から6世紀後半に求められ、シギ山支群の形成は時期的には限られる。

表1. シギ山支群古墳表

古墳名	墳形 (規模)	時期	埋葬施設 (規模)	出土遺物・備考
1号墳	円墳 (径17m)	後期	横穴式石室 (全長7.5m、玄室長3m)	石材取りにより天井部なし。 須恵器、金環、鉄鎌
2号墳	円墳 (径24m)	後期	横穴式石室 (墓壙長9m、幅4m)	石材取りにより石室はほぼ解体。 須恵器破片、土師器破片、釘及び鉄器片
3号墳		後期	箱式木棺直葬 (木棺長2.25m、幅0.39m)	釘
4号墳	円墳 (径16m)	後期	横穴式石室 (墓壙長5.5m、幅3m)	石材取りにより天井部と側壁上部がなし。 須恵器
5号墳	円墳 (径15m)	後期	横穴式石室 (墓壙長7.5m、幅3.8m)	石材取りにより石室はほぼ解体。
6号墳	円墳 (径19m)	後期	横穴式石室 (墓壙長9.2m、幅3.7m)	石材取りにより石室解体。石組暗渠。 須恵器、土師器
小石室 (6号墳)		後期	縦穴式小石室 (全長1.12m、幅0.7m)	6号墳の墳丘内部、同墓壙の東側に配置した石室。須恵器
7号墳	円墳 (径15m)	後期	横穴式石室 (全長5.5m、玄室長3.3m)	石材取りにより天井部と側壁上部がなし。 須恵器壺、釘

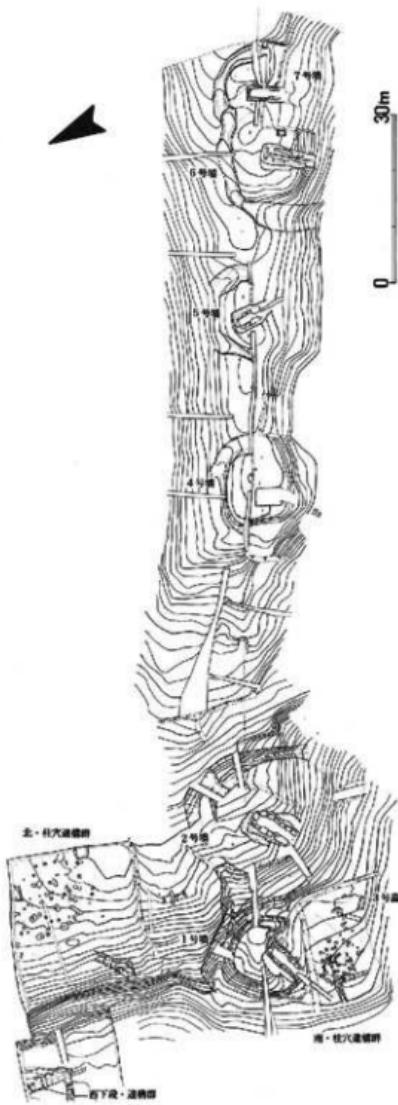


図13. シギ山支群測量図

b) 小石室

6号墳の墳丘部から全長1.2m 幅0.7mの小型縦穴式石室が出土している。石室は未盜掘で、天井部まで残っていた。同古墳の墓壇の東側に隣接して小石室を掘り込み、主軸は南北で墳丘墓壇と平行に築いていた。天理市石上・豊田古墳群、狐ヶ尾6号墳でも石室とは別に墳丘上に掘り込まれた小石室が見つかっており、同地域では同様な類例がある。石室内部は床面に配石があり、棺台として木棺を埋葬していたものと推測される。

c) 3号墓

1号墳の南側で検出した木棺直葬の墓壇である。墳丘の有無はわからない。埋葬施設は長さ2.8m 幅0.7mの墓壇に箱型木棺を埋葬した遺構で、墓壇内部から鉄釘が出土している。副葬品はない。墓壇の主軸が1・2号墳の石室とほぼ一致していることから、シギ山支群を構成する埋葬施設と思われる。

d) 北・柱穴遺構群

1・2号墳の北側で、多数の柱穴遺構を検出した地点である。シギ山支群を形成する丘陵筋と柏川が流れる谷筋との間には、段丘状で比較的平坦な地形が支群の北側に広がっている。北・柱穴遺構群はこの平坦部に所在する建物遺構の痕跡で、調査ではその一部分を検出したにすぎない。建物の規模や形態については本報告にゆだねるが、柱穴とともに検出した土坑から7世紀代の須恵器・土師器と、平瓦類が出土している。シギ山支群が構築された後、古墳群の北面に沿って平坦部が造成され建物が並んでいた様子が推測される。

e) 南・柱穴遺構群

1号墳の南側で、多数の柱穴遺構を検出した地点である。建て変えと思われる複数の柱穴があり、西辺にL字状の区画溝がある。出土遺物には7~8世紀の土器片や平瓦類がある。

f) 西下段・遺構群

北・柱穴遺構群の西側で、L字状の溝遺構を検出している。北・柱穴遺構群が立地した平坦部より7m谷筋に下がった地点で、現状でも平坦部が残り、建物遺構の存在が予測される。

III ま と め

東大寺山古墳群を構成するシギ山支群から6基の古墳と1基の木棺墓、墳丘とともに小石室を検出した。尾根筋に沿って整然と並ぶ石室と墳丘は、古墳群の構成を検討するに興味深い資料である。また古墳群の周辺から検出した柱穴遺構は、支群の形成後に建てられた建物遺構の痕跡である。同古墳群の高塚支群では、丘陵斜面においてコ字型に造成した平坦部が検出され、その囲みと社殿と思われる柱穴遺構を検出している。東大寺山丘陵の西面から柏川に面した北面にかけて、丘陵の山麓に多数の平坦部が所在し、柱穴遺跡の存在が考慮される。

4. 向山遺跡・久保地点——柳本町

I はじめに

向山遺跡は天理市南部の柳本町に所在する古墳前期の集落遺跡である。東方には大型前方後円墳である渋谷向山古墳（景行陵）が近在し、周辺にも同時期の遺物散布が認められる地域が点在することから前期古墳出現期の基盤となる集落圏内の一角であったことが考えられるところである。また、南方では桜井市郷向遺跡にも近く、前代より引き続き古墳出現の背景を担っていた地域であったことも推察されよう。

今回の調査は、資材置



図14. 調査地位置図 ($S=1/5000$)

場造成に伴う事前調査として実施した。当遺跡における最初の発掘調査であり、小面積の調査であったがその成果が期待される調査であった。現地における調査は平成4年7月28日より開始し同月30日に終了した。総調査面積は約50m²であった。

II 調査の概要

1. 層序

調査区の北端では耕作土直下で地山面となるが、南方および西方へ向かい緩斜面を呈しながら地山は現地形と同様に下降する。その上部には庄内～布留期の土器片を含む遺物包含層の堆積が見られ、遺構検出面はこの下部の地山直上であった。

2. 検出遺構

調査区南端のみで検出しており一部調査区を拡張して確認作業を進めた。検出された遺構には

住居跡状の不明落ち込みがあり、内部に土坑、小穴、蛇行する小溝等があった。いずれの埋土よりも布留期の土器片の出土が見られた。以下、その概略をまとめておく。

著ち込み SX-01

検出長東西約4m、南北約2.5m、深さ0.2mの不整形な落ち込みである。明確な平面プランは判別し難いが、西北隅の一部が突出した南北に長い長方形の住居跡に類似した形態であると考えられる。側壁に沿って3ヶ所に小穴が付随し、内側にも小穴が1基存在する。内部には径0.5m前後、深さ0.2mの同規模の土坑が2基南北に並ぶかたちで配置され南側の土坑にのみ蛇行した小溝が取り付く。この小溝は土坑に向かって傾斜しており取水のための導水路として機能していたようである。

遺物では、埋土中より少量の叩き壺片を伴って布留式土器の壺、小型鉢、高環、小型器台等の土器片および完形の小型丸底壺が出土している。また、床面相当部分から直上の堆積土や落ち込み内の土坑からは数mmから2cm程度の大きさまでの緑色凝灰岩(グリーンタフ)の碎片や剥片が多く出土しており、埋土のすべてを水洗いした結果フィルムケース5本ほどの量であった。これらの石材よりこの住居跡状の落ち込みの用途が窺い知れよう。

3. 出土遺物

土器類：遺物包含層および落ち込み S X-01より出土しているが全体的な量は絶じて少なくコンテナ 1 箱弱であった。ここでは落ち込み S X-01出土土器のみ説明を加えておく。

1～3は布留式の甕である。定形化以後の布留甕であり、内凹口縁と内側に肥厚した端部をもつ。1にのみ外面のハケ調整が残り、他は摩滅のため確認できない。

4は、外面叩き目の臺もしくは鉢の底部片である。内面にはナナメ方向のハケが見られる。

5～7は小型丸鉢である。いずれも精良な胎土を用いた精製品であり、それぞれに内面調整は指頭ナデ、板ナデ、ヨコ方向のミガキと多様である。外面は摩減のため調整不明であるがおそらく

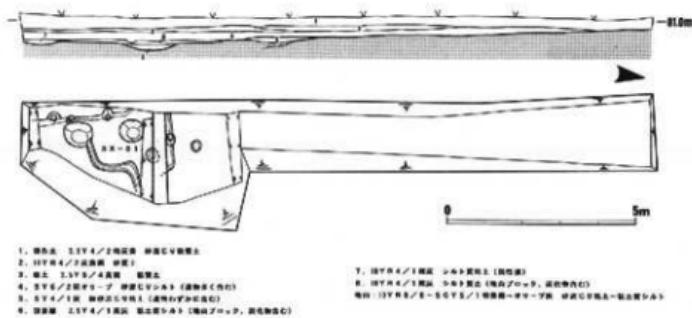


図15. 調査区平面・土層図 (S=1/150)

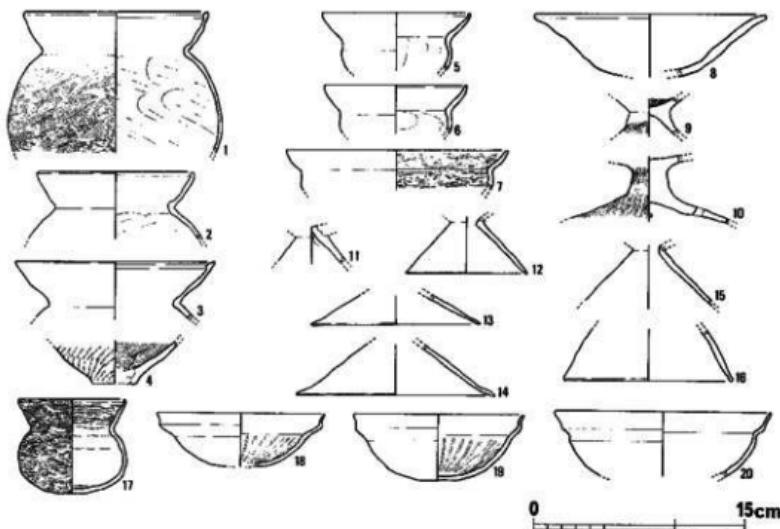


図16. 出土土器実測図 ($S = 1/4$)

らく横方向の細かいミガキが施されよう。

8の高环は、外面の稜が鈍くほとんど認められないもので环底部外面にわずかにタテ方向のミガキが残る。9および10は、小型低脚で楕型环部をもつ高环の脚部である。9の内面にのみ赤彩が施されている。これらの高环の胎土はいずれも精良なものである。

11~16は精製品の小型器台である。13~16の脚部を除けば、11のみ中実のタイプである。その他はすべて中空の小型精製品であり、調整はヨコ方向の細かいミガキが施される。

17は口縁部の半分を欠くもののほぼ完形の小型丸底壺である。器壁は薄く、全体に丁寧なヨコ方向の細かいミガキ調整が施された精製品である。外面底部にはケズリが看取できる。

18~20は有段屈曲口縁の鉢である。18・19の小型品と20の大型品の両者があるがいずれも精良な胎土をもつ。小型品には内面に放射状ミガキが認められる。いずれも内外面にはわずかにヨコ方向の細かいミガキ調整が残る。

これらの土器類の附属時期は小型精製土器類の様相および布留窓の形態から概ね布留式盛行期(矢部編年2式に相当)に該当するものと考えられよう。

石材類: 石製品製作時に生じた石屑が多く出土している。石材はすべて明緑灰色の色調を呈した緑色凝灰岩(グリーンタフ)である。最大のもので幅1cm、長さ2cm前後の大きさの剥片があるが、ほとんどが数mm程度の碎片で占められている。

III まとめ

今回の調査では、小規模な調査面積であるにも拘らず大きな成果を得るに至った。唯一の検出遺構であった住居跡状の落ち込みは、石製品製作に関わる工房としての機能が考えられ、その規模や形状の全容は判然としないものの当該地周辺との同時代の歴史的な背景から周辺古墳群との有機的な関連が示唆されるものであった。

先述の土器類の時期や周辺の大型古墳の在り方から考えてもそれらの副葬遺物としての石製品や玉類の製作に関わる施設であったことが容易に推察されるものであり、古墳築造時の造営集落と古墳との関係を示す好例であったと言えよう。なお、当該遺構の立地は調査地の南方および西方への緩斜面状にあり、調査区外にも同様の遺構が群集することも考えられる。そのため今後も調査地の南方あるいは西方における開発行為に留意する必要があろう。(青木)



写真1. 落ち込みS X-01完掘状況

平成5年度
(1993年)

1. 東殿塚古墳（第2次）— 萱生町

I はじめに

天理市萱生町に所在する東殿塚古墳（全長180m）は、西殿塚古墳（全長230m）とともに大和古墳群を構成する盟主墳の一つである。調査は同古墳の後円部北側にある掘り割り状の区画域において盛土造成による現状変更が起り、壁面工事によって掘り割りの内部を掘削するため、平成4年4月14日～4月21日にかけて事前調査を実施したものである。なお本調査の次数を第2次とした理由は、櫻原考古学研究所による磯城・磐余地域の古墳測量調査（昭和52年度）を第1次調査としたためである。

II 調査の概要

後円部の北側、萱生町の集落との間に幅25mの東西に区画をもつ掘り割り状の地形がある。掘り割り状の地形は方形に区画する整然とした落ち込みで、同古墳の東側に残るため池とともに東殿塚古墳の掘り割りの一部と考えられる。この北側に区画されている掘り割りは、地形に沿って東から西へ落差（標高130m～134m）をもつ階段状の畝になっており、東殿塚古墳が築造された当初から掘り割りの底面を山裾に向かって傾斜させていたものと推測する。調査地点は現状の地表面が標高132.5mの掘り割りでも東によった高位側にあたる。調査後は盛り土がなされ、地表

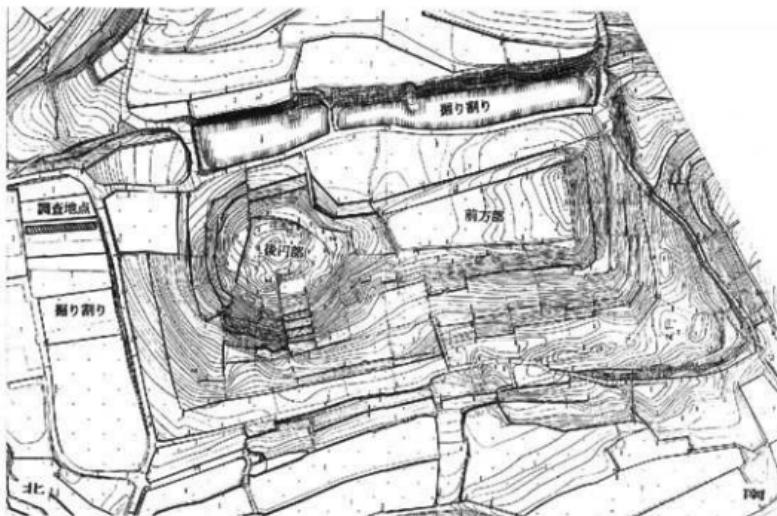


図17. 東殿塚古墳の墳丘測量図と調査地点

面の現状が変わっている。調査区は南北22m、幅2mで設定した。

a) 平安時代後期の包含層

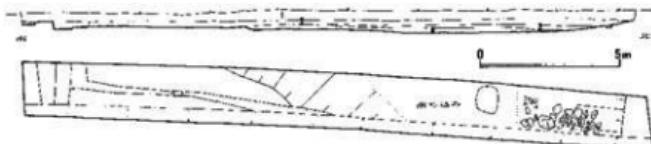
調査区の中央部からやや北半部にかけて幅12m、検出した深さ50cmの落ち込みを検出した。掘り割りの内部には、深さが50cmまで1~3層(図18)の層位が形成され、耕作によって土壤改良が加えられながら現在の地表面を形成している。掘り割り内部にある階段状の畝は、そうした過程で区画されたものと解され、掘り割り内部がすでに耕作による削平をうけていた。落ち込みは、削平の及ばなかった部分が残っていたものと推測する。落ち込みの内部に堆積していた黒灰色粘砂質土(図18、4層)からわずかであるが土師皿など平安時代後期の土器が出土している。落ち込みの北岸には萱生町の集村があり、大和に残る大字集落の大半が莊園時代から系譜をもつものが多く、すでに平安時代から掘り割りの北岸に現在の萱生集落の前身が所在していたのかもしれない。出土した土師皿は、そうした集落遺跡にともなう可能性を考える。

b) 古墳時代の包含層

調査区の中央部から北半部分にかけて検出した落ち込みは、黒灰色粘砂質土(図18、4層)のみであった。そのため古墳時代の遺物は出土せず、東殿塚古墳に関係する明確な包含層は得られなかつた。しかし、落ち込み内部に堆積していた黒灰色粘砂質土が古墳時代から平安時代にかけては、長期にわたって徐々に堆積した可能性もある。平安時代の土師皿はその過程で混入したものとも推測できる。ところで東殿塚古墳では、円筒埴輪が多数発見されており、墳丘の周縁に埴輪列を区画した古墳であったと考えられている。しかし墳丘の外側を区画する北側の掘り割りからは、埴輪片が出土していない。

III まとめ

東殿塚古墳の後円部北側にある掘り割りの調査で、平安時代後期の土師皿を含む包含層とともにともなう浅い落ち込みを検出した。しかし東殿塚古墳の墳丘基底部にともなう遺構を検出するまでには至らなかつた。



1. 暗灰色土(耕土) 2. 暗灰色土(鉄分含む) 3. 暗青灰色粘質土(素掘り溝) 4. 黒灰色粘砂質土

図18. 調査区の平・断面図

2. 西山古墳外堤——勾田町

Iはじめに

調査地：天理市勾田町64-1 調査原因：池の護岸工事

調査期間：平成5年4月6日 調査面積：約10m²

西山古墳は、天理市御経野町、勾田町および杣之内町にまたがり所在する大型前方後円墳である。全長180mの三段築成墳丘をもち、下段が前方後方形、上段が前方後円形の特異な形態を呈する前期古墳であり国の史跡に指定されている。また、杣之内古墳群の中でも古く位置付けられている。

今回、西側外堤部分に相当する古池西岸において護岸工事が計画され、当該地が史跡指定地内に掛かることから現状変更に伴う事前の確認調査を実施した。調査は護岸工事により掘削前に掛かる部分に東西2m、南北5mの調査区を設定し、すべて人力掘削により調査を進行した。

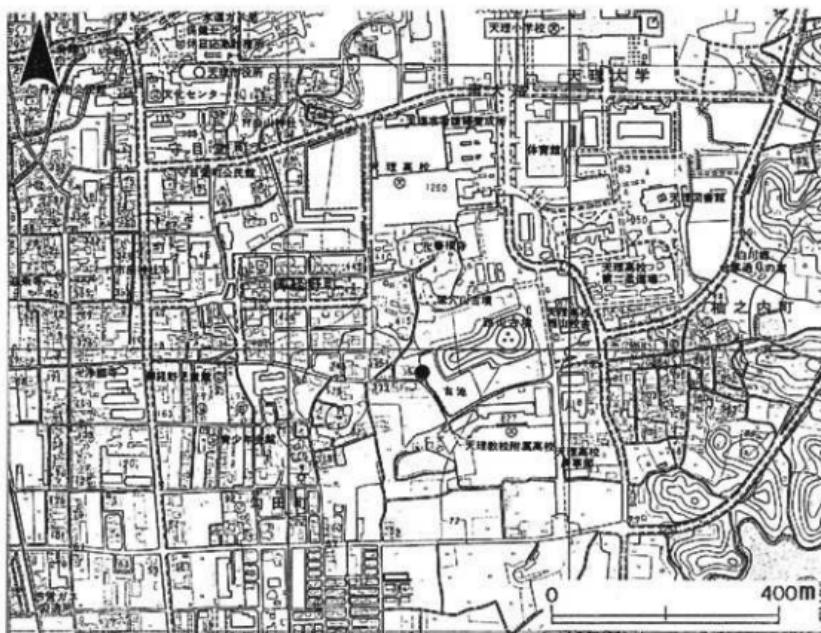
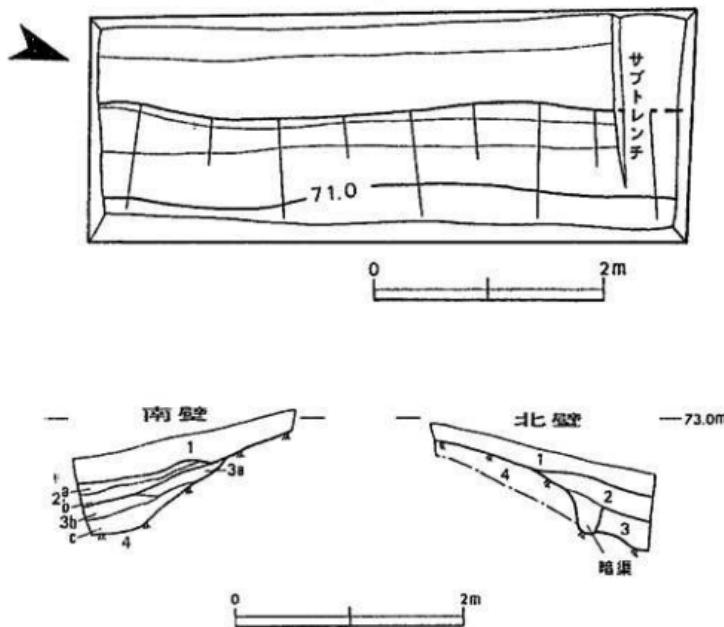


図19. 調査地位置図 (S=1/1000) ※黒丸の地点が調査地



南 堤空	1. 塗灰黄色砂～粗砂	3 a. 黄灰色砂混じり土
	2 a. 塗青灰色粘質土	3 b. 明青灰色砂混じり土
	2 b. 塗黄灰色粘質土	3 c. 明褐色砂礫土
北 堤空	1. 塗灰黄色砂～粗砂	
	2. 塗青灰色～明青灰色砂質土・砂混じり粘質土の互層	
	3. 明灰オーブー明黄褐色砂混じり砂礫土	
	4. 明黄褐色～塗灰黄色砂礫土（基盤層）	

図20. 平面および土層図(S=1/50)

II 調査の概要

1. 層序

現状の池の汀線上の傾斜地では、現地表下約30cmまで著しく新しい塵芥混じりの砂の堆積が続いている(第I層: 1)。これを除去すると、調査区西半の堤側では地山(第IV層: 4)となり東半の池側では急角度に傾斜して続いている。その上部に池岸の堆積土(第II～III層: 2・3)があり、地山面の直上では拳大程度の自然礫の混じる砂礫土の堆積が見られた。

2. 出土遺物

池岸の堆積土より近世～近現代の陶磁器類を主体とする土器片がコンテナ1箱程度の量で出土している。出土層位から見ると、第II層ではほとんどが極めて新しい時期で捉えられる陶磁器類で占められるのに対し、第三層では若干の須恵器、土師器の小片を混在して江戸末期から明治時代初頭にかけての肥前系あるいは美濃・瀬戸系の陶磁器や产地不明の施釉陶器の破片が出土している。地山の直上では疊を多く含む砂疊土のみで埴輪片等の古墳に伴う遺物の出土は皆無であった。

III まとめ

今回の調査では、古墳に伴う遺物、遺構の存在は確認されなかった。当古墳の外堤相当部分の調査ではあったが、当初より外堤として存在したという確証は得られず、外堤部の盛土も確認できなかった。このことにより、周囲あるいは外堤の存在を言及するに足りない結果でしかなかった。

なお、当古墳の墳形については、東側に張り出し部をもつ双方中円墳であるという考え方もあり今後、今回の調査のような小規模な発掘調査の蓄積により改めて墳形等の不明な点について考える必要があろう。(青木)

3. 長寺遺跡（第12次調査）——櫻本町・檜町

I はじめに

大里市の北部、櫻本町から檜町にかけて長寺遺跡が所在する。この遺跡は弥生時代中期の集落、古墳時代前期から後期までの古墳群、奈良時代に創建された長寺廃寺があり、典型的な複合遺跡

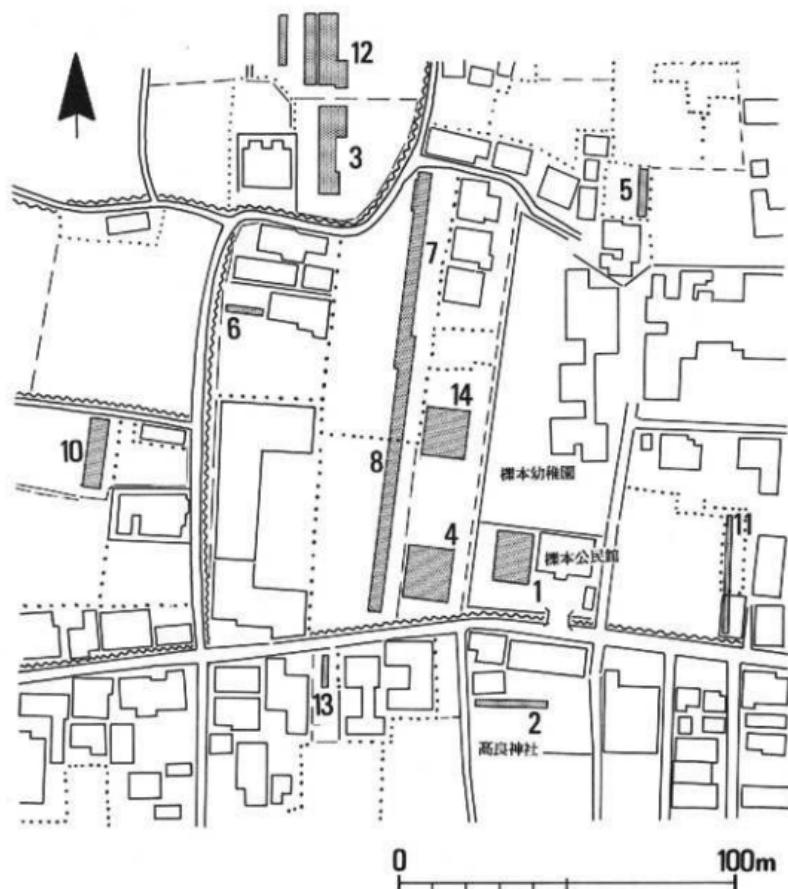


図21. 長寺遺跡の調査地点図（1～12は調査地点と調査次数を表す）

である。遺跡の周辺は桜木町の市街地に接しており、宅地化が進みつつある。すでに一戸建住宅にともなう事前調査が昭和63年度から頻繁におこなわれるようになり、調査も平成6年度まで14次に至っている。その内、第12次調査は平成5年度におこなった宅地開発にともなう事前調査で、昭和63年度におこなった第3次調査地点の北側に隣接する。第3次調査では、長寺3号墳の一部と平安時代の井戸や建物跡、弥生時代から奈良時代まで流れていた谷筋地形、さらに弥生時代中期の土坑やピットなどを検出している。よって第12次調査点では弥生時代中期の集落跡、長寺3号墳の一部、平安時代の建物跡などが出土する可能性があった。調査は平成5年9月29日から11月1日までおこなった。

II 調査の概要

(1) 東調査区

南北16m、東西10mの調査区である。第3次調査に続く3号墳の痕跡を調査区の南東部で検出した。さらに同地点を南北6m、東西6mで拡張調査した。主な遺構は、第3次調査で検出した長寺3号墳の一部を調査区の南東部で検出し、一辺16mの方墳であることを確認した。円筒埴輪の破片が出土している。また調査区の北半部でも方墳にともなう掘り割りの痕跡を検出し、長寺5号墳の所在を確認した。墳丘は3号墳とともに削平されているため定かでないが、掘り割りの痕跡から墳形の平面プランを残すだけである。両古墳とも関川編年第5期の円筒埴輪片が出土している。また墳丘に隣接して平安時代の柱穴が集中する。墳丘の内側には柱穴がないため、古墳の際に建物が築かれていたものと推測するが、古墳を避けるように建物が所在していた様子である。建物の規模や形態は定かでない。弥生時代の遺構は現状の水田によって激しく削平を受け残りが悪く、頗著ではなかった。しかし中期の井戸を2基検出していることから、調査地点の付近に住居が存在していたものと思われる。

(2) 西調査区

幅3m、南北16mの調査区である。調査区の北端部から幅1.5m検出した深さ50cmの南西～北東方向に流れる溝(SD-06)を検出した。溝の内部から弥生時代後期後半(大和第VI-3様式)の完成品を含むおびただしい土器群が出土している。また西調査区の南半部にはおびただしい柱穴があり、東調査区で検出した建物遺構が西調査区まで広がっているらしい。

III まとめ

第12次調査では、弥生時代中期と後期後半の集落跡、古墳時代の長寺3号墳の残りと新たに5号墳の所在、平安時代のおびただしい柱穴跡を検出した。調査地点は桜町に位置し、長寺遺跡の北限にあるが、遺構の様子から遺跡の範囲がさらに北側へ広がるものと推測される。

おおばかやま
4. 御墓山古墳——上総町

I 調査の契機と経過

天理市上総町字糞前南に所在する御墓山古墳は、墳丘上部がはやすくより削平を受け、大幅に変化している。

古墳本体は現在国有地であるが、天理市は墳丘の草刈りなどの管理委託を受け、地域の文化財として保存を図っている。

そして古墳の東側を天理市都市計画道路田・櫟本線が開通してからは、周辺部の開発が徐々に進み道路の東には工場が立地し、また古墳と道路の間には駐車場が計画された。

駐車場の設置については、古墳の隣接地であるところから、工場側との協議により擁壁工事の立ち会いを行なった。この結果旧耕土の深さで埴輪片が出土するところから、古墳に伴う周濠の存在が推定された。ただここは砂利敷きの駐車場以外に用途変更をしないということで、市単費による学術調査を実施した（1次調査）。



図22. 御墓山古墳位置図

また1次調査を実施中に、駐車場に隣接する南側で店舗の計画がなされた。この計画地についても周濠が延びていることが判明したため、緊急調査として1次調査に引き続いて、2次調査として実施した。

1次調査地は、天理市上総町283-1番地で、調査面積は600m²である。調査期間は平成5年3月1日に開始し、5月22日に終了した。2次調査地は天理市上総町282-1番地で、調査面積は550m²である。調査期間は平成5年4月12日から開始し同月28日に終了した。

II 歴史的環境

御墓山古墳の立地する地域は、地理的には標高62m地点であり、現在は水田地帯として用途利用されている。古墳の周辺部は平坦な地形が広がり、南へ約300mの地点で珊瑚珠川が西流し、北800mには高瀬川が流れている。この間は微高地であり、古墳の立地する地点としては非常に安定した地形と言えよう。

しかしこの古墳が立地している以外には、縄文時代からの遺跡は見るべきものが現状である。奈良時代には東約400mにおいて、農田廐寺跡があり瓦等が採集されている。また西約600mには中ツ道跡がある。

このように、御墓山古墳の周囲の考古学的環境は貧弱なものであり、将来埋没古墳が検出される可能性もあるだろうが、単独墳の前方後円墳として立地していることは注目されよう。

またこの古墳は、御墓山（王墓山）と呼ばれていたことから、江戸時代の陵墓調査の対象になり、幾つかの図面にも記録されることになったのである。

先ず注目されるものとして、元禄9年（1696年）松下見林による『前王廟陵記』⁽¹⁾である。これは後述する、南都奉行による陵墓調査の先駆をつけた作業であるとされる。

そして景行天皇陵についてみると「上総村にあり、王の墓山これなり。」とあり、ここに始めて王墓山が記載されるのである。

幕府が組織的に陵墓調査に入ったのは翌年からである。この頃は「元禄年間山陵記録」に詳細に報告されている。⁽²⁾最近翻刻された同書により御墓山古墳の動きを見てみたい。

元禄10年9月（1697年）に京都所司代から南都奉行所に対して、大和国内の33帝の山陵調査と所在の確認を求めた。最終的にはこれらの陵墓は確定され、翌年には補修と周垣の工事が実施されたのである。翻刻本の解説によると、陵墓調査の成果物として、由緒覚書と絵図が作成されたが、山陵図はそれぞれの確定の所在地村役人にも写しが渡されているのである。しかし残念ながら上総町には、御墓山古墳に関する山陵絵図は残っていない。また元禄の山陵調査は、幕末から明治時代にかけて盛んになる、天皇陵治定事業の嚆矢と言われている。

まず元禄10年9月17日付上総庄村屋から南都奉行所への上申書によると、領内にある字王墓山という地所は安康天皇陵であると申告している。ただ「御陵者平地ニテ御座候」であり、「畠ニテ

「菜太根作り申候」という状況を示している。この時すでに墳丘部は削平を受け、畠地として利用されていたのである。

これに対して、奉行所与力の内申書では、安康天皇陵は添下郡苔原伏見にあり、王墓山は景行天皇陵であるという説をとったのである。そして同年12月9日実地見聞を行ない、見聞後の報告を認めている。これによると、現地は庄屋の報告通り、畠地とそのほか木立ちがあり、中段に野面石を認めこれが御陵の印だと考えた。また周囲については、田地であり、濠状のものは既に無かったようである。

そして元禄11年5月11日から、景行帝山陵として竹垣を廻す工事を行なっている。

さてこの時の絵図(図23)が、「廟陵記」(嘉永2年 1849年)⁽³⁾としてまとめられている。ここではなぜか崇神帝と景行帝の二陵墓として記載されている。「山陵記録」では、崇神陵は常に不明の状態に置かれていたが、延喜式諸陵寮では、共に山辺道上陵に葬られたとあるところから、元禄の調査以降崇神天皇もここにくっつけたものであろう。

いずれにしても、この絵図は瓢箪形の下段と、方形の上段の2段分が描かれている。そして上段には、3基の石塔が現在でも確認される形で描かれている。

このほか幾つかの陵墓調査図に描かれた御墓山古墳を見ることが出来るが、「廟陵記」が現地にもっとも忠実であろう。

また明治26年の野淵龍潛による、「大和國古墳墓取調書」に記載された絵図は、墳丘上は林となり、また石塔は崩れて畠地は見えない状況である。⁽⁴⁾

そして現在の景行天皇陵は、崇神天皇陵と共に天理市柳本町にある古墳を比定しているが、この動きは安政2年(1855年)の山陵見直しにより、景行陵を柳本村の「行燈山」に変更し、さらに慶応元年(1865年)行燈山を崇神陵に、渋谷村「王之塚」を景行陵として、現在の天皇陵の管理に引き継がれているのである。

石塔 墳丘上に置かれた石塔3基は、元禄の調査の際には既に認められており、これが陵墓の根柢の一つにもなっていたようである。この石塔が、どこから持ち運ばれたかという口承は、山陵調査書には伺い知ることは出来ない。しかし今回の調査の折に、上総町の住人による教示では、上総町の集落の北西部にある字フル堂(図22)という田から出土したものとのようである。石塔は



図23. 「廟陵記」に描かれた御墓山古墳

いざれも、鎌倉時代に属する時代のものであるところから、このフル堂あたりに中世時期の寺院があつたものと思われる。

石塔の説明は清水俊明氏の調査所見をここに転載させていただく。

宝篋印塔（東塔） 花崗岩製、相輪上半を欠失して現高130cm。基礎四面素地に二段、塔身月輪内に金剛界四仏の種子を薬研彫り。笠下二段上五段で、注目すべきは頂上段階部を屋根状に作る。隅筋りは比較的低く、軒より区別して二弧索面で直立する。鎌倉後期

宝篋印塔（西塔） 硬灰岩製、相輪を欠失して現地上高128cm、基礎一部埋まる。基礎側面素地上二段、塔身月輪内に金剛界四仏の種子を薬研彫りする。笠石下二段上五段で、頂部は東塔と同様屋根状に作る。こうした頂部を傾斜させ屋根状にする宝篋印塔は、大和地方の特色と考えられ、吉野町山口薬師寺塔（建治四年）奈良市須川町神宮寺塔にも見られる様式である。王墓山にこの様式が二基用いられていることは注目すべきである。鎌倉中期

九重石塔（中央塔） 花崗岩製、現高167cmで相輪欠失する。基礎は建築物の礎石を使用する。塔身四面に二重円光背を彫りくぼめ、薬師・釈迦・阿弥陀・弥勒の像を半肉彫りする。像容と屋根造りなどから見て、鎌倉末期の作風。

III 古墳の現状（図24）

古墳は標高62mの、周囲を水田で囲まれた中に残存している。墳丘部が早くから削平を受けていたことは前述した通りである。高さは東側では2m程度しかなく、墳丘内の石室の材料がどこに持ち出されたのかは不明である。

さて墳丘の現状は、元禄時期の状況とあまり変わっていないようであるが、ほぼ南北に主軸を置いて、後円部を南側に向けた前方後円墳である。

全長は約66m、前方部幅約44m、高さは西側で約3.75mである。墳丘は石塔が立っている部分が最高所である。しかし墳頂部は全体に平坦である。

墳形の全体像は、前方後円墳であることは直ちに判断されるが、後円部やくびれ部などの細部については、やはり改変を受けているものと判断される。

特にくびれ部は、削平の際にかえって埋められた可能性が伺えるのである。この点、前方部前端の東西ラインは、削平を受けながらも方向はほぼ踏襲していることが判明した。また現状では、墳丘は2段になり全体を回っているが、これが古墳の当初からの段であるのかについては、調査がこの部分まで及んでいないため不明である。

濠跡については周辺の畦畔からは読み取れない。調査の結果、前方部前端側は肩部が都市計画道路田・株木線から、上総町へはいる東西の道路敷の下になっている可能性が指摘できるのである。このほか墓石、埴輪などは墳丘では見られない。

古墳の名称については、御墓山古墳（おおばかやま）とした。前記絵図等では、王墓山あるいは

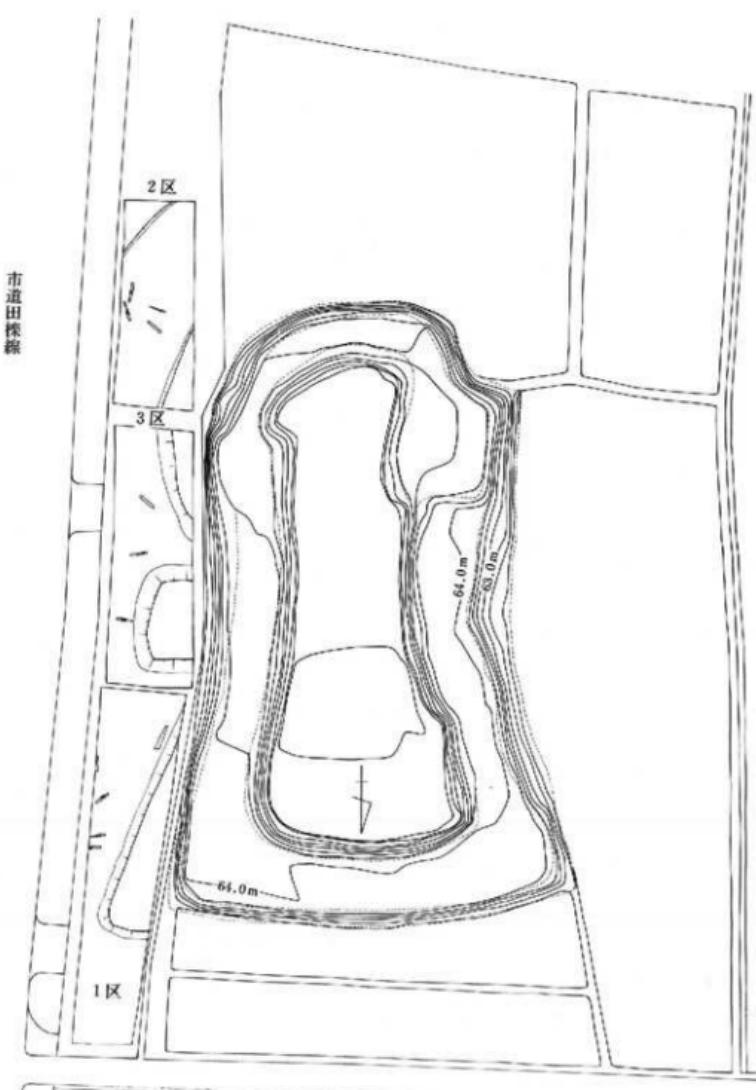


図24. 御墓山古墳墳丘測量図、検出遺構図(濠内は鳥形と石見型盾木製品)

王ノ墓山となっている。天理市史史料編古墳墓一覧では、御墓山古墳の名称で登録されているためこれに準拠する。

IV 調査区の設定と調査概要（図24）

当古墳の調査地は、墳丘の東側から、天理市都市計画道路田・様本線の間、約12~14mと、南北については、北側は上総町への進入道路となるところであり、南はこの地点から約100mである。ただ南側の店舗建物予定地については、後円部の検出ラインがある程度推定されて周濠外となるため、約500m²は排土地とし最終的には発掘を省略した。

また調査区の設定については、1次調査地は、駐車場の地区である前方部から調査を開始して、総面積の600m²を二つに区切る調査区を設定した。そして北側から1区としたが、この地区的終了時に、店舗予定地の調査が追加されることになり、急遽この地区を2次調査地、2区として対応した。このため検出遺構の説明は、1次調査地3区の順となる。

改めて各遺構と調査区の関係を示すと、1区は前方部をほとんど含み、2区は後円部、3区は後円部の墳丘裾まわりと、造り出し遺構ということになる。

これらは全て、削平を受けた状態であるが、墳丘の裾部に対応している。そして裾部から、東側は周濠部ということになる。周濠の外肩は、2区において一部を検出したのみで、このほかは全て道路路面下に埋没しているのである。この部分は、しかし工事に先立つ調査は出来ていない。

V 調査区の土層（図25）

1区と2区の、それぞれの濠底は約61.8mと61.5mで高低差は30cm程度である。2区で検出される濠の外肩は、遺構面までは、表土下約65cmであるのに対して、1区では約90cmである。これは周濠底全体が、北から南へ向けて徐々に上がる傾向を示している。実際2区の濠底は、遺構検出面からでも20~30cmと浅く検出されるのである。1区の東面する壁面を観察すると、耕土、床土の下は4層、5層とした茶褐色粘質土が約30cm堆積する。おそらくこの堆積土により、周濠全体が整地されたものと思われる。この層の時期については、直接示される資料に乏しいが、中近世頃が推定されよう。地山直上の6層は、黒灰色粘質土で有機質分に富む土層堆積である。この層は後円部側の2区の濠底まで続いている。ただこの層位面が、古墳時代から20~30cmと厚く堆積していることもあり、長期間にわたっての層位面であると推定される。

またこの地区での土層堆積で注目されるのは、鳥形木製品No.72の出土状況である。この木製品は、明らかに6層の上部にまで達していることが判断される。これに対して、木製品No.1、3あるいは盾形木製品No.12は6層の中に納まっているのである。

このような出土状況は、これまであまり類例がないが、木製品というものに示された特性であろうか。

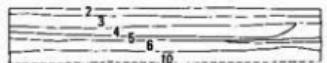
1区 - 東壁

L = 61.0 m



1区 - 北壁

L = 61.0 m



1区土層色調

1. 整地土
2. 田耕土
3. 床土
4. 茶褐色粘質土 I 中層
5. 茶褐色粘質土 II 下層
6. 黑灰色粘質土
7. 茶褐色粘質土
8. 茶黑色粘質土
9. 茶灰色砂質土
10. 地山

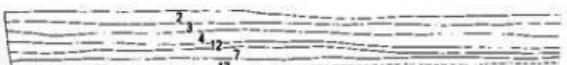
2区 - 東壁

L = 62.50 m



2区 - 西壁

L = 62.0 m



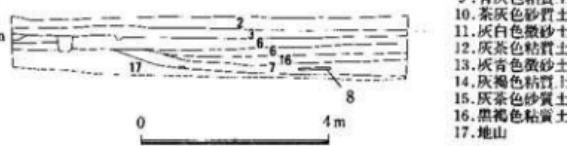
2区 - 南壁

L = 62.0 m



2区 - 北壁

L = 62.50 m



2区土層色調

1. 整地土
2. 田耕土
3. 床土
4. 茶灰色粘質土
5. 茶褐色砂質土
6. 茶褐色粘質土
7. 黑灰色粘質土
8. 黑灰色砂質土
9. 青灰色粘質土
10. 茶灰色砂質土
11. 灰白色砂質土
12. 灰茶色粘質土
13. 灰青色砂質土
14. 灰褐色粘質土
15. 灰茶色砂質土
16. 黑褐色粘質土
17. 地山

图25. 連續断面土層図

これまで古墳の周濠から出土する木製品は、正しく原位置を保存して出土することは希であり、濠底にあるうちに、浮遊もしくは自然な移動もあったのではないかと推定されているのである。

そして今回のような事例を考えると、周濠が開削されて、しかも人間による管理が行なわれなければ、直ちにその時点から濠の中は堆積が始まるということになる。

そしてこのような自然のメカニズムの中で、No.72のように木製品が、長期間にわたる堆積土の上昇にともなって、中世層付近まで達したものと考えられるのである。

2区東側断面は、基本的には1区と変化がない。ただ6層の厚みが、徐々に減じ後円部の外肩まで達する。外肩部分は断面で観察する限り、6層の下には砂層が薄く挟まれる。

このため6層は、直接外肩を作る地山に接しておらず、地山面に薄く堆積した茶灰色粘質土を肩としている。2区北面土層は、後円部を横断した形の断面を示している。

ここでの濠は、表土面から3層目にあたる、茶褐色粘質土で覆われることが確認される。そして濠内の堆積は、厚いところで60cmで3層に分層された。最下層の黒灰色粘質土は、西側の墳丘標部に接するところでは、層位面が切断されたような状況が見られる。これは墳丘標部が、当初の位置より更に切り込まれた形で削平を受けていることを示しているのである。またこの土層面では、大刀形木製品No.8が6層の中間部で出土した。

3区は東側の土層が崩壊してしまい、図面をとることが出来ていない。後円部と造りだし部の接する部分は、3区の平面図で示した通り、調査区外となり完全には検出していない。そしてこの部分は、南北幅5m、厚さ50cmのレンズ状の堆積が見られる。

VI 遺構および遺物の検出状況

1区（図26）

遺構 1区は南側東西9m、北側東西6.5m、南北38mの調査区である。深さ約60cmで、調査区に斜め方向に走る地山ラインと、西方向に走るラインで検出した。この遺構は、明らかに前方部東側の側線と、前方部前端ラインであることが判断された。

検出部は、側線ラインは21m、前端ラインは4.4m分である。遺構検出面から東および北側は、古墳周濠部であることは明らかであり、この部分には、黒灰色粘質土が堆積している。この粘土層を排土した結果約30cmで濠底を検出した。

墳丘削平面と濠底の高低差は、前端部で33cm、前方部側線側では38.6cmと53cmである。濠底は全体的に平坦な地形であるが、木製品が集中して出土した付近は周囲より浅くなっている。1区南側は、くびれ部が検出されても良いのであるが、ちょうど調査区外である。

前端部の検出は、現状の前端ラインより北側へ約3m、東側へは6mの地点が検出した隅部ということになる。

濠北側の外肩は、この調査区内では検出していない。前端ラインより11.8m分を調査したが、濠底はほぼ平坦面を保つため外肩の法面は、調査区の北端いっぱいまで、すなわち、ちょうど上総町への入り道にあたる道路敷が外堤であると推定される。このような遺構のあり方からすると、前方部の北側の周濠幅は12m以上と推定される。

遺構面を調査中に、拳大の礫石を検出していたが、黒灰色粘質土を挟むため墳丘上にあった葺石が、転落した状況であると判断された。このような状況は、隣接する3区でも確認できたが、2区では皆無であった。また裾部基底石の並びも検出されないため、現況の検出面は、墳丘を更に削り込まれた状況であることが推測される。

また遺物を全て取り除いた後、濠底の精査を実施したが、柱穴などの遺構は検出されなかった。

遺物の出土状況 遺物は須恵器、埴輪、木製品などであるが、埴輪に関してはすべて小破片になってしまっており、原位置を保ったような出土状況のものは見られない。須恵器甌は、木製品No13（当番号は遺物番号に一致する。以下の番号もこれに従う）の西側に接して出土し、甌は木製品No12の付近で出土した。木製品は多種多様であり、主として濠内のD点とE点の間に集中している。この部分は濠底が周辺に比べて浅くなり、このためにこの部分に集中した結果であると推定され、必ずしも古墳築造時の原位置を保つ状況ではなかろう。以下製品別に出土状況を記述する。

石見型盾形木製品は1区では2点出土している。このうちNo13は、前方部東側ライン近くでちょうどくびれ部に近いところである。そして前方部の遺構方向に平行し、底の部分は平坦ではなく、やや傾斜を持つ法面になっている。全体は2.6m以上もある完形の大型木製品であり、先端部を南に向けていた。

もう一点は、木製品が一群になっている中にあり、No12に示している。遺物の半ばを東側の土層面中に入っている状況である。取り上げた段階では、完成品ではなく四分の一程度の破片である。しかし復原形はNo13と同形態をしていて、大きさも良く似ている。No13は濠底の直上であるが、No12は濠底から20cmの堆積層の上である。

鳥形木製品は4点である。南からNo72、5、1、3である。このうち72と3は、東側の土層断面内に入っている状況である。そしていずれも、相当厚く堆積した土層の上にあり、長期間にわたり浮遊していたことが考えられる。しかしこれらの腐蝕の度合いはNo72を除いて、あまりないようでひび割れなどなく良好な表面である。また72を除いては、出土の方向は東西に向いている。

以上がほぼ形状の確認が出来た木製品であるが、このほかには、No14は全長が3m以上もある板状木製品である。No11、21、22なども板に穴を開けたりして加工度の高い木製品であるが、用途を推定するまでにはいたっていない。

調査区の北端に近いところで、東側土層に接するような位置で2点の木杭を検出した。平面的な調査と、杭に沿って観察溝を設定し、断面を見たが明確な掘方がなく、打ち込み杭であると観察された。しかもこのうちの一本は、斜めに入れられていて、耕作土からの深さもないところか

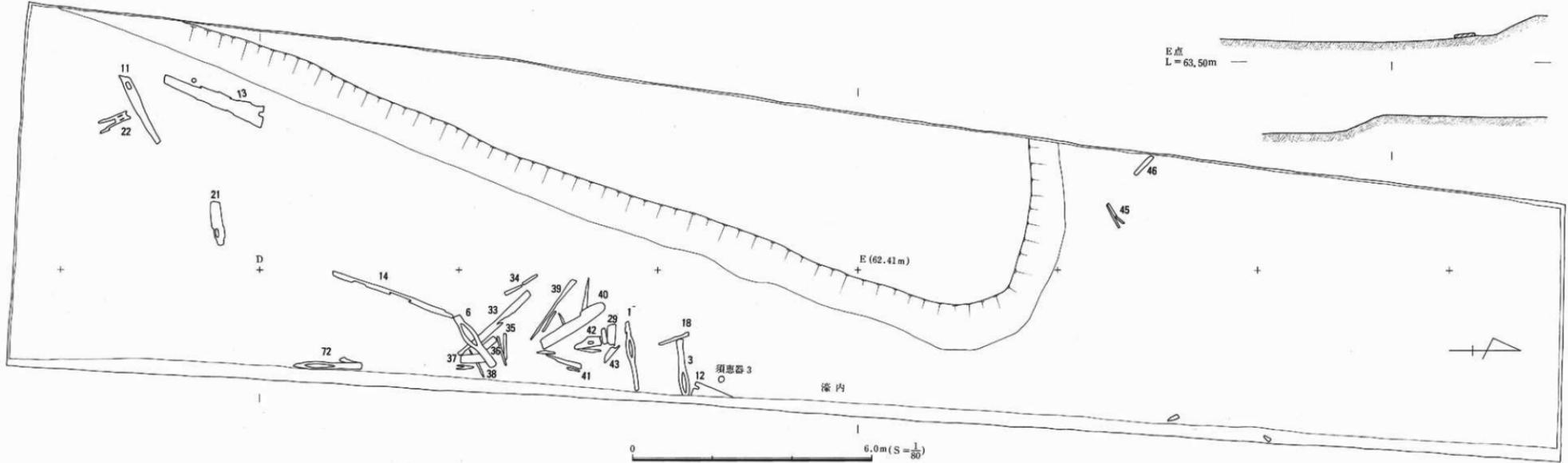


図26. 1区造構・遺物出土状況、D・E地点東西断面図(木製品、須恵器番号は実測図、一覧表番号と一致する)
(前方部)

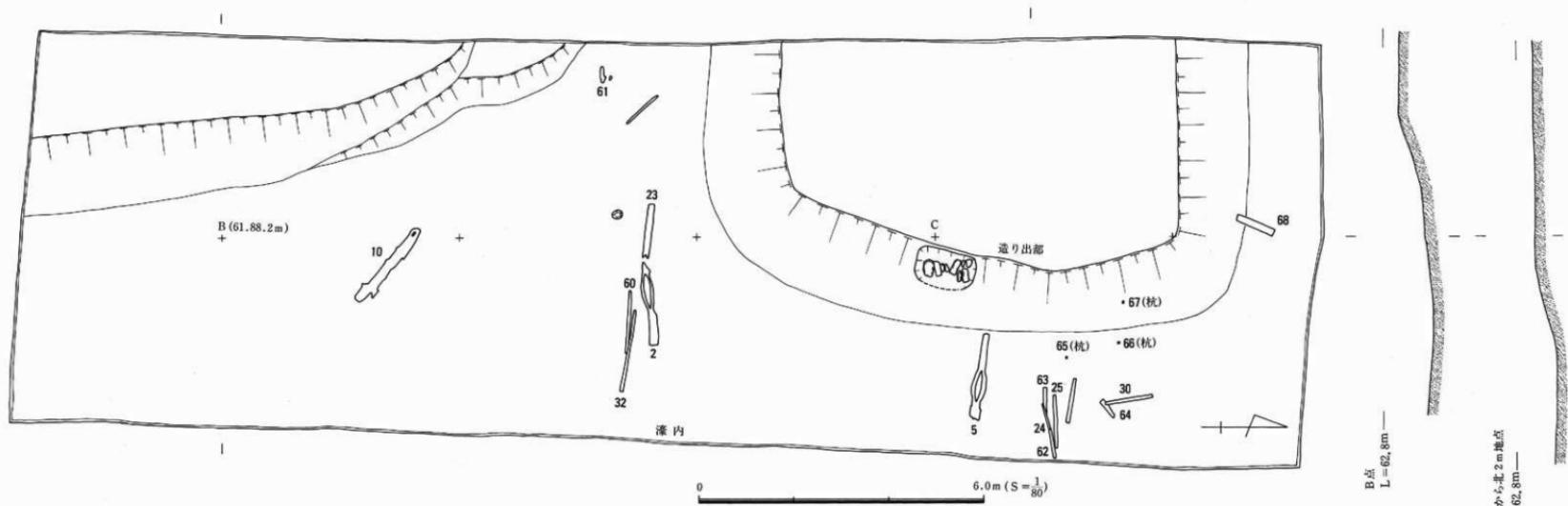


図27. 3区遺構・遺物出土状況、及び東西断面図(木製品番号は実測図、一覧表番号と一致する)

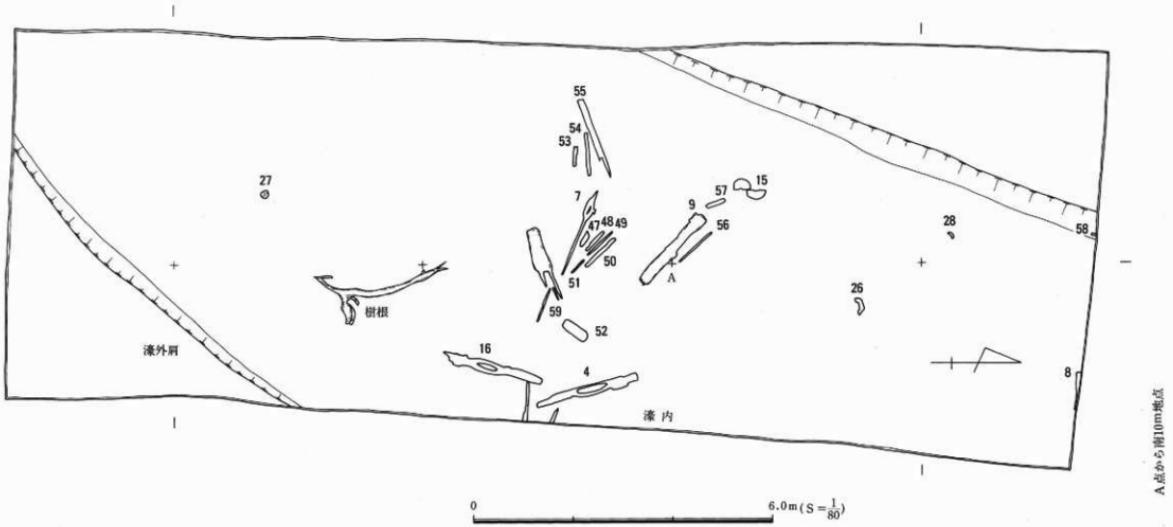


図28. 2区遺構・遺物出土状況、及び東西断面図(木製品番号は実測図、一覧表番号と一致する)

ら後世の杭であろうと判断される。

前方部前端にあたる濠跡部は、かなり広く調査できたがNo45、No46の板状木製品以外注目されるものは出土していない。

2区(図28)

遺構 2区は後円部側にあたり、東西8.4m、南北21.5mの調査区である。遺構面は南側では約40cm程度で達し、北西部で後円部墳丘裾部、南東部では周濠外肩部を検出した。後円部墳丘裾部は直線気味で7.5m分あり、墳丘側は平坦な地山である。この中には遺構は作られていない。肩から内側の濠内との比高差は北で12cm、南では29cmである。濠外肩は、北東から南西方向に緩やかな弧を描く肩を作って6m分を検出した。ここでの肩部と濠内の比高差は北で19.2cm、南で14.2cmである。裾部と外肩間は約10mである。濠内の状況は、2~3cmの誤差で高低差のほとんどない平坦面を作っている。また墳丘裾部については、北面の土層でも明らかのように、裾部の肩を削平したようなところが伺えるため、この検出ラインはやや削り込まれているものと推測される。

遺物の出土状況 この調査区では、ほぼ中央部に集中するように出土した。この地点も1区と同じように濠底は周辺に比較してやや高くなっていることがうかがえる。

遺物はすべて木製品である。鳥形木製品No4、16は調査区の東寄りで出土した。2点とも南北方向を向き、頭部は正反対の方向である。この2点の東側では土層内にはいる木製品は黒灰色粘質土の下層にあり、鳥形木製品も濠底に接している。さしば形木製品No7は木製品が集中するちょうど真中にあり頭部を西にしている。表面は腐触が進み凹凸が激しいが、中央に長方形の切り込みを入れている。柄部も腐触が進んでいる。大刀形木製品はNo8と9の2点である。8は北面する土層あぜのなかに入り込んで、堆積土の黒灰色粘質土の中間部分にある。9はさしば形木製品の北側にあり、切っ先を南東に向いている。

大刀形木製品は濠底から4~5cmの堆積土の上にある。笠形木製品はNo15と破片でNo26、27、28がある。このうち15も半分に割れている状況である。笠形木製品は通例では、数多く出土して然るべき木製品であるのであるが、当古墳では以上が全てである。このほかNo15、17のように、大型の板状を呈する木製品が出土しているが用途は不明である。また濠底について木製品を全て除去した後に、さらに遺構の精査を実施したが、柱掘方などは検出されない。

3区(図27)

遺構 この調査区は東西9m、南北27mである。検出した遺構は北半部で造り出し状遺構と、南半部では、2区において検出した後円部裾部の続き部分を検出した。裾部は調査区南端では東西幅が2.2mである。これより北の方向へ検出し、くびれ部へ向かうのであるが調査区端になる。2区との続き具合は、復原図でも明らかなように必ずしも一致していない。3区での削平が激しいようである。この部分の裾部と濠底の高低差は南端では58cmである。

北半分では方形の造り出し状遺構を検出した。規模は南北幅8.1m、東側への幅は4.8mである。

後円部側と直接接合しているような状況では検出していない。南北方向の一辺が墳丘の主軸と平行し、平坦面は約40m²あるものの遺構は検出していない。各辺の濠からの高さは、南側で44cm、東側で36cm、北側では40cmである。

造り出し東辺の法面部分に南北1.3m、東西80cm、深さ20cmの方形土壙が穿たれている。内部には近世時期と考えられる平瓦や丸瓦が置かれている。どのような性格の遺構であるかは不明である。

濠底部は後円部標部付近では平坦であるが、造り出し部から東へかけては傾斜した地形である。

また造り出し東辺法面では、木杭が打ち込まれた遺構を検出した。No.65、66、67にあたり、断面調査の結果いずれも掘方などは確認できない。No.65は深さ24cmまで打ち込まれている。方形に加工され底面も平坦である。66は24cmの深さまで打ち込まれている。65と同様の加工である。65と66は1.1mの距離がある。67は20cm打ち込まれている。この杭も方形で65、66と同じものである。66と67は90cm離れている。

この3本の杭が古墳に伴う遺構であると判断するのは困難である。このような打込みの杭は1区においても検出している。

3区の後円部法面や、造り出し部法面から濠内にかけて拳大の礫石が数多く出土した。この傾向は1区の調査でも確認したが、濠内に流れ込んでいるような状況を呈していて、法面に葺かれた葺石ではないと判断された。

遺物の出土状況 この調査区でも遺物の主なものは木製品である。造り出し南側と、造り出に接して東側に集中している。そしてこの地区で特徴的なのは木製品の下部には18~24cmの厚く堆積した土砂があり、この上に木製品があると言うことである。この傾向は、一部1区でも見られたが、この調査区で特に厚い堆積が見られる。

鳥形木製品No.2は後円部側のくびれ付近で、No.5は造り出に接して出土した。いずれも東西方向に向いている。No.2の周辺には棒状木製品がかたまっている。

大刀形木製品No.10は後円部側に接して出土した。単独であり切っ先を北西に向いている。切っ先部には長方形の円形穴が穿たれている。

またNo.5の鳥形木製品の北側では棒状木製品が集中して出土した。これらもほとんどが東西方向に向いている。造り出の北辺ではNo.68の板状木製品が出土した。



写真2. 3区躰石と小土壙



写真3. 小土壙の瓦出土状況

この調査区においても、遺物を取り上げたあと濠底について精査を行なったが、柱穴などの遺構は確認できなかった。No.2の鳥形木製品近くの円形掘方は木根跡である。

VII 遺 物

須恵器（図29-1～3・図版36）

須恵器は甌、杯、壺の3点である。1. 甌（図29-1）は口縁部を欠いている。1区の石見型盾形木製品に隣接して出土した。残高7cm、体部最大径8.3cmあり、青灰色を呈し、焼成は良好である。体部には幅約1.5cmの装飾帯があり、左に傾斜する刺突文を施している。装飾帯の上部には凹線文を施している。体部全体は横なでによる調整を施している。体部中央よりやや上方には円形の透し孔を2カ所穿っているが、この際の粘土の残余が内側の底に2個体の塊となって残っている。この甌の時期は口縁部を欠いているため、不明な点が少なくないが、装飾帯や文様がまだ施されているところから、MT15ないしTK10に近い陶邑窯編年には比定されよう。

2. 杯身（図29-2）3区から出土した杯身の破片である。口縁部径9.5cm、受部径11.5cm、器高約2.8cmである。体部外面の下半はヘラ削りを施している。立ち上がりは短く退化しており、受部も退化が見られる。陶邑窯編年ではTK209に比定されよう。

3. 壺（図29-3）1区Na12に隣接して出土した。この個体も口縁部を欠いており、体部の完形品である。体部の残高は約13.5cm、体部最大径16cmである。体部全体は回転横なでを施しており、肩部から底部にかけては緩やかな形態を呈している。肩部には縦方向に1本のヘラによる窯記号が入れられている。

杯身はTK209であるところから、古墳の築造された時期よりはやや新しい遺物であり、あるいは埋葬部での追葬がある、この副葬品の一部が濠内に混入したものと考えられる。

埴輪（図29-1～4・図30-5～16・図版36、37）

埴輪はたびたび説明してきたように、全ての資料が破片で出土し、ようやく16点を図化したに過ぎない。埴輪の種類としては、円筒埴輪、朝顔形埴輪のほかに、部分的な小破片として、盾形埴輪の體や家形埴輪のかつおぎの中実の丸棒が出土している。

円筒埴輪

1.（図29-1・図版37）縦方向で約半分の破片である。また下部1段分が1段目のタガから消失しているものと思われる。器高は49cm、口縁部径35cmである。焼成は良好であり、茶褐色を呈している。タガの突出は低く断面は浅いU字形である。各タガ間は7～8cmあり、4段目にはX印のヘラ記号を施している。また3段目には直径7cmの円形透し孔を入れている。外面の調整は縦方向の右から左へ斜め方向に上がるやや細かいハケ調整を施している。ハケの単位が読めるところがあり、その幅は4cm程度である。口縁端部は横なで調整を施し、口縁部は浅く窪んでいる。内面の調整は口縁端部で横なでを施し、ここより下部は軽い不定方向のなでを施している。

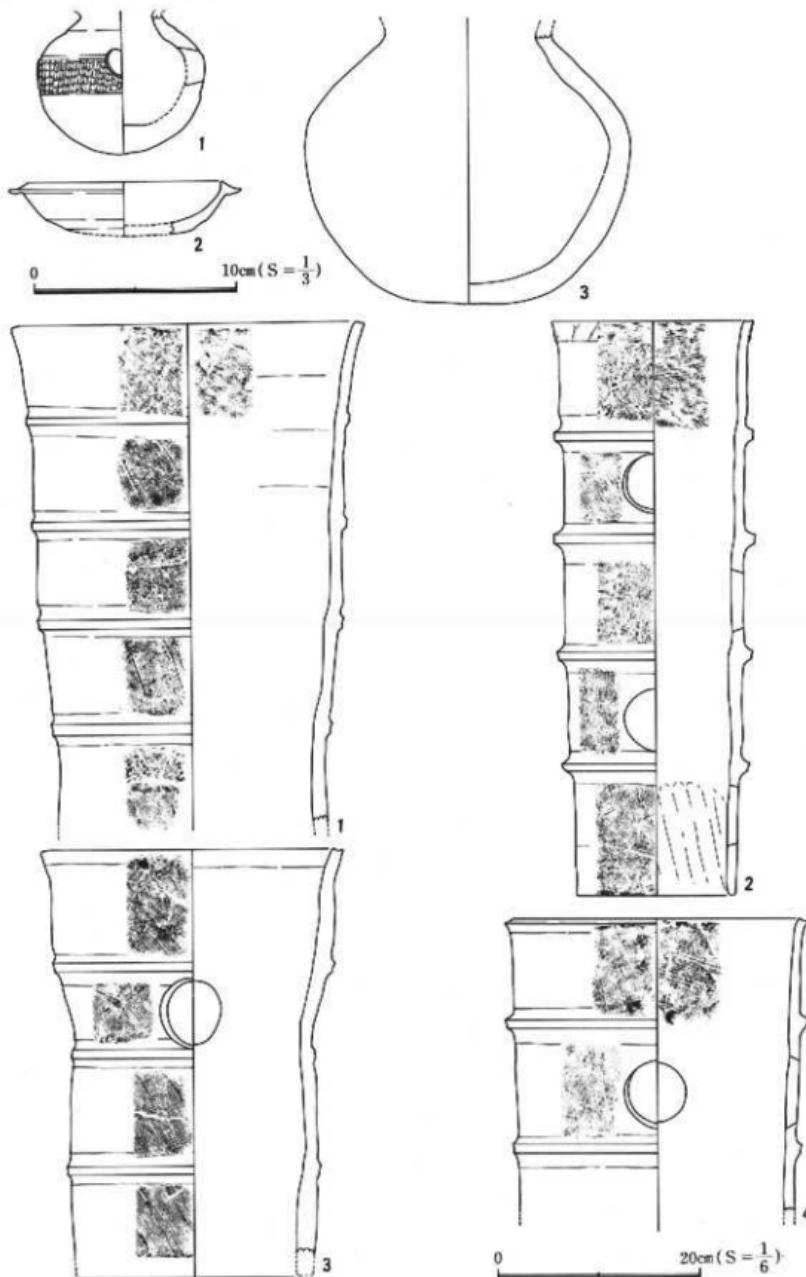


図29. 須恵器、埴輪実測

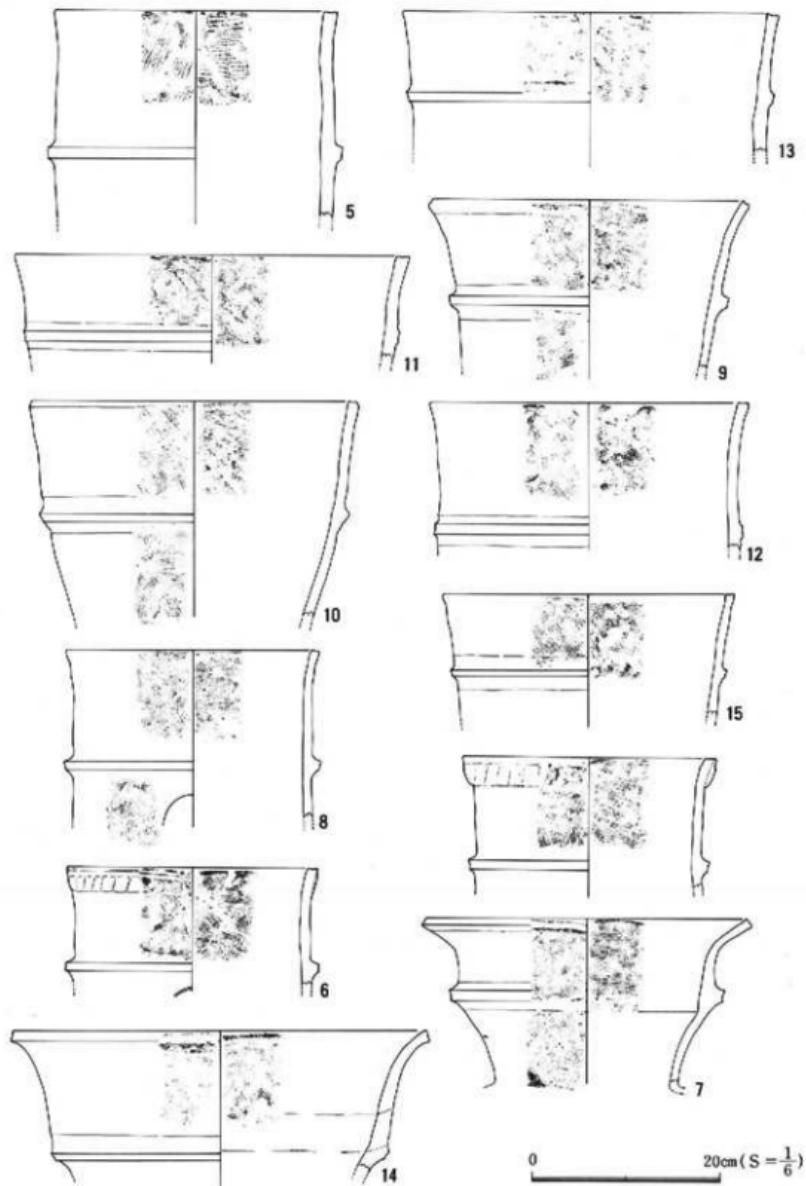


图30. 墓輪央測図

2. (図48-2、図版37) 縦方向で4程度の破片であるが一応全体の復元は可能である。器高は56.6cm、口縁部径約20cm、底径約15.5cmである。タガは4段分で突出は1cm程度あり、しっかりしたタガを作っている。焼成は非常に固く焼かれ、色調は茶灰色で部分的には須恵質化が見られる。各タガ間は1段目が11cm、2段目からは9cmである。2、3、4段目には直径約6cmの円形透し孔が穿たれている。外面の調整は1段目の下部がなでによって縦ハケを消す2次調整を施している。このほかは縦方向の粗いハケ調整である。また口縁部では薄い粘土板を幅2~3cm付加して貼り付けている。そしてこの部分では横なで調整を丁寧に行なっている。口唇部は角頭頭を呈している。内面の調整は1段目にあたる部分では軽い斜めのなでを施し、口縁部では幅16cmにわたって粗いハケ調整を施している。

3. (図48-3、図版37) 縦方向で4程度の破片でしかも下段は欠失している。当初は4本のタガがつくものと考えられる。器高は約42cm、口縁部径約30cmである。焼成は非常に良好で須恵質化し、口縁部付近で激しく歪んでいる。色調は灰白色を呈している。各タガ間は9~10cmあり、3段目には直径6cmの円形透し孔が穿たれている。タガは低い突出で貼り付けも歪んでいる。また3段目の透し孔に隣接して、×印のヘラ記号を施している。外面の調整は全体に右斜め上方へハケ調整を施している。最上段のハケは口縁端部で巻くような使い方をしている。また口縁端部は幅1.5cmは横なで調整である。口唇部は角頭形を呈し中央は明瞭に窪ませている。内面の調整は口縁部では横なでを施すほかは縦方向の軽いなでを施す。

4. (図29-4、図版36) 上部タガ2段分の破片である。器高は約29cm、口縁部径約30cmあり、No.1の埴輪と同様に大型の円筒埴輪である。色調は灰茶色を呈しているが、良好な焼成である。タガの突出は明瞭である。上から2段目には直径6.5cmの円形透し孔が穿たれている。最上段には×印のヘラ記号がつけられている。外面の調整は、粗い縦方向のハケ調整を施し、内面の調整は口縁端部から7cmで横方向に粗いハケ調整を行なっている。

5. (図30-5) 口縁部の破片である。口縁部径約30cm、器高約22cmである。色調は灰白色を呈し、焼成はやや弱い。タガは突出はあるものの、台形を呈している。口唇部は角頭形でやや深く窪む。外面の調整は粗いハケを右上から斜め縦方向に施す。ハケ目の間隔は約2~3mmである。またハケの方向もこの個体は逆向きである。内面の調整は、口縁端部から約7cmが縦ハケを消す2次調整の横ハケを施し、これより下部は縦方向のハケを施す。しかしいずれも外面調整と同じハケ原体を用いているため非常に粗いものである。

6. (図30-6、図版36) 口縁部付近の破片である。口縁部径約26.7cm、器高約12.5cmである。色調は茶褐色で良好な焼成である。タガはやや小振りであるもの高く突出している。上部から2段目には円形透し孔が穿たれる。また上段にはヘラ記号が施されるものの、その部分がちょうど欠けている。

口縁部は外側に粘土板を幅2.5cm貼付され、なでによる調整を施す。斜め縦方向の凹凸が生じて

いる。また端部外面には2条の細い凹線を施す。

内面は口縁端部から約7cmは粗い横方向のハケ調整であり、これより下部は縦方向の1次調整のハケ調整が見られる。

8. (図30-8) 口縁部径約27cm、器高約18cmの破片である。色調は灰白色を呈しているが非常に固く焼成されている。器壁も1cmで薄く仕上げられている。タガは幅はあまりないものの、突出度の高いしっかりした造りである。上部から2段目に円形の透し孔を穿つ。口縁端部は角頭形を呈している。外面の調整は縦方向の細かいハケ調整を施している。口唇部は内側にかけてなで仕上げである。内面の調整は口縁端部から約8cmまでは細かな横方向のハケを施し、これより下部は縦方向の軽いなでを施す。しかしこのなでも仕上げ状態は良好で粘土紐などは見られない。

9. (図30-9) 口縁部径約33cm、器高約12cmあり、色調は茶褐色を呈している。焼成は良好で固く焼き上がっている。タガは幅広で高く突出している。口縁部にかけて外上方にひろがる形態である。上部から2段目に円形の透し孔が穿たれている。外面の調整は細かな縦方向のハケ調整であり、内面の調整は口縁端部から下へ約6cmは横方向の細かなハケ調整を施し、これより下は左上から斜めの軽いなでを施している。

10. (図30-10) 口縁部径約33.5cm、器高約23cmの破片である。タガと口縁部の間は約12cmあり大型の円筒埴輪である。図面では2段目から内傾しているが、これは個体の部分的な歪みであろう。タガもやや崩れた形態を呈している。色調は灰白色であるもののしっかりした焼成である。上部から2段目には円形の透し孔が穿たれている。外面の調整は縦方向の粗いハケ調整であり、口唇部では斜めの面取りが見られる。内面の調整は口縁部から5cmは斜めの粗いハケ調整であり、これより下部はなで調整である。

11. (図30-11) 口縁部の破片である。口縁部径約42cm、器高約11cmである。色調は茶褐色で焼成は良好である。タガは突出度が低く作られている。外面の調整は縦方向の細かいハケを施し、約2.5cm内外のハケ幅である。内面の調整は、ハケは見られず口唇部が横なで調整、これより下部は斜めの軽いなでを施している。

12. (図30-12) 口縁部径約34cm、器高約15cmの破片である。色調は茶褐色を見し、良好な焼成である。タガの突出度は低くNal1とよく似ている。外面の調整は縦方向の細かいハケ調整であり、幅約2cmのハケ幅が残る。内面の調整は全面にわたって軽いなで調整を施す。

13. (図30-13) 口縁部径約40cm、器高約15cmの破片である。Nal1、12と同様大型の円筒埴輪である。色調は茶褐色を呈し、しっかりした焼成の具合である。タガは低いものである。外面の調整はやや粗い縦方向のハケ調整を施し、内面は全体が軽くなで調整を行なっている。

15. (図30-15) 口縁部の破片である。口縁部径約31cm、器高約13cmである。色調は茶褐色を呈し、焼成は良好である。タガはやや小さいもののしっかりした造りである。外面の調整はやや粗い縦方向のハケを施し、内面では口縁部より下部約3cmで横方向のハケを施し、それより下は斜

め方向のなで調整を施す。

16. (図30-16) 口縁部径約27cm、器高約13.5cmの破片である。色調は灰白色であるが、焼成は良好である。タガは台形で突出度も高い。また口縁部は幅約3cmの粘土板を貼付している。この部分の調整は、口唇部では横方向の横なでを施すが、ここより下部は未調整で斜めに粘土板を削り取っている。またこの付加帶は外面調整を行なってから貼り付けている。外面の調整は縦方向の粗いハケ調整である。内面の調整は、口唇部は横なでを施し、しかも斜め方向に軽く面取りを行なっている。これより下部で約7cmは横方向のハケ調整である。更にこの点から下部は不定方向の軽いなで調整を施している。

朝顔形埴輪

7. (図30-7、図版36) 朝顔形埴輪の上部であり、ほぼ残存している。口縁部径約34cm、器高約17.3cmであり、色調は茶褐色を呈して、焼成は良好である。朝顔形の口縁部の形態は、外上方に大きく開き、タガもしっかりと突出度の高い造りである。口唇部は角頭形を呈している。外面の調整は粗い縦方向のハケ調整を施す。内面の調整は全体にわたって横方向の粗いハケ調整を施している。

14. (図30-14) 口縁部径約44cm、器高約15cmである。口縁部の一部の破片で、この形態はNo.13ほどは外反しない。しかしタガは高く突出し、口唇部も大きく角頭形を作る。外面の調整はやや細かい縦方向のハケ調整を丁寧に施している。内面の調整は、ハケは見られず口縁部とタガが付いている部分では横なで、外は斜めの軽いなで調整を施す。

木製品

本古墳の周濠内より出土した木製品は、これまで出土例のないものを多く含んでいるのが特徴である。種類としては、鳥形木製品、大刀形木製品、石見型盾形木製品、笠形木製品、さしづ木製品があり、このほか板状加工で用途の明らかでない木製品も多数に上る。

木製品の説明に入る前に、鳥形木製品と大刀形木製品の部分の名称について解説しておきたい。木製品は原則として両面を実測して図示しているが一部腐蝕の激しい資料については、片面のみの図示に終わっている。鳥形木製品の場合は表面に加工の痕跡が確認される面をA面とし、もう一方をB面とした。大刀形木製品、石見型盾形木製品などにもA面、B面として区別したが、A面に加工の見られるのは大刀形木製品の1点のみである。

また木製品の観察にあたっては、加工された部分を残しているのか、腐蝕による疑似的なものかが加工されたように見えるのかという基準が曖昧な場合が多い。今回もこの点は留意したが万全ではないであろう。

鳥形木製品の各部名称 (図31) 石見遺跡の鳥形木製品に代表されるように、通有のものは半立体形で上面から俯瞰すれば、左右対称のシンメトリックな形に加工されている。しかし本古墳のものは板を加工したものであり、平面形は左右対称になっていないのである。このようなこと

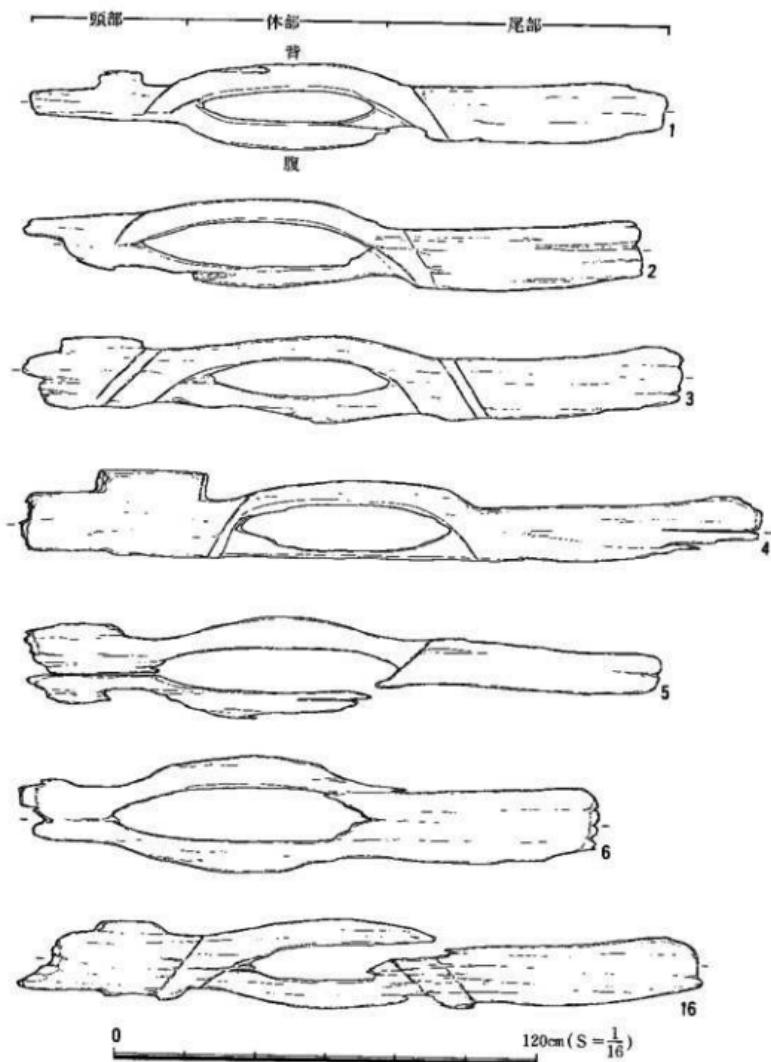


図31. 鳥形木製品A面

から、鳥の側面観を表現したものと推定した。そして図に示したように、左側の凸部を中心とした部分を頭部とし、中央のレンズ状に穴を穿たれた部分を体部とした。そして右側を尾部として説明を加える。鳥形木製品は8点を図示したが、基本形は全てに共通している。

木製品の実測図における表現方法と木取りについては当木製品全般についていえることであるが、A・B面とも腐蝕によって加工痕跡はほとんど観察されない。

木取りについては板目材と柾目材の両方が使用されている。このため木目方向を断面図に模式的に示した。木製品の中で木口部を観察しても不明なものもありこれには断面に斜線で示した。

鳥形木製品（別図1）

1.（別図1-1、図版38）全長1.79mである。頭部は長さ39.8cm、凸部分での厚みは3.1cmである。先端部に向かって尖り気味になり、幅は6.7cm、凸部は長さ14.3cmで左側は腐蝕している。高さは4.7cmあり比較的高い作りである。体部は長さ65cm、幅24cmである。背、腹部とも横長のゆるい曲線状の加工を施し、中央部には長さ48cm、幅8.7cmでレンズ状の穴が開けられている。体部の左右では浅く弧状に掘られた溝状のラインが確認できる。幅は左側では約6cm、右側では6.5cmである。この溝状の幅のある彫り込みはB面では確認できない。尾部は長さ79.2cm、幅16cm、厚みは中央部で3.2cmである。尾部先端は右上部へ約15度上がる。また体部と尾部の接点付近では幅約6cmの浅い溝状の加工が見られる。樹種はコウヤマキ、木取りは板目材

2.（別図1-2、図版38）全長1.734mである。頭部は長さ34cm、幅は16cm、厚み2.4cmである。これは頭部の凸部がなく、欠失したものかあるいは当初から作られていないかの判断はできない。ただこの下面にあたる部分には、体部からの曲線の加工面がくの字形に屈曲して、下側で凸状の突起を作っているのが観察される。このような例は他にも見られるので、上部の突起も当初はあったものと推定される。また頭部先端は腐蝕が激しく残りが良くない。体部は長さ69cm、幅24.7cm、レンズ状の穴は長さ64cm、幅13cmである。背、腹部は横長の緩い曲線状の加工を施し、上下の

	全長	頭部長	体部長	体部幅	ぐり貫き穴長さ	ぐり貫き穴幅	尾部長さ	尾部角度
1	1.79	39.8	65	24	48	8.7	79.2	15
2	1.73	34	69	24.7	64	13	74	12
3	1.86	44	73	24.5	50	10	68.8	6
4	2.09	58	73	22	58.5	12.8	78.5	10
5	1.8	37.5	70	27	68	12.7	72.5	—
6	1.64	26.5	75	33	69.5	15.3	62.5	15
16	1.93	51.8	75	25.2	—	10	66.2	10
72	1.74	—	—	—	—	—	71.8	7
平均	1.82	41.5	—	25.7	59.6	11.7	71.6	—

表2. 鳥形木製品計測表（全長の単位はm、このほかはcmで表す）

この部分の厚みは2.6cmと2.0cmである。体部の右側で頭部とのさかいでは、体部外周からの延長のように、弧を描くように曲線が入れられている。このような加工は体部の右側でも観察され、幅6cmほどの浅い溝が掘られている。尾部は長さ74cm、幅18cm、厚みは3.0cmである。尾部先端部では幅は16cmである。先端部は約12度右上部へ上げている。B面は体部周辺で観察される溝状の加工痕跡はなく平坦な作りである。樹種はコウヤマキ、木取りは柾目材

3. (別図1-3、図版39) 全長1.858mである。頭部は長さ44.1cm、幅19.6cm、厚みは2.8cmである。凸部は長さ23.3cm、高さ3.8cmで比較的高い作りである。凸部の右上から斜め左方向に幅3.3cmの浅い溝状の加工が見られる。体部は長さ73cm、幅は24.5cmあり、中央のレンズ状の穴は高さ50cm、幅10.5cmである。背、腹部は綴い横長の曲線状に加工を施し、体部左右でレンズ状の弧状の曲線に合わせるように、浅い加工痕跡が見られる。尾部は長さ68.8cm、幅16.8cm、厚み2.5cmである。体部との接点付近から右下方向へ幅3.2cmで浅い溝が見られる。これは頭部のものに対応するようである。また尾部の先端は一度右方向へ上がり、先端では水平に加工している。右上がりの角度は6度ほどである。B面はこのような溝状の加工は見られない。体部背には2カ所に内側に向かって穴が開いているが、これは加工によるものではなく自然のものであろう。樹種はコウヤマキ、木取りは不明である。

4. (別図1-4、図版39) 全長2.09mである。頭部は長さ57.5cm、幅は先端部では16.6cm、厚み6.5cmである。凸部は幅24.2cm、厚みは5.3cmである。突起は長さが31cm、高さ6.0cmである。全体の厚みは尾部に行くにしたがい減じていて、当初の厚みは7cm程度はあったことが推定されよう。体部は背部がやや緩やかな曲線に加工されているものの、腹部は頭部から直線状に加工されている。長さは73cm、幅21.8cmである。中央部のレンズ状の穴は長さ58.5cm、幅12.8cmである。腹部に接している部分は薄く腐蝕が進んでいることをうかがわせる。体部の両側では、左右に浅くくりこみを入れている。尾部は長さ78.5cm、幅15.8cm、厚みは2.0cmである。先端付近で約10度右上方へ上がり先端はまた水平な作りである。B面の加工は認められない。樹種はコウヤマキ、木取りは柾目材

5. (別図1-5、図版39) 腐蝕が進んでいるため実測はA面のみにとどめた。全長1.80mである。頭部は長さ37.5cm、幅は凸部で22.5cm、厚み2.8cmあり、上下に突起が作られている。上は高さ3cm、下は高さ4.5cmである。頭部にあたるところの曲線は原形を留めているものと考えられ、ここでの幅は14.5cmである。体部は長さ70cm、幅は現状で27cmであるが、復元すると29cmの大きさがある。背、腹部とも横長の曲線を以て加工され、中央部には長さ68cm、幅12.9cmのレンズ上の穴が穿たれている。尾部は長さ72.5cm、幅12cm、厚み1.8cmである。尾部先端は右下がりの形態を呈している。尾部と体部のさかい付近に左下がりのやや浅い彫り込みが認められる。この彫り込みと尾部の形態は、他の鳥形木製品とは異質である。樹種はコウヤマキ、木取りは板目材

6. (別図1-6、図版39) 全長1.64mである。頭部の先端は腐蝕が進んでいる。長さ26.5cm、

幅17.2cmあり、厚みは2.2cmである。頭部の突起が少し残存している。高さは1.5cmである。体部は長さ75cm、幅33cmである。背、腹部は緩い曲線で作り、中央部は長さ69.5cm、幅15.3cmでレンズ上の穴をあけている。尾部は長さ62.5cm、幅20.6cm、厚み2.7cmである。先端部の背上面は直線的であるのに、下部では約15度で右上に跳ね上げている。この資料では板面の彫り込み加工は見られない。樹種はコウヤマキ、木取りは不明である。

16. (別図1-16、図版39) 全長1.93mである。頭部先端と体部の腐蝕が進んでいる。頭部長51.8cm、幅20.7cm、厚みは3.8cmである。わりあい明瞭な凸部があり幅21cm、高さ3.5cmである。下部にも若干の突起が認められる。体部は長さ75cm、幅25.2cmあり、背、腹は緩い曲線で作る。中央部には長さ38cm、幅10cmのレンズ状の穴をあけている。体部左右には幅約9cmで浅い溝状の深みを掘り込んでいる。尾部は長さ66.2cm、幅17cm、厚みは3cmである。先端は約10度で右上がりの形態を呈している。B面は溝状の彫り込みは見られない。樹種はコウヤマキ、木取りは板目材

72. (別図1-72、図版39) 頭部、体部とも下半部が腐蝕により復元できない。全長1.743mである。頭部長は30.5cm、現状での幅12cm、厚みは3cmである。内部が残り幅17cm、高さは3cmである。体部は長さ72cmである。左側では幅6.3cmで浅く溝状の彫り込みを入れている。また右側では右上がりの彫り込みのラインが認められる。尾部は長さ71.8cm、幅16.8cm、厚み3cmである。先端部は約7度で右上がりの形態を呈している。樹種はコウヤマキ、木取りは不明である。

以上8点の鳥形木製品について、個々の遺物の説明を行なった。表2に8個体について各部の計測値を一覧しておく。これによると、全長は最大のものがNo.4の2.09m、最少のものがNo.6の1.64mである。平均値は1.82mである。もちろん頭部と尾部の腐蝕があり、この数値そのものが有意のあるものではないが、全体の傾向としては1.8m前後が鳥形木製品の大きさを表わしているものと考えられよう。このことは全長で最大値を示したNo.4は、体部の大きさは他のものとはさほど変わらないのであるから、頭部の大きさが他のものに比較して大きいという特徴を示していると言えよう。

全体の形態については前述したので改めて繰り返さないが、ここで鳥形木製品の特徴をまとめる。

頭部の形態はa型として凸部が上部のみにあり、b型として上下の両方にあるものの2型が確認できる。a型は1、3、4、6であり、b型は2、5、16である。頭部の原形が2系列であるのか、a型が下部の凸部を欠失した結果であるのかは即断できない。

体部はこの木製品の形態を大きく特徴づけている。横に細長い楕円状の加工がされて、さらに中央部には大きな穴が穿たれているのである。この部分は腐蝕による数値の変動が少ないものと思われる。長さは平均が71.4cmで長短の差は10cm、幅の平均は25.7cmで長短の差はやはり10cmである。長さの平均値は尾部の平均値である71.6cmに近似しており、頭部と尾部を合わせた長さは全体の3/4を占める。またこれは尾部の腐蝕もそれほど進んでいないと判断され、加工作業における

る全体の形態と、数値の企画性があったことを推定させるのである。尾部の残存状況を見ても先端部の崩壊は激しくないものと判断される。尾部先端の上がり方は約6度から15度の範囲である。No.5の尾部は先端部が下方を向き、他の資料とは逆向きである。尾部の基本的な形態は、先端部を右上方へ上げた形を作らなければならない。No.5の頭部の突起から判断すれば、天地を逆に変えれば尾部は上方を向けることができる。しかし体部の右側には、左下がりの浅い彫り込みが認められるところから、図示したような位置にならざるを得ないのである。このことはNo.6を除いてA面だけに限定して、体部の周辺に浅い掘り込みが確認されるのであり、鳥形木製品に表裏の区別がされたことを推測させるのである。この点は使用方法と関わってくることである。またNo.5は恐らく表裏の区別を間違えて彫り込みを入れたのかも知れない。

大刀形木製品（別図2、図版38）

大刀形木製品の各部名称（図32）古墳時代の大刀形木製品は、数多くあるものの本古墳から出土した木製品に類するものは見られない。しかし大刀の基本形がこの木製品より観察できるようであり、各部に名称を付して説明を加えたい。図32に示したものは、刀身を左側に置いたものである。左側から刀身、鞘口、把縁、把間、把頭とその外の部分である。

刀身部は、多くの刀形木製品に通有のように、鞘の表現はなく抜き身の表現である。全体の形は、刀身部と鞘口・把とがほぼ二等分された形状を呈し、この点もほかのものとは形態を異にする点である。

9.（別図2-9、図版38）鉈を欠失しているほかはほぼ現況を残している。全長は1,805mである。欠失部分は約12cm程度あるものと思われ、これを加えると復元全長は約1,885mである。

刀身は長さ61.5cm、中央部付近の幅は22.5cm、厚みは2.5cmである。形態は鞘を表現せず、抜き身として表現しているようである。そしてA面には装飾が施されている。刀身形は通有の直刀形ではなく、外反で鉈は膨らみ気味である。背部は肥後守のように外反して頂部をつくる。断面は背、腹と平面形で刃形は作っていない。A面の装飾文様は上下に幅約1cm、深さ3~4cmの溝が掘られ、この間に3個の横円または円形で浮き彫りされている。大きさは左より、左右5.3cm、天地5.3cm、中央のものは左右10.5cm、天地8cm。右側では左右10cm、天地8.5cmであり、2~3mmの盛り上がりである。そして、3個とも上部から釣り下げられたように台形の浮き彫りと繋がっている。

鞘口は左右幅24cm、天地幅25.5cmで刀身とは背で2cm、腹で1.5cmの段差が作られている。厚みは中央部で3.1cmである。A面の文様は上下に溝が掘られ、この間を左右に長い菱形文と三角文とが浮き彫りされている。把縁は左右幅21.5cm、天地幅20cmである。この部分にも上下に溝を掘りこの間には浅い幅3cmの溝を2本作り、この間を文様帶として横の三角文を作っているのである。現在はこのうち2つしか確認できない。把間は左右幅46.5cm、天地幅21cm、厚みは3.4cmである。把間の形態は背、腹で対称形を呈するように外反している。A面は把縁から連続するように横方

向の三角文を、上下に並べて交互に浮き彫りされている。把頭は背の左右幅31.5cm、腹の左右幅23cmあり、天地幅27.5cm、厚みは3.5cmである。この部分には文様は表現されていない。f部は把頭から4cmの突起として作られている。この部分には文様は表現されていない。先端は腐蝕していて原形がどのような形態を呈しているかは不明である。B面には装飾文様は見られない。樹種はコウヤマキ、木取りは板目材

8. (別図2-8、図版38) 9と同じように鉈を欠失し、fの先端部も腐蝕による折れが見られる。全長は2.095mであり、鉈の欠失は約12cm程度と考えられる。また9のような装飾文様が見られない。刀身は長さ61.5cm、中央付近の幅は20.5cm、鉈付近では19cmである。厚みは2.8cmである。刀身形は外反が強く、鉈は膨らみ気味である。背部は肥後守のように外反して頂部を作る。断面は背腹とも平坦で刃部をつくらない。鞘口は左右幅12.5cmとやや狭い。天地の幅は28cmである。把締は左右幅28cm、天地幅24.2cm、厚みは2.3cmである。把間は左右幅47.5cm、幅20cm、厚みは2.6cmである。背、腹で外反した把間を作っている。また背部分では把締と把間が一体となるのである。把頭は左右幅29cm、天地幅は把近くでは30.5cm、先端部で33.5cmである。fは左右幅31cm、天地幅は21.7cmである。先端部分での厚みは4.3cmあり全体的には鉈からf部にかけて厚みを増している。B面に文様は見られない。樹種はコウヤマキ、木取りは板目材。

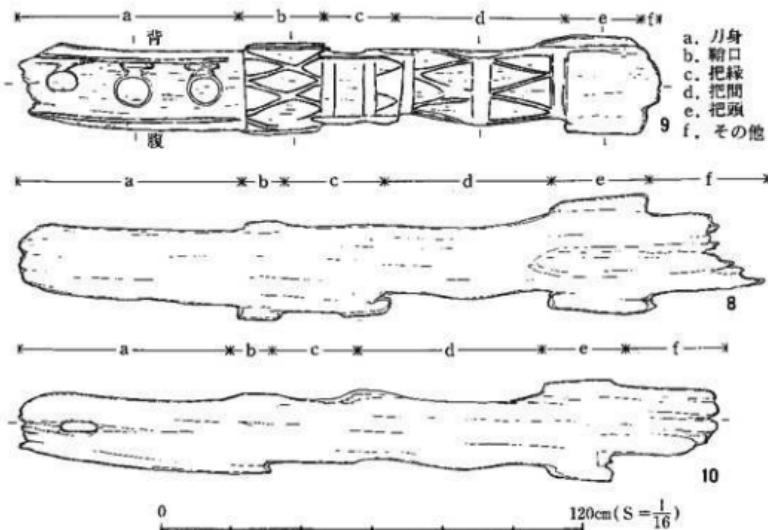


図32. 大刀形木製品A面

10. (別図2-10、図版38) 全体には8、9と同一の形態を呈している。鉢は欠失しているが、全長は1.98mあり、両面には文様は確認できない。刀身形は外反が強く、鉢でやや膨らむ。刀身は長さ58cm、幅は先端付近では18.5cm、鞘口に近いところでは20.5cmである。厚みは3cmである。鉢近くには左右10.3cm、幅2.8cmの梢円形のくり貫き穴が開いている。鞘口は左右幅12cm、天地幅22.5cmである。ただ両側ともややくずれている。把縁は左右幅26cm、天地幅18cmである。把間は外反を作り左右幅54cm、天地幅19cm、厚みは2.5cmである。把頭は左右幅17.5cm、天地幅28.5cm、厚みは2.5cmである。fは左右幅30.5cm、付け根部の幅19cmである。先端は不規則に折れている。B面についても変化は見られない。樹種はコウヤマキ、木取りは板目材。

以上が大刀形木製品の概要である。わずか3点にすぎず、両端部が欠失しているにも関わらず、形態特徴と各部の計測を行なった結果は、同一のものとして作られたことを推測させるのに十分な成果が得られた。

形態面では大刀形木製品として説明を行なったが、当該時期の木製品あるいは実用品では、直刀形式であって、刀身が外反ししかも背の部分で肥後守のような頂部を作る形態のものは類例はないのである。しかしこの木製品についてはa～eに分割してその特徴を見ると、大刀形を模した木製品であると推定される。ただそうではないという欠点を指摘すればこれも幾つかあり、例えば刀身の長さが異様に短く、それ以外の所が%以上を占めている。あるいは形態的にもこのような刀はないのである。このようなことから大刀とした場合でも、木製形代として大胆なデフォルメがあったものと考えられよう。

さて表3を参照すると、a～eの各部の計測値は近似値のものがある反面、やや開きがあるのも事実である。現状での全長は長い方から8、10、9となるのであるが、fを除いたaからeまでの合計した数値は、9は1.765m、8は1.785m、10は1.675mである。この数値は把頭より右側の先端部分を除いた、大刀形木製品本体の現状の長さを表わしているのである。これにより8と9は近似値を示し、鉢の欠失状況を勘案すればほぼ同じ大きさであることがわかる。10に関しては10cm程度小型の大きさである。また腐蝕の影響がないb、c、d、eの合計は、8は1.17m、9は1.15m、10は1.095mとなり、8と10の差は7.5cmである。このことは各部が3点ともほぼ同じ大きさで作られていることを示し、また鉢の腐蝕による欠失状態もほぼ同じようなものであることが推測される。

	全長	刀身 (a)	幅	鞘口 (b)	幅	把縁 (c)	幅	把間 (d)	幅	把頭 (e)	幅	a+b+c+d+e
1	1.805	61.5	22.5	24.0	25.5	21.5	20.0	46.5	21.0	23.0	27.5	1.765
2	2.095	61.5	20.5	12.5	28.0	28.0	24.2	47.5	20.0	29.0	32.5	1.785
3	1.980	58.0	20.5	12.0	22.5	26.0	18.0	54.0	19.0	17.5	28.5	1.675

表3. 大刀形木製品計測表 (全長の単位はm、このほかはcmで表わす)

fの部分については、把頭に付加されたものであるが、本来はこのようなものはつかない。しかし3点ともこの付加部分が認められ、8、10の腐触具合を見ると、土中にあって腐触したようであり、この木製品の使用方法として鉈を上にして立てられていたことが推定されるのである。

9のA面には把頭部を除いて全面に装飾文様が彫刻されている。文様は刀身部が円形浮文、鞘口、把縁、把間は菱形と三角文を連続させている。

新澤千塚古墳群の327号墳出土の大刀刀身には、円文を主とした連弧輪状文が象嵌されている資料があり、9の文様を考える上でよい類例である。

刀身以外の文様は残り方が悪いものの、かなり明瞭に観察できる。このような文様の類例は、滋賀県長浜市鳴田遺跡出土の木製刀形にある。(木器集成図録 近畿原始篇No.16310) この資料は刀身の鞘口に近いところに、線刻により山形文を連続させ、しかもこれを180度回転させて逆に施文している。このため菱形文が連続しているように見えるのである。10の鉈付近にある小穴は人工的なものであるが、大刀には不用なものである。いずれにせよ2m前後と類例を見ない大型の大刀形木製品であり、他のものの可能性も含めてさらに調査が必要であろう。

石見型盾形木製品(別図2、図版40)

この木製品の説明は、下段と上段に区分し、さらに上段は上1～上5に細分して説明を加える。出土品は2点あり、13は完形品、12は程度の破片である。

13.(別図2-13、図版40) 全長2.635mあり、全体的には左右対称形である。A面について説明を行なう。下段は長さ90cm、上部での幅27cm、中間部では幅23.3cm、下部では幅23cmである。厚みは下部で2.8cmであり、右側に厚く左側では極端に薄い。先端は腐触により不規則な折れかたを呈⁽⁶⁾している。両側面は上に行くにしたがい徐々に直線的に広がる。

上段は全長1.735mあり、主として両側面に鋸がつく上2、上4段と頃部にあたる上5段に分けられる。まず上1段は天地幅45.5cm、下部幅37.5cm、上部幅35.5cmである。左側面では緩く外反するが、右側面は明瞭でない。両側面の下端は両方とも欠失している。復元的には下段の左側面の上端が鋭角的に縫込まれている部分にあたり、両側面には縫はつかないものの、下端は鋭角的に外反する。上2段は天地幅39cm、下部幅42.3cm、上部幅35cmである。右側面は腐触により明瞭でないが、右側面は直線で下方へ開くような台形のラインを作っている。上下で両側面の先端は欠失しているが、突き出しているような形態を呈している。上3段は天地幅13.5cm、下部幅31cm、上部幅31.2cmである。天地幅、左右幅とも最も狭く作られ、中央では緩く湾曲して、ちょうど上段の中間帯を作っているのである。上4段は天地幅35.5cm、下部幅36.7cm、上部幅45.8cmである。両側面は上部へ広がるように直線的に作られている。ちょうど逆台形の形態であり、上3段の中間帯を挟んで対称形を呈している。上5段はこの木製品の最上段にあたり、上端部は腐触により原形を留めていない。天地幅40cm、下部幅41.5cm、上部幅48.5cmである。厚みは3.7cmあり、上端部中央で深さ11cm、上部幅10cm、下部幅8.5cmのコの字形の切れ込みをいれている。横断面はA面側へ

湾曲している。樹種はコウヤマキ、木取りは板目材。

12. (別図2-12、図版40) 下段と上段の右側が欠失している。現状では長さ1.77mである。下部の厚みは1.8cmとかなり薄くなっている。上2段の天地幅は55.5cmである。本来ならば鱗状の部分が付くところである。上3段は天地幅24.5cmで内側に湾曲する。上4段は天地幅29.5cmで逆台形を呈する鱗状の突起が付く。この部分での現状の幅は32.5cmである。上5段は天地幅43cmあり、上端部中央には縦に深さ15cm、幅6.5cmのコの字形の切れ込みをいれている。13とはほぼ同じ大きさである。樹種はコウヤマキ、木取りは不明である。

組み合わせ材

14. (別図2-14、図版40) 両端が腐触により原形を留めていないが、全長3.2mの建築部材とも思われる木製品である。左端より1.145mには上幅50.5cm、下部幅52.5cm、深さ6.5cmの蟻形状のほぞ穴加工と、右端から58cmで幅37cm、深さ4.5cmのほぞ穴状の加工が見られる。このような加工材は愛知県能田旭古墳に類例が見られる。この木製品はほぞ穴の幅が12cm程度であり、しゃもじ形木製品と組み合わせるように考えられているが、当古墳では幅が37cm、50cmとかなり広いのが特徴であり、どのようなものを組み合わせるか問題が多いのである。厚みは中間部では4cmと1.5cmである。樹種はコウヤマキである。

笠形木製品 (別図3、図版41) 笠形木製品は破片もあわせて3点出土している。いずれも2区から出土し、前方部側にはない。また破片の小さな2点は作図していない。

15. (別図3-15、図版41) 二分しているが完全に接合する。平面形は正円ではなく橢円形を呈する。長辺37.5cm、短辺37.3cmである。この数値では3mmしか違わないが、長辺の中軸がちょうど腐触しているのであり復元的には約40cmの大きさになろう。高さは6.7cmであるが右頂部には突起が欠失した痕跡が認められる。ほぞ穴の左側は腰状のくりこみがありこの部分には右側に対称の突起はないようである。ほぞ穴は長方形で中央部にうがたれ、8×9cmの大きさである。笠

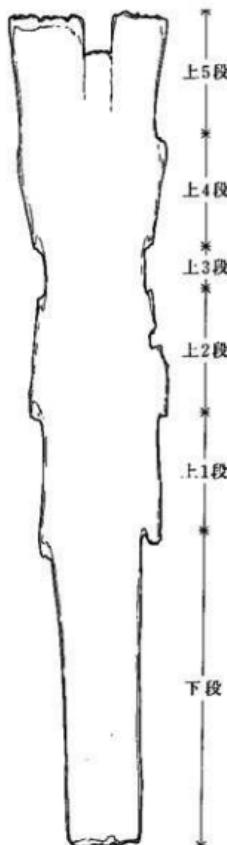


図33. 石見型盾形木製品

表面は腐蝕があるものの直線的な溝状のくりこみをいれている。これは短辺に対して平行し、しかも長軸の中心あたりまで伸びるもの、一本の線で繋がるものはない。笠法面を少し下がったところではひだ状のくりこみは確認できない。断面形は台形を呈し上面は約19cmあり、台部の高さは2cmで内傾し、底面は平坦につくっている。樹種はコウヤマキ、木取りは板目材。

さしば形木製品（別図3）

7.（別図3-7、図版40）腐蝕が激しく当初の形態を呈しているか疑問点がないわけではない。しかし基本形状として、さしば形木製品の特徴を備えているものと思われる。全長1.595mである。頂部の突起は先端が鋭く尖る。この部分の厚みが最も多く残り4cmである。中央の笠部は長さ56cm、幅16.5cmの楕円形である。中心には長さ17.5cm、幅1.8cmのレンズ状の穴を穿つ。柄部は長さ92cmあり、先端は鋭く尖るもの、全体には右側へ歪んでいる。厚みは2cmである。樹種はコウヤマキ、木取りは不明。

杭（別図3）24、25、30、31（別図3-24、25、30、31）24は長85.5cm、厚み4cmである。25は長1.15m、厚み4.5cmである。30は長1.15m、厚み4cm、31は長1.15m、厚みは3.8cmである。4本とも良く似た大きさであり、同時に使用されたものであろう。表面の腐蝕はあまり進んでいない。樹種は4点ともヒノキ属。

用途不明木製品（別図3、図版41） 図示した以外にも板状のものなどもあるが、比較的加工度の高い木製品を図示した。

11. 全長1.945mあり、厚みは5cm程度である。上部右寄りに左右幅10cm、天地幅17.5cmの楕円形の穴を穿つ。下部は左右対称ではないが柄部のようにやや細くなる。樹種はコウヤマキ。17は下部が膨らむ形態を尾している。全長90cm、最大幅30.7cmである。樹種はコウヤマキ。18は全長80cm、幅9.3cmである。両側辺には緩やかな曲線状の加工が見られ、鳥形木製品の体部の様な形状を呈しているが、大きさが半分以下である。樹種はコウヤマキ。木取りは板目材。21は全長90cm、幅26.5cmあり、上部は丸みを持つ。下部で膨らむような加工があり、またこの部分で溝状に掘られた複雑な加工が見られる。樹種はコウヤマキである。22は全長83.5cm、幅20.5cmである。板の表面部分に二つの対照的な長楕円形の穴が掘り込まれている。ただし裏側までは貫通していない。この大きさは長辺14cm、幅4cm、深さ1.4cmでほぼ同じ大きさである。下半部は大きく二股に別れているが、このような形状が当初からのものであるかは判断できない。樹種はコウヤマキ、木取りは板目材。23は全長1.14m、幅14cm、厚み2.4cmの板状の木製品である。樹種はコウヤマキ。32は全長1.62mの棒状木製品である。断面は三角形を呈している。29-1、29-2は出土状況が重なり合うようにあり接合するものと考えられた。2点ともかなり複雑な加工を施し、29-2は幅12.5cm、半径5cmで半円形に造り出す部分がある。良く似た加工であるが接合資料ではない。樹種はコウヤマキである。

VIII まとめ

古墳の復元 (図34) 調査地は東側に限られているため、自ずと限界があるが、一応この時点では御墓山古墳の平面的な部分について、調査成果により復原案を示しておきたい。

1区では前方部の東側側線と前端を検出した。前端部の隅部は東側へ4.5m分であり、この結果、墳丘中軸線からは東側へ25mとなる。西側の隅部は、現状での畦畔部分と重なり、前方部が南側へ5m削平されていることも推測される。そして前方部の幅は50mである。前方部前端ラインから北側の道路敷までは13mあり、この部分が前方部側の濠部分に相当するのであろう。

後円部は2・3区において検出した。現状の墳丘裾部から約5m削平されている。中軸線上において後円部の中心点を求め正円を描いてみると、直径19.5mでほぼ検出した裾部上面のラインに一致する。この結果では墳丘の南側が最も削平を受けているのである。さらに周濠の外肩は、中心点から34.3mで、2区で検出した外肩ラインに一致するのである。このことから濠幅は後円部側では10.3mである。

以上のように各部の数値をもとにして墳丘を見ると、現状での全長は66.7mであるが、復元の全長は74.3mである。後円部と前方部側の濠幅を加えた総長は約97.5mとなり、後期古墳としては馬蹄形の周濠を備えた大型の前方後円墳に復元される。またくびれ部には造り出しの施設があり、いっそう際立った特徴となっているのである。

墳丘は現状では2m程度しか残っていない。しかし出土する埴輪などから、内部主体は横穴式石室が作られていたものと考えられる。場合によっては基底部程度は残存していることも考えられよう。また墳丘部の段については、現状では広い段が見られるのであり、あるいは2段築成の墳丘を推定しても良いかも知れない。

遺物 須恵器、埴輪類についてはほとんど見るべきものがない。木製品については個別に詳しく説明を加えたが、これまで出土しているものと、形態においても、大きさにおいても異例なものが多いのである。特に鳥形木製品とした一群と大刀形木製品は他例がないものである。鳥形木製品については、その名称を含めて今後とも検証が必要であるが、形態の特徴は8点とも共通した基本形があり、しかも各部のサイズについても同じような大きさなのである。このことは、同一のサイズのものが多数作られたことも推定されよう。また鳥形木製品の板面の片面には、体部に溝状の彫り込みがあり、この木製品には表裏の区別があるのである。

鳥形木製品の使用方法は、頭部と尾部の腐触があり進んでいないことから、これを直接地面に突き刺したものではないであろう。墳丘上に直接置くか、Y字形の二股になった木を2本用いて、この上に水平に置くようなことが考えられよう。また8点と多数出土しているところから、元来は数多くあり、墳丘全体を囲繞していたとも考えられる。

大刀形木製品は形態、大きさとも類例のないものである。このうち1点には円形浮文と三角文、

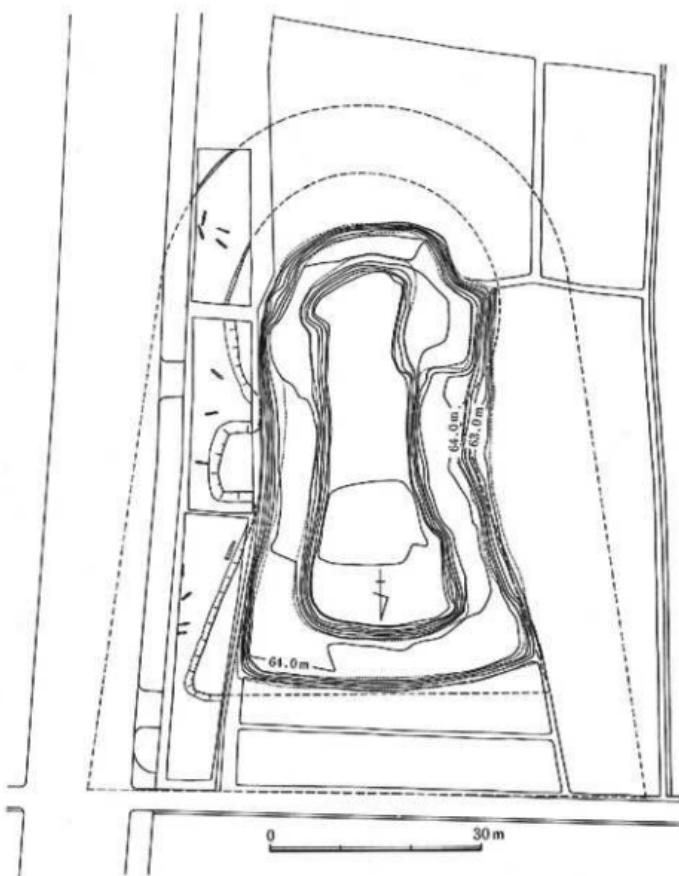


図34. 御基山古墳復元平面図

菱形文を刻出している。このような文様による太刀の装飾は、古代刀においても刀身部などに見られ、あるいは他の木製刀の文様にも見られるのである。この木製品も表裏の区別があった可能性が考えられよう。大刀形木製品の使用方法は、把頭の先端部が土中に埋められていたような腐触があり、鉢を上にして立てていたものと推定される。

石見型盾形木製品は、通有のサイズが1.5m程度であるのに対して、全長が2.6mと異例の大きさのものである。

古墳の築造時期は埴輪、須恵器などから6世紀前半から中ごろと推定されよう。

(参考文献)

1. 茂木雅博『天皇陵の研究』同成社 1990年
2. 秋山日出雄、廣吉壽彦編『元禄年間 山陵記録』由良大和古代文化研究協会 1994年
3. 末永雅雄編著『廟陵記』皇陵古図集成 8巻 青潮社 1982年
4. 「大和古墳墓取調書」由良大和古代文化研究協会研究叢書第5冊 1985年
5. 清水俊明『奈良県史7 石像美術』名著出版 1984年
6. 「大和考古資料目録16 X線調査資料(1)」奈良県立橿原考古研究所附属博物館 1989年 末永雅雄「増補日本上代の武器」木耳社 1981年 本文篇381項、この他に奈良県鳥土塚古墳にも同様の象嵌文様が観察される。(『同目録17(2)』1990年)
7. 「木器集成図録 近畿原始篇」奈良国立文化財研究所 1993年
8. 「能田旭古墳第2次発掘調査報告」人類学博物館紀要第11号 南山大学人類学博物館 1989年

表4. 御墓山古墳出土木材の樹種一覧

	地 区	種 類	樹 種	挿図番号
1	1-22	鳥形	コウヤマキ	別図1-1
2	3-4	〃	コウヤマキ	別図1-2
3	1-27	〃	コウヤマキ	別図1-3
4	2-3	〃	コウヤマキ	別図1-4
5	3-7	〃	コウヤマキ	別図1-5
6	1-7	〃	コウヤマキ	別図1-6
7	2-5	さしば	コウヤマキ	別図3-7
8	2-23	大刀	コウヤマキ	別図2-8
9	2-15	〃	コウヤマキ	別図2-9
10	3-1	〃	コウヤマキ	別図2-10
11	1-2	穴が開いた板	コウヤマキ	別図3-11
12	1-24	石見型盾	コウヤマキ	別図2-12
13	1-1	〃	コウヤマキ	別図2-13
14	1-6	組み合わせ材	コウヤマキ	別図2-14
15	2-18	蓋形	コウヤマキ	別図3-15
16	2-2	鳥形	コウヤマキ	別図1-16
17	2-4	〃?	コウヤマキ	別図3-17
18	1-23	〃?	コウヤマキ	別図3-18
19	2-21	〃	コウヤマキ	—
20	1-17	〃	コウヤマキ	—
21	1-4	大刀?	コウヤマキ	別図3-21
22	1-3	鳥形?	コウヤマキ	別図3-22
23	3-5	板	コウヤマキ	別図3-23
24	3-9	方形棒	ヒノキ属	別図3-24

	地 区	種 類	樹 種	挿図番号
25	3-11	方形棒	ヒノキ属	別図3-25
26	2-19	蓋形	コウヤマキ	—
27	2-1	〃	コウヤマキ	—
28	2-20	〃	コウヤマキ	—
29	1-20	加工板	コウヤマキ	別図3-29 (29-1)
29	1-20	〃	コウヤマキ	別図3-29 (29-2)
30	3-13	方形棒	ヒノキ属	別図3-30
31	3-12	〃	ヒノキ属	別図3-31
32	3-3	〃	コウヤマキ	別図3-32
33	1-8	板状	コウヤマキ	—
34	1-9	〃	コウヤマキ	—
35	1-10	〃	コウヤマキ	—
36	1-11	〃	コウヤマキ	—
37	1-12	〃	コウヤマキ	—
38	1-13	〃	コウヤマキ	—
39	1-15	〃	コウヤマキ	—
40	1-16	〃	コウヤマキ	—
41	1-18	〃	コウヤマキ	—
42	1-19	〃	コウヤマキ	—
43	1-21	〃	コウヤマキ	—
44	1-24	〃	コウヤマキ	—
45	1-25	〃	ヒノキ	—
46	1-26	〃	コウヤマキ	—
47	2-6	〃	コウヤマキ	—

	地 区	種 類	樹 種	挿図番号
48	2-7	板状	コウヤマキ	—
49	2-8	棒状	コウヤマキ	—
50	2-9	//	コウヤマキ	—
51	2-10	板状	コウヤマキ	—
52	2-11	//	コウヤマキ	—
53	2-12	//	コウヤマキ	—
54	2-13	//	コウヤマキ	—
55	2-14	//	コウヤマキ	—
56	2-16	棒状	アカマツ	—
57	2-17	板状	コウヤマキ	—
58	2-24	//	ヒノキ	—
59	2-25	//	コウヤマキ	—
60	3-2	//	コウヤマキ	—
61	3-6	//	コウヤマキ	—
62	3-8	//	ヒノキ	—
63	3-10	//	モミ属	—
64	3-14	//	モミ属	—
65	3-15	方形棒	ヒノキ	—
66	3-16	//	ヒノキ	—
67	3-17	板状	ヒノキ	—
68	3-18	//	ヒノキ	—
69	2A-1	//	コウヤマキ	—
70	D-3	//	コウヤマキ	—
71	No 5	//	コウヤマキ	—

御墓山古墳における自然科学分析

天理大学附属天理参考館 金原 正明

古環境研究所 金原 正子

I はじめに

御墓山古墳の周濠からは多量の木製品が出土した。古墳に使用された木製品は類例が少なく、その樹種同定例も少ない。ここでは御墓山古墳周濠出土木製品の樹種を明らかにするとともに、花粉分析を行い植生復元を行い、古墳における自然科学的データの基礎的な提示を行う。

2. 木製品の樹種同定

1) 試料と方法

試料は、御墓山古墳周濠出土の木製品で71点であり、鳥形、さしば、太刀、石見型盾、板状など古墳特有なものが含まれる。

試料からカミソリを用いて木材の横断面、放射断面、接線断面を作製し、生物顕微鏡によって60~600倍で観察した。樹種同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

2) 結果

結果は表1に一覧する。以下に各樹種の特徴を記す。

a. モミ属 *Abies* マツ科

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。横断面では早材から晩材への移行は比較的緩やかである。放射断面では放射柔細胞の分野壁孔がスギ型で1分野に1~4個存在する。放射柔細胞の壁が厚く、じゅず状末端壁を有する。接線断面では放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質より、モミ属に同定される。モミ属は日本に5種が自生し、その内ウラジロモミ、トドマツ、シラビソ、オオシラビソの4種は亜寒帯に分布し、モミは温帯を中心に分布する。常緑高木で高さ45m、径1.5mに達する。材は保存性が低く軽軟であるが、現在では多用される。

b. アカマツ *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc. マツ科

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管、垂直及び水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成される針葉樹材である。横断面で早材から晩材への移行は急である。放射断面においては放射柔細胞の分野壁孔が窓状である。放射仮道管の内壁には著しい鋸歯状肥厚が存在する。接線断面で放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質よりアカマツに同定される。アカマツは、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。

常緑高木で、高さ40m、径2mに達する。材は重硬な良材で水湿によく耐え、広く用いられる。

c. コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc. コウヤマキ科

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。横断面では早材から晩材への移行は比較的ゆるやかで、晩材部の幅は狭い。放射断面では放射柔細胞の分野壁孔が窓状である。接線断面で放射組織は単列の同性放射組織型で、1~15細胞高である。

以上の形質よりコウヤマキに同定される。コウヤマキは福島県以南の本州、四国、九州に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ30m、径80cmに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靭、耐朽性及び耐湿性も高い。特に耐水湿材として用いられる。

d. ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科

仮道管、樹脂細胞及び放射柔細胞から構成される針葉樹材である。横断面において早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅はきわめて狭い。樹脂細胞が見られる。放射断面で放射柔細胞の分野壁孔がヒノキ型で1分野に2個存在するものがほとんどである。接線断面では放射組織は単列の同性放射組織型で、1~15細胞高である。

以上の形質よりヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靭、耐朽、耐湿性も高い。良材であり、建築など広く用いられる。

e. ヒノキ属 *Chamaecyparis* ヒノキ科

横断面 放射断面、接線断面共にヒノキ科の特徴を示し、分野壁孔は1分野に2個存在するが、分野壁孔の型が不明瞭なものはヒノキ属とした。

3) 考察

本古墳周濠出土の木製品はコウヤマキがほとんどを占め、ヒノキ、ヒノキ属、モミ属がわずかという結果であった。コウヤマキが多いのは明らかな特徴であり、近畿地方中央部の古墳から出土している木製品の用材の特徴といえる。意識的な選材が考えられる。コウヤマキは特に水湿に耐えるため、それを念頭においた選材の可能性が高い。

3. 花粉分析

1) 試料

試料は発掘区の東壁と北壁の周濠堆積物を含む地点で柱状に採取した。東壁では下位の試料6~11が周濠本来の堆積で泥炭質粘土であり、それより上位は褐色土ないし灰色土で耕作土の累積である。北壁も層序は類似し、下位の試料4~7が泥炭質粘土で周濠本来の堆積物であり、上位は黄灰褐色土となり耕作土の累積である。

2) 方法

花粉粒の分離抽出は、試料に以下の順で物理化学処理を施して行った。

- i) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- ii) 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
- iii) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- iv) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトトリシス処理(無水酢酸9:1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す。
- v) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
- vi) 沈澱に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン(－)で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。

3) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉31、樹木花粉と草本花粉を含むもの4、草本花粉31、シダ植物胞子2形態の計68である。これらの学名と和名および粒数を表1に示す。主要な分類群を写真に示す。以下に出現した分類群を示す。

〔樹木花粉〕

モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、マツ属單維管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、ヤマモモ属、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属－アサダ、クリーシイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、エノキ属－ムクノキ、サンショウウ属、ウルシ属、カエデ属、トチノキ、ブドウ属、グミ属、ミズキ属、モクセイ科、トネリコ属、ニワトコ属－ガマズミ属、スイカズラ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科、バラ科、マメ科、ウコギ科

〔草本花粉〕

ガマ属—ミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ホシクサ属、イボクサ、ミズアオイ属、タデ属サナエタデ節、ソバ属、アカザ科—ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、アブラナ科、ワレモコウ属、ソラマメ属、ツリフネソウ属、ノブドウ、ヒシ属、ミズユキノシタ属、セリ科、シソ科、ナス科、オオバコ属、オミナエシ科、ゴキヅル、タンポポ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

单条溝胞子、三条溝胞子

4) 層位における変遷

東壁では下位の試料11、10、9でエノキ属—ムクノキ、コナラ属アカガシ亜属を主にマツ属複維管束亜属などの樹木花粉の出現率が高い。草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、セリ科、ゴキヅル、ガマ属—ミクリ属、オモダカ属などが出現する。試料8、7、6の層準ではエノキ属—ムクノキが激減し、イネ属型を含むイネ科が急増する。それに伴ってガマ属—ミクリ属、セリ科、ゴキヅルが減少し、ソバ属が特徴的に出現する。試料5でも同じ傾向である。試料4、3の層準では花粉が少なくなる。試料2、1になると、樹木花粉ではマツ属複維管束亜属とスギが優占し、草本花粉ではイネ属型を含むイネ科、アブラナ科が優占する。

北壁では下位の試料7ではマツ属複維管束亜属を主に、コナラ属アカガシ亜属、スギ、エノキ属—ムクノキなどの樹木花粉の出現率が高い。草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、セリ科、ヨモギ属や水湿地植物が出現する。試料6、5、4の層準になるとイネ属型を含むイネ科が急増し、マツ属複維管束亜属が減少する。試料3、試料2の層準ではイネ属型ないしイネ科が高率である。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属とスギの出現率がやや高い。

5) 花粉分析からみた植生と環境

東壁の下部（試料11、10）ではエノキ属—ムクノキの出現率が高く、北壁の試料ではマツ属複維管束亜属が多い。周濠の下部の堆積ではほぼ同層準であり、部分的な植生を反映したものと考えられる。エノキ属—ムクノキとマツ属複維管束亜属（アカマツかクロマツ）は植生が破壊された後に二次的に多くなる樹木であり、古墳築造後に二次林の状態で多くなったと考えられる。周濠はガマ属—ミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、カヤツリグサ科、ミズアオイ属などの水湿地植物が繁茂していた。東壁のほうは水湿地植物が多いためやや安定した水湿地の状態であったとみなされ、北壁周辺は湿地の状態であったと考えられる。周辺地域の森林植生はカシ類（コナラ属アカガシ亜属）を主にスギを交えた照葉樹林であったと考えられる。

水湿地植物からみて周辺は東壁も北壁の地点も泥炭質粘土（東壁試料6まで、北壁試料4まで）の時期は水湿地ないし湿地であったとみなされ、東壁では試料8の層準から北壁では試料6の層準からイネ属型を含むイネ科が増加し、周囲の水田が著しく拡大したとみなされる。ソバ属が出現することから、畑作も伴って増加したと推定される。

東壁と北壁とも上部では花粉が少なくなり、かなり乾燥ないし乾湿を著しく繰り返す堆積環境になったと推定される。最上位の東壁の試料2、1ではイネ属型を含むイネ科とアブラナ科が優占し、水田と畑の集約化が行われたとみなされる。森林植生はニヨウマツ類（マツ属複維管束亞属、クロマツかアカマツ）とスギが優勢であり、二次林ないし人工造林の反映と考えられる。

なお、糠虫卵が下部で検出されているが、居住域が近くにあり、そこからの汚染と考えられる。

参考文献

- 中村純（1973）花粉分析、古今書院、p. 82-110。
金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原、新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法、角川書店、p. 248-262。
中村純（1977）稲作とイネ花粉、考古学と自然科学、第10号、p. 21-30。

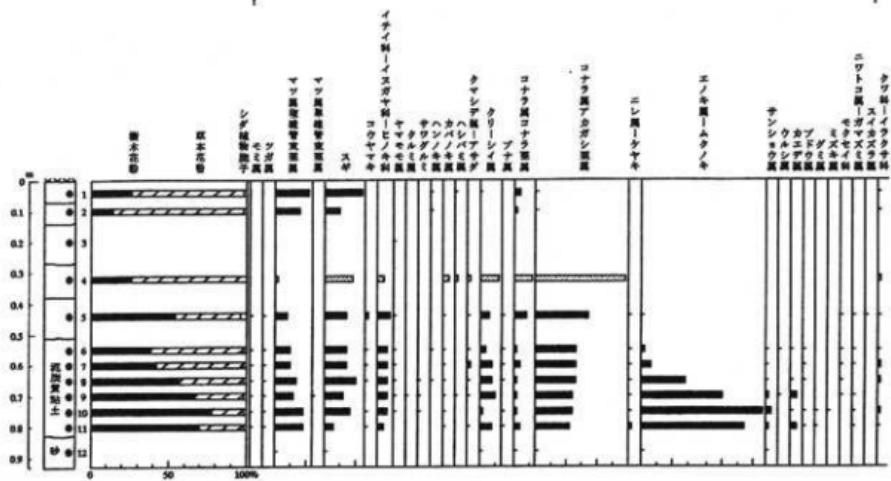
試 料		樹 種 (和 名 / 学 名)
No.1	1-22	鳥形
No.2	3-4	鳥形
No.3	1-27	鳥形
No.4	2-3	鳥形
No.5	3-7	鳥形
No.6	1-7	鳥形
No.7	2-5	さしば
No.8	2-23	太刀
No.9	2-15	太刀
No.10	3-1	太刀
No.11	1-2	六が開いた板
No.12	1-24	石見型盾
No.13		石見型盾
No.14	1-6	組合せ材
No.15		蓋形
No.16	2-2	鳥形
No.17	2-4	鳥形?
No.18	1-23	鳥形?
No.19	2-21	鳥形 破片
No.20	1-17	鳥形 破片
No.21	1-4	太刀?
No.22	1-3	鳥?
No.23	3-5	板
No.24	3-9	方形棒
No.25	3-11	方形棒
No.26	2-19	蓋形
No.27	2-1	蓋形
No.28	2-20	蓋形
No.29-1	1-20	加工板
No.29-2	1-20	加工板
No.30	3-13	方形棒
No.31	3-12	方形棒
No.32	3-3	方形棒
No.33	1-8	板状
No.34	1-9	板状
No.35	1-10	板状
		コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
		コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
		コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
		コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
		コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
		コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
		コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
		コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
		コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
		コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
		コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
		コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
		コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
		コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
		コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
		ヒノキ属 <i>Chamaecyparis</i>
		ヒノキ属 <i>Chamaecyparis</i>
		コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
		コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
		コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
		ヒノキ属 <i>Chamaecyparis</i>
		ヒノキ属 <i>Chamaecyparis</i>
		コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
		コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
		コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.

試 料

樹 種 (和 名 / 学 名)

No.36	1-11	板状	コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
No.37	1-12	板状	コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
No.38	1-13	板状	コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
No.39	1-15	板状	コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
No.40	1-16	板状	コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
No.41	1-18	板状	コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
No.42	1-19	板状	コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
No.43	1-21	板状	コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
No.44	1-24	板状	コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
No.45	1-25	板状	ヒノキ <i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
No.46	1-26	板状	コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
No.47	2-6	板状	コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
No.48	2-7	板状	コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
No.49	2-8	棒状	コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
No.50	2-9	棒状	コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
No.51	2-10	板状	コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
No.52	2-11	板状	コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
No.53	2-12	板状	コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
No.54	2-13	板状	コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
No.55	2-14	板状	コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
No.56	2-16	棒状	アカマツ <i>Pinus densiflora</i> Sieb. et Zucc.
No.57	2-17	板状	コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
No.58	2-24	板状	ヒノキ <i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
No.59	2-25	板状	コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
No.60	3-2	板状	コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
No.61	3-6	板状	コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
No.62	3-8	板状	ヒノキ <i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
No.63	3-10	板状	モミ属 <i>Abies</i>
No.64	3-14	板状	モミ属 <i>Abies</i>
No.65	3-15	方形棒	ヒノキ <i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
No.66	3-16	方形棒	ヒノキ <i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
No.67	3-17	板状	ヒノキ <i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
No.68	3-18	板状	ヒノキ <i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
No.69	2A-1	板状	コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
No.70	B-3	板状	コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.
No.71	No5	板状	コウヤマキ <i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.

-樹木花粉-



-草木花粉-

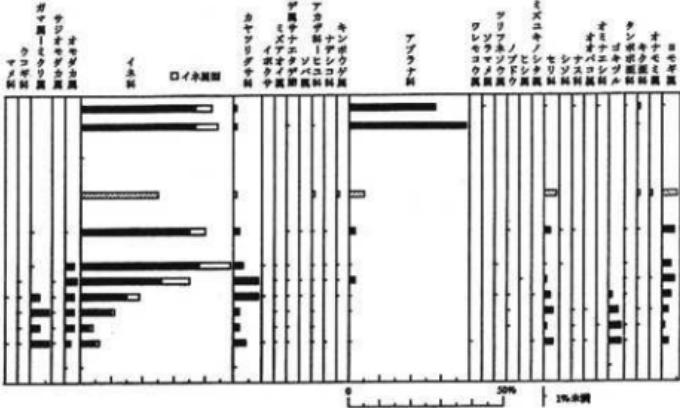


図35. 御墓山古墳東壁における花粉組成図（花粉総数が基準）

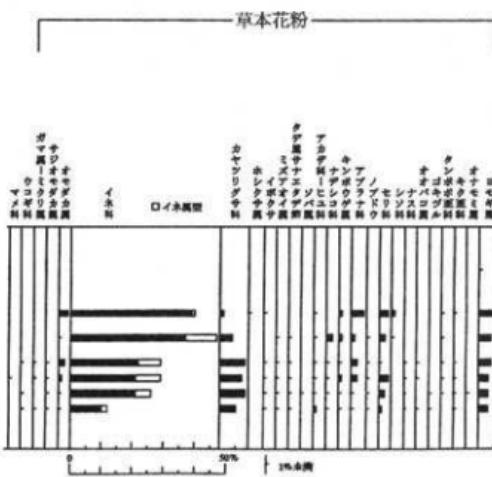
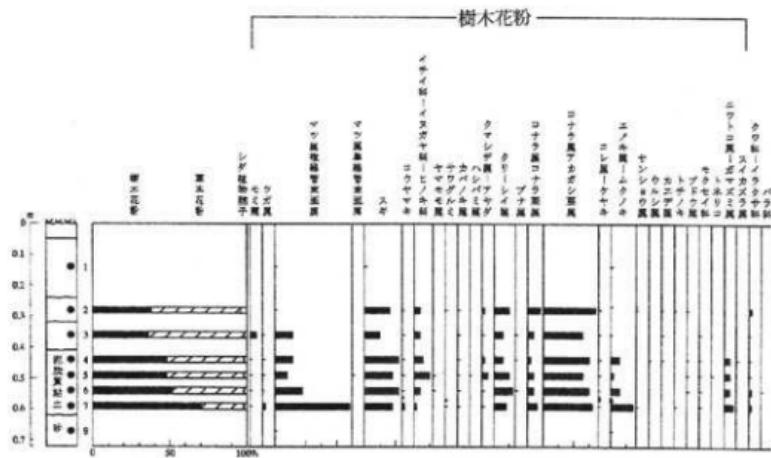


図36. 御墓山古墳北壁における花粉組成図（花粉総数が基数）

学名	和名	花粉分析結果							
		1	2	3	4	5	6	7	8
ArboREAL pollen	樹木花粉								
<i>Abies</i>	モミ属			8	1	3	1	1	
<i>Tsuga</i>	ツガ属			1	1	1	5		
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属 ダクサギ属	1	2	25	34	18	47	110	1
<i>Pinus subgen. Haploxyylon</i>	マツ属 ヒノキ属					1			
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	1	28	22	57	40	62	40	
<i>Schizodipteryx verticillata</i>	コウヤマキ		1	1	1	1	3	5	
Taxaceae-Cephalotaxaceae	イチイ科-イヌガヤ科 -ヒノキ科	6	9	15	22	12	5		
Cupressaceae									
<i>Myrica</i>	ヤマモモ属					1	1		
<i>Pterocarya rhoifolia</i>	サワグルミ		1					1	
<i>Betula</i>	カバノキ属	2	2	3	2	2	2	3	
<i>Corylus</i>	ハシバミ属					1			
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属、アサダ	5	3	6	7	5	2		
<i>Castanea crenata-Castanopsis</i>	クリ-シイ属	18	12	17	22	32	17		
<i>Fagus</i>	ブナ属			1	3				
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属 コナラ属アカガシ属	13	6	6	10	9	12		
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ属	60	52	79	57	83	71		
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ	1	2	2	3	2	3		
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ	2		14	6	14	31	2	
Zanthoxylum	サンショウウ属	1					3		
Rhus	ウルシ属				1				
Acer	カエデ属	1	1	1					
Aesculus turbinata	トドメノキ							1	
Vitis	ブドウ属	3		2	4	4	3		
Oleaceae	モクセイ科		1	4	2	3	2		
Fraxinus	トネリコ属					1			
Sambucus-Viburnum	ニワトコ属-ガマズミ属			8	7	11	12		
<i>Loniceria</i>	スイカズラ属			1					
ArboREAL - NonarboREAL pollen	樹木-草本花粉								
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	5	1	3	1	6	6		
Rosaceae	バラ科					1			
Leguminosae	マメ科								
Araliaceae	ウコギ科			1		2	1		
NonarboREAL pollen	草本花粉								
<i>Typha-Sparganium</i>	ガマ属-ミクリ属			1	1			3	
<i>Alisma</i>	サジオモダカ属			1	1	5	4		
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属	9	3	13	5	5	2		
Gramineae	イネ科	142	154	119	89	115	45		
Oryza type	イネ属型	2	43	39	35	28	11		
Cyperaceae	カヤツリグサ科	4	17	43	30	43	24		
Eriocaulon	ホシクサ属	1							
Anemone kiskei	イボクサ	1		2	2	1	1		
Monochoria	ミズアオイ属		1	4	4	3	1		
Polygonum sect. Persicaria	タデ属サナエタデ節		1	2	2	1	2		
Fagopyrum	ソバ属								
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	1	1	2	3	5	6		
Caryophyllaceae	ナデシコ科		7	1	1	3	2		
Ranunculus	キンポウゲ属	4	4	4	5	3	1		
Cruciferae	アブラナ科	14	5	10	9	4	3		
<i>Ampelopsis brevipedunculata</i>	ノブドウ		1	2	2	2	1		
Umbelliferae	セリ科	9	8	2	15	10	5		
Labiatae	シソ科	4	2						
Solanaceae	ナス科			1	1	1	1		
Plantago	オオバコ属			2	3				
Actinostemma lobatum	ゴキヅル						2	1	
Lactuceidae	タンポポ属	3	1	3	1	1			
Asteroidae	キク属	2		3	1	2	1		
Xanthium	オナモミ属					1			
Artemisia	ヨモギ属	1	19	16	22	14	16	12	
Fern spore	シダ植物孢子								
Monocolpate spore	单孔孢子	3	1		1	3	7		
Trilete spore	三孔孢子	8	4	2	4	5	2		
ArboREAL pollen	樹木花粉	4	143	148	256	209	292	324	3
ArboREAL - NonarboREAL pollen	樹木-草本花粉	0	5	1	4	2	9	7	0
NonarboREAL pollen	草本花粉	1	215	264	276	224	252	127	0
Total pollen	花粉總數	5	363	413	536	435	553	458	3
Unknown pollen	未同定花粉	1	1	2	3	2	0	0	
Fern spore	シダ植物孢子	0	11	5	2	5	8	9	0
Helmint eggs	寄生虫卵								
Trichuris	鞭虫卵						1	1	

表5. 御墓山古墳における花粉分析結果(1)

学名	和名	高頻											
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
ArboREAL pollen	樹木花粉												
<i>Abies</i>	モミ属						2	1	1	3	1	1	1
<i>Tsuga</i>	ツガ属						1	2	1	1	3	1	1
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複被管束亞属	41	31		1	14	23	28	39	23	44	48	5
<i>Pinus subgen. Haploxyylon</i>	マツ属單被管束亞属												
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	46	19		9	26	31	37	54	25	40	17	4
<i>Sciadopitys verticillata</i>	コウヤマキ					4	1	3	2	1	1	1	
Taxaceae-Cephalotaxaceae	イチイ科-イヌガヤ科				2	15	13	13	17	13	16	8	
	-Cupressaceae												
<i>Myrica</i>	ヤマモモ属												
<i>Juglans</i>	クルミ属						1	2	1	1	1	1	
<i>Pterocarya rhoifolia</i>	サワグルミ属												
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	2	3				1				1	1	2
<i>Betula</i>	カバノキ属					2	3	1	2	4	2	3	3
<i>Corylus</i>	ハシバミ属	1					1				1		
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ						1	2	2	5	3	1	
<i>Castanea crenata-Castanopsis</i>	クリ-シタ属	1			6	10	9	23	24	20	6	20	1
<i>Fagus</i>	ブナ属					3	1	3	3	1			
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	7	5		6	14	6	11	6	5	6	13	2
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1	1		30	63	58	66	73	46	62	62	3
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ					1	2	4	1	1	2	6	
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ					3	5	16	79	104	202	180	2
<i>Zanthoxylum</i>	サンショウ属						2	1	3	5	11	7	1
<i>Rhus</i>	ウルシ属						1			1			
<i>Acar</i>	カエデ属						4		4	9	2	10	
<i>Vitis</i>	ブドウ属					3	2	1		1		1	
<i>Elaeagnus</i>	グミ属												
<i>Cornus</i>	ミズキ属												
<i>Cleaceae</i>	ミクセイ科					1	1	2	1	1			
<i>Sambucus-Viburnum</i>	ニワトコ属-ガマズミ属				2	2	4			1	3	3	
<i>Loniceria</i>	スイカズラ属						1						
ArboREAL - Nonarboreal pollen	樹木-草本花粉												
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	2	1		1	3	2	5	7		5	3	
Leguminosae	マメ科								1		2		
Araliaceae	ウコギ科						1	1	1	2	2		
Nonarboreal pollen	草本花粉												
<i>Type-Spartanium</i>	ガマ属-ミクリ属						1	2		16	25	16	32
<i>Alisma</i>	サジオモダカ属							1	1	2	2		
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属						1	13	23	19	12	15	10
Gramineae	イネ科	138	141	3	26	129	170	134	85	41	16	26	1
<i>Oryza type</i>	イネ属	18	27			19	46	47		22	3	1	3
Cyperaceae	カヤツリグサ科					1	9	14	42	48	9	12	22
<i>Anemone keiskei</i>	イボクサ科	4	4				1					3	
<i>Monochoria</i>	ミズアオイ属							3	1	3	1	1	2
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節					1		1	1	1	1	1	1
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属						1						
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科					1	1	1	1	1	1	1	
Caryophyllaceae	ナデシコ科						1	2	2	2	1	1	1
Ranunculus	キンポウゲ属						1	2	2	2			
Cruciferae	アブラナ科	103	142		5	8	3	11	3	3	3		1
<i>Sanguisorba</i>	ワレモコウ属												
<i>Vicia</i>	ソラマメ属	1											
<i>Impatiens</i>	ツリフネソウ属												
<i>Ampelopis brevipedunculata</i>	ノブドウ						1			1	1	1	
<i>Type</i>	ヒシ属								1				
<i>Ludwigia</i>	ミズユキノシタ属												
Umbelliferae	セリ科	1			4	8	3	5	9	10	7	14	
Labiatae	シソ科					1	1						
Solanaceae	ナス科												
Plantago	オオバコ属						3			1	2	2	
Valerianaceae	オミナエシ科												
<i>Actinostemma lobatum</i>	ゴキヅル	1											
Lactucoideae	タンボボ薺科	2			1	1	3		6	12	18	23	1
Asteroideae	キク属科	4	1		1	2	1	1	1		1		
Xanthium	オナモミ属						1			1			
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	1			5	16	11	20	16	7	6	11	
Fern spore	シダ植物胞子												
Monolete type spore	單果胞子	1	1		2	3	1	2	3		1		
Trilete type spore	三余胞子	2		3	12	11	8	3	2	3	2		
ArboREAL pollen	樹木花粉	99	59	1	58	167	170	223	321	267	407	385	18
ArboREAL - Nonarboreal pollen	樹木-草本花粉	2	1	0	1	3	2	6	9	1	7	7	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	274	317	3	45	203	275	297	239	131	102	158	5
Total pollen	花粉總數	375	377	4	104	373	447	526	569	399	516	550	23
Unknown pollen	未同定花粉	1	2	0	3	3	2	3	5	4	12	7	2
Fern spore	シダ植物胞子	3	1	0	5	15	12	10	6	2	4	2	0

表 6. 御墓山古墳における花粉分析結果(2)

図 版

図版1 平等坊・岩室遺跡(1)

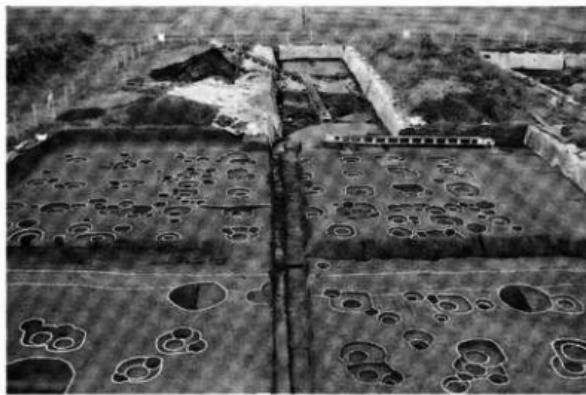
第8次調査



8 E S区
方形区画の大溝完掘状況
(東から)



8 E N区
方形区画大溝遺物出土状況
(北から)



8 E T区
上面掘立柱建物群
(西から)



調査区全景
(北から)



SD-00
完掘状況
(東から)



SD-02
遺物出土状況
(東から)



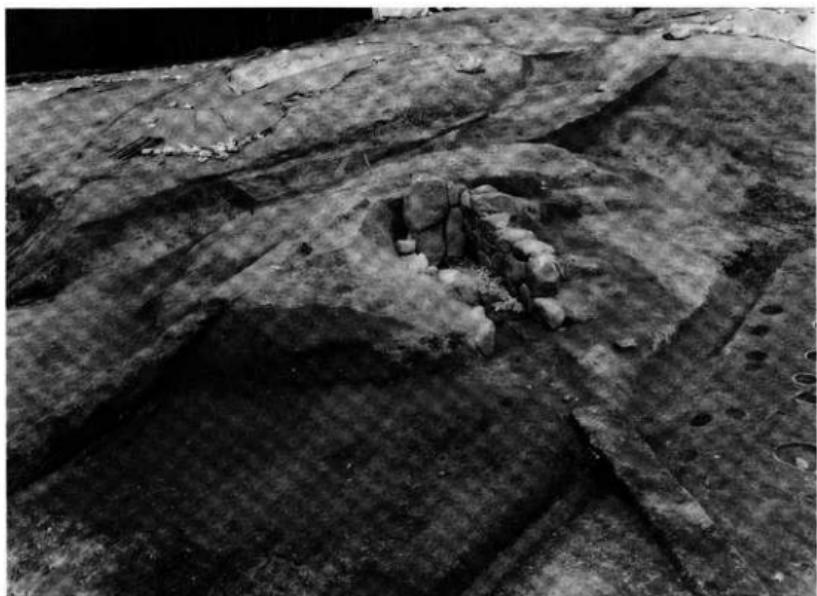
調査区全景
(西から)



SD-01
遺物出土状況
(北から)



SD-02
絵画土器出土状況
(西から)



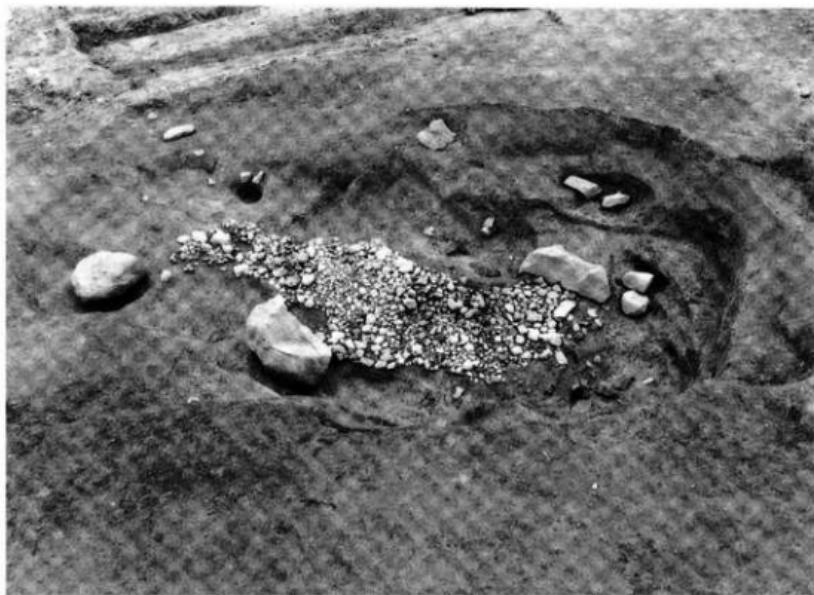
シギ山支群1号墳全景（南から）



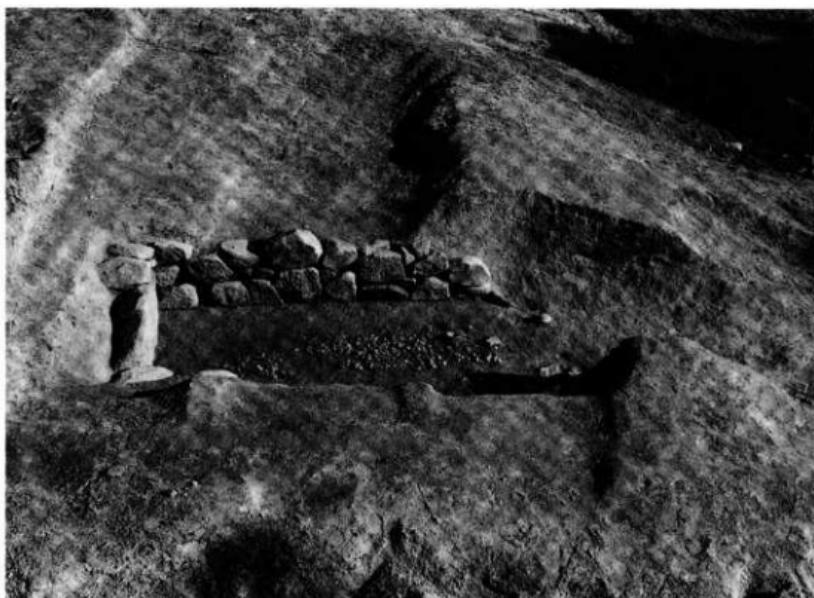
シギ山支群1号墳石室（西から）



シギ山支群 2号墳全景（南から）



シギ山支群 2号墳石室の残骸（東から）



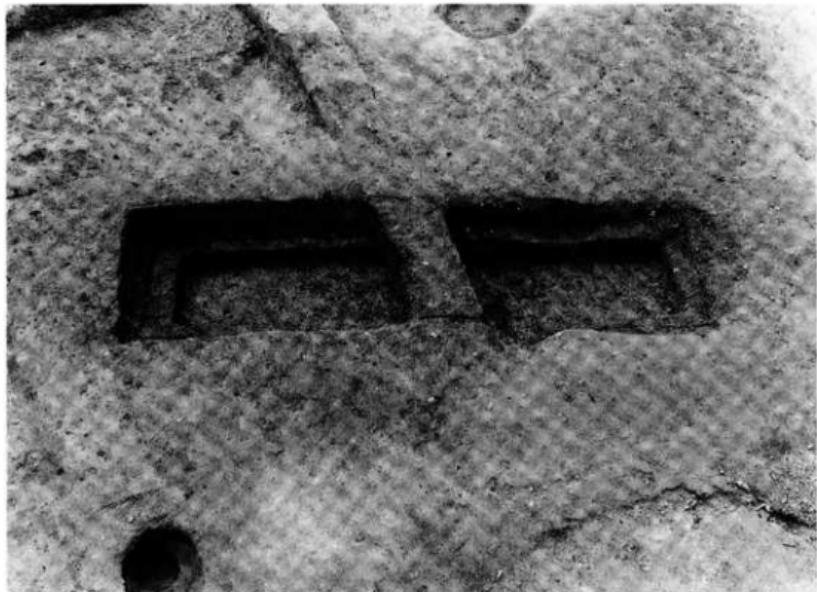
シギ山支群 4 号墳石室（西から）



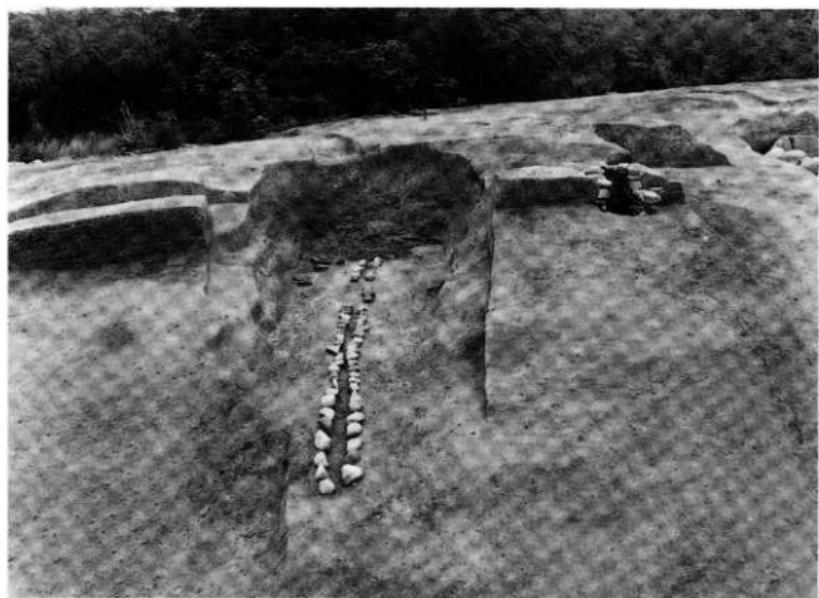
シギ山支群 4 号墳石室内（南から）



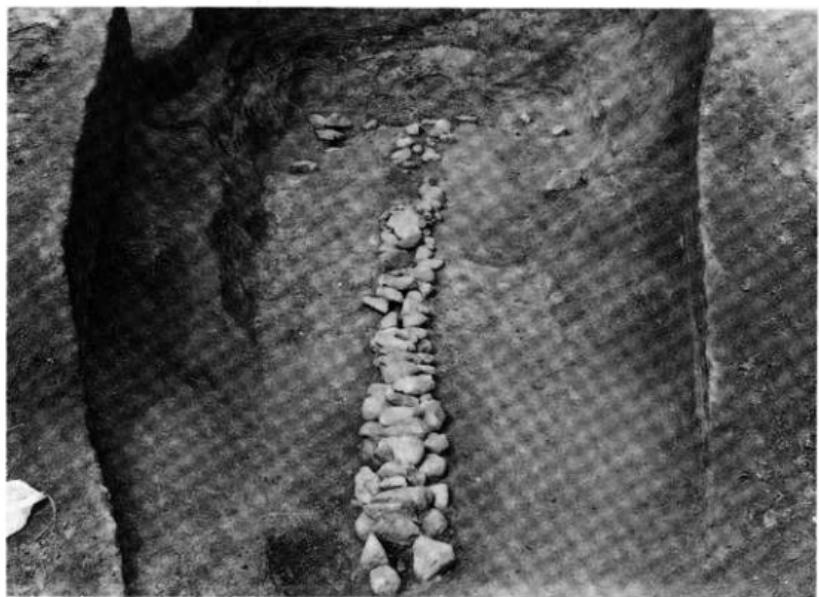
シギ山支群 5号墳石室の残骸（南から）



シギ山支群 3号墓木棺埋葬（西から）



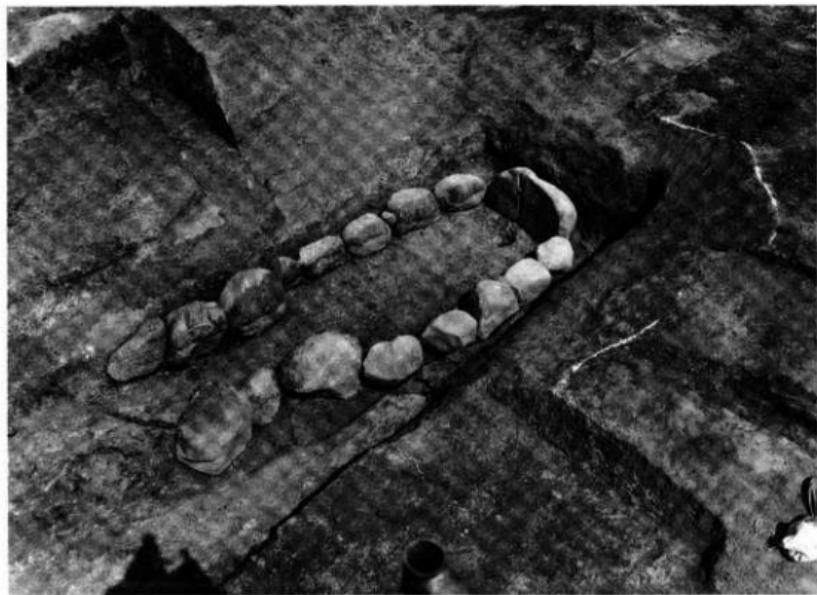
シギ山支群 6号墳と小石室（南から）



シギ山支群 6号墳石室の残骸（南から）



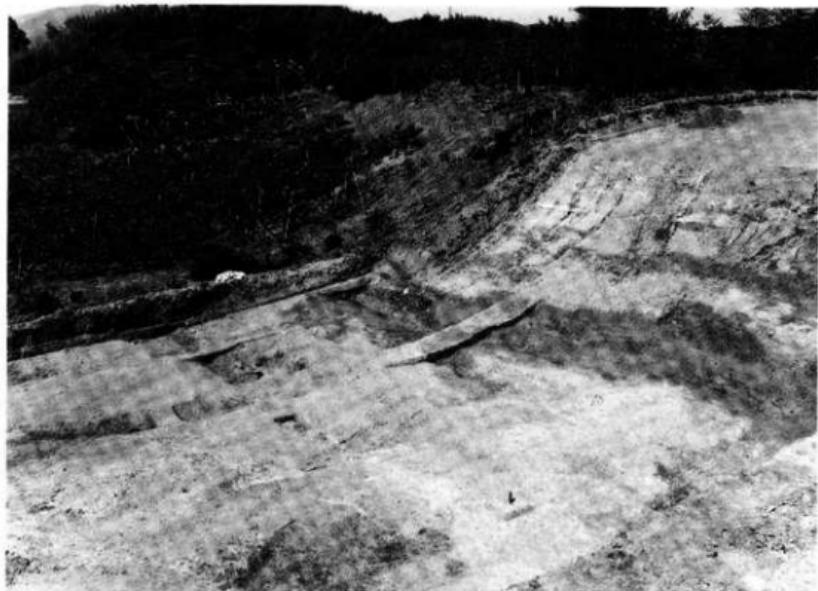
シギ山支群7号墳石室（南から）



シギ山支群7号墳石室と墓塚（東から）



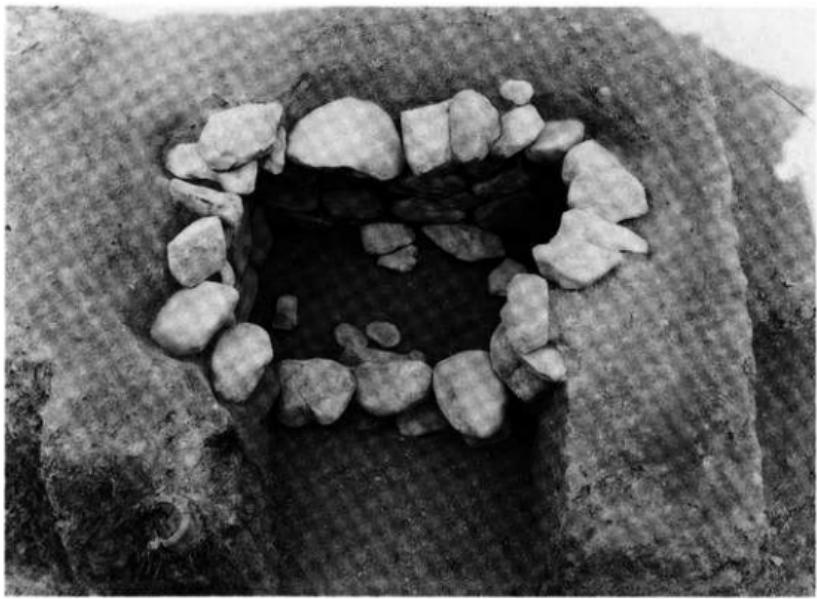
シギ山支群 6・7号墳全景（東から）



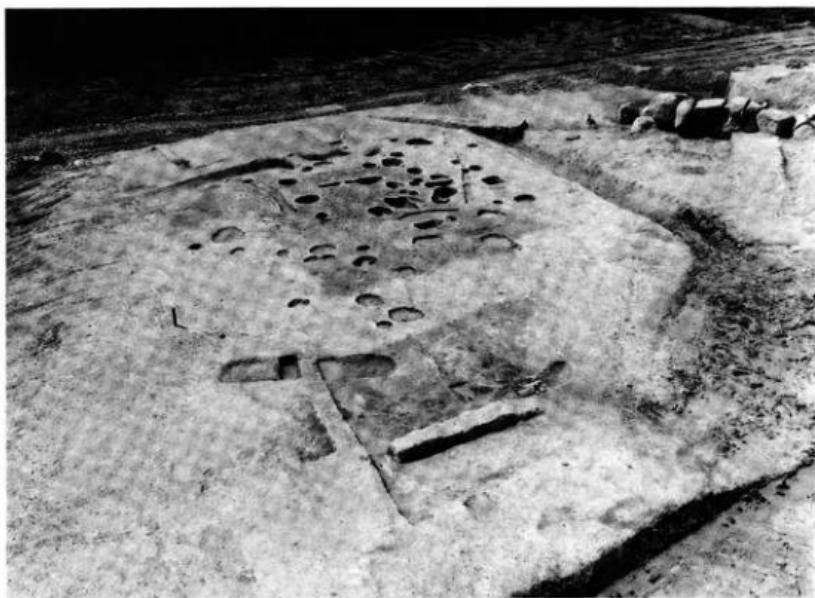
シギ山支群 6号墳小石室（東から）



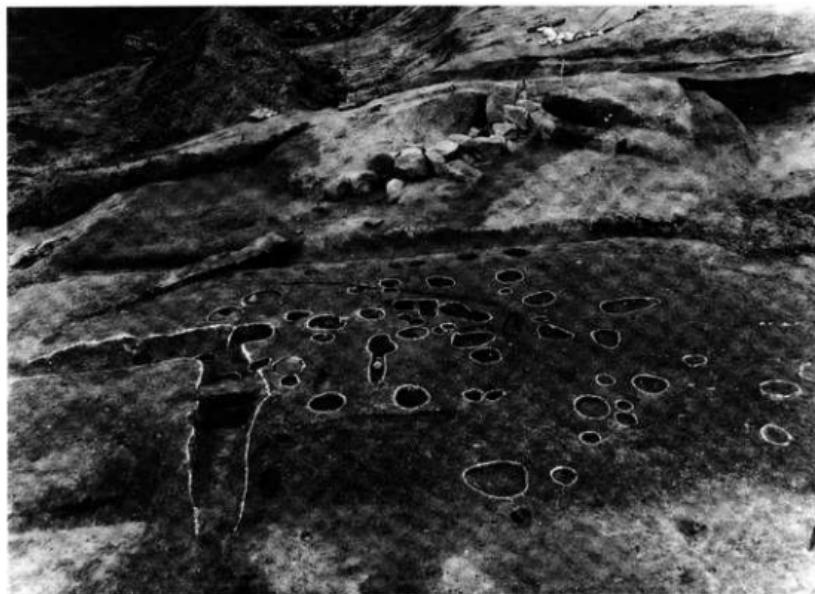
北・柱穴遺構群（南から）



西下段・遺構群（南から）



南・柱穴遺構群全景（東から）



南・柱穴遺構群と1号墳（南から）



調査区全景（北から）



調査区全景（南から）